厚生労働科学研究費補助金

障害者対策総合研究事業

（身体・知的等障害分野）

知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究

平成24年度　総括・分担研究報告書

研究代表者　深津　玲子

平成25（2013）年　3月

目　　次

I. 総括研究報告

知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究 ---------- 1

深津 玲子

II. 分担研究報告

1. 重度知的障害者の地域生活移行に関する研究 ----------9

高木　晶子　永吉　敏広　齋藤　信哉　須永 貴之　滝澤　剛敏　遠藤　圭子

藤井　知亨　黒田　憲治

2. 軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究 ----------36

深津　玲子　四ノ宮　美恵子　小林　菜摘

3. 発達障害者支援のためのICF-Basedアセスメント開発の試み ----------44

深津　玲子　四ノ宮　美恵子　鈴木　さとみ

（資料）ICF（国際生活機能分類）をもとにした活動・参加に関する調査　調査紙----------55

4. 知的障害者の生活の補完的手段の研究 ----------64

石渡　利奈

ICF支援ツール一覧----------69

ICFに基づく支援ツールマップ----------74

5. 重度知的障害者のきょうだいへの「障害者の将来」に関する

情報提供パンプレットの作成と評価 ----------80

北村　弥生　上田　礼子

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 ----------85

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
総括研究報告書

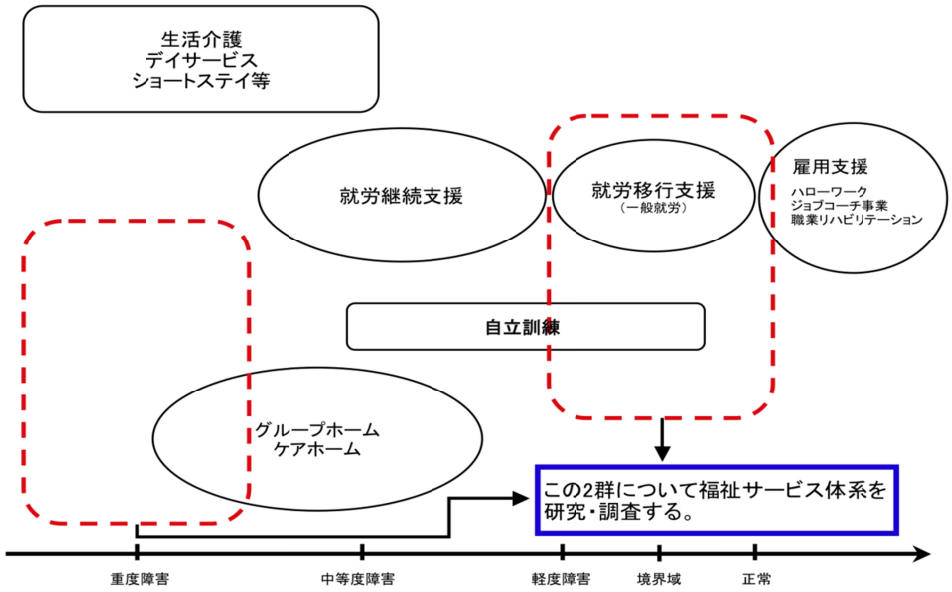
知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究

研究代表者　深津　玲子　国立障害者リハビリテーションセンター

研究要旨

現在福祉サービス体系が十分には整備されていないと考えられる 2 つの群である、重度知的障害者群（重度群）と軽度～境界域知的障害者群（軽度群）の地域生活移行に関する支援手法の開発及び体系を提言するため、１．重度知的障害者入所施設における地域移行支援の実施と困難要因の分析、２．発達障害を伴う軽度群に対する福祉サービスとしての就労移行支援のプログラムの開発、３．その一環として、就労を目指す発達障害者の支援ニーズを明らかにするアセスメントツールの開発、４．発達障害を伴う軽度群の生活補完及び就労支援に役立つ支援機器に関する調査、５．施設入所中の重度群および自宅で同居する軽度群のきょうだいの課題の抽出と対応方法に関する調査を行っている研究の３年目報告である。

今年度の研究では、重度知的障害者入所施設における地域移行については、個人の身体・知的重症度および異常行動といった心身機能は移行を困難にする因子とはなりにくく、家族の理解や地域の支援体制といった環境因子が大きく関与する可能性が示唆された。発達障害を伴う軽度群に対する就労移行支援では、一定の手続きを経て、就労移行支援モデルの開発を行った。開発した就労移行支援モデルにもとづいて支援を行った対象者の就労移行支援利用期間は、開発前に支援を行った対象者と比較して 3.5 月短くなり、１５ヶ月であった。また、地域の障害者就業・生活支援センターとの連携による職場定着支援を行い、離職者は出ていなかった。就労を目指す発達障害者のアセスメントツール作成については、国際生活機能分類（以下 ICF と記す）に基づきアセスメントシートを開発、検定の結果、発達障害者と統制群とで ICF 総得点に有意差がみられた（$p<0.01$）。また、発達障害当時者と支援者では、支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっているか、ニーズを拾いきれていないことが示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害者の就労に役立つ支援機器に関する研究では、68 の個別支援ツールを抽出し、縦軸を ICF の心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。きょうだい研究については、昨年度まで研究で「障害者の将来の生活」が青年期および成人期のきょうだいの最も大きな課題であると示唆された調査結果をもとに、「障害者の将来」に関する情報パンフレットを作成し、重度群きょうだいに送付し、内容は妥当と評価はされたが、保護者ときょうだいの不安を解決するには及ばず、今後も課題解決に向けたきょうだい支援を検討する必要があることを示唆する。



A．研究目的

現在福祉サービス体系が十分には整備されていない重度知的障害者群（重度群）と軽度～境界域知的障害者群（軽度群）について、地域生活移行のための福祉サービスを用いた支援手法について調査研究を行い、地域生活の実現に必要な支援手法と体系を提言する（図１）。具体的には、以下の５点を明らかにする。

１．　重度群の地域生活支援体系を、入所施設における地域生活移行を通して検討し、地域生活移行を困難にする因子を分析する。
２．　発達障害を伴う軽度群に対する福祉サービスとしての就労移行支援のプログラムを開発する。
３．　その一環として、就労を目指す発達障害者の活動と参加を国際生活機能分類（以下 ICF と記す）に基づき評価し、支援ニーズを明らかにするアセスメントシートを開発する。
４．　発達障害を伴う軽度群の就労支援に役立つ支援ツールを明らかにし、ICF に基づいて分類したマップを開発する。
５．　施設入所中の重度群および自宅で同居する軽度群のきょうだいを対象に、アンケート調査を行い、知的障害者両群の同胞が抱える課題を明らかにし、対処方法を検討する。

B．研究方法

１．重度知的障害者の地域生活移行に関する研究（高木晶子）

重度群については、障害児施設である国立障害者リハビリテーションセンター 自

立支援局秩父学園(以下、秩父学園と記す)において、入所者 62 名中年齢超過者（１８歳以上）54 名を対象に調査を行ってきた。今年度は、22～24 年度前半に地域生活移行した 15 名（移行群）と非移行群 39 名について移行を困難にする個人因子および環境因子の分析を行った。

２．軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究（四ノ宮美恵子）

発達障害を伴う軽度群に対する就労移行支援の手法を検討するにあたっては、22～24 年度前半に、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局において支援を行った発達障害者で、かつ WAIS-R または WAIS-Ⅲの PIQ において 55 以上 85 未満(100－3SD～－1SD）の者 6 名を対象として検討を行った。これらの対象に①支援課題の抽出、②ICF の「活動と参加」および「環境因子」にもとづいた支援ニーズの抽出、③「働く」という目標の下、その達成に必要と考えられる下位目標の設定、④下位目標と支援ニーズに則して支援プログラム案の整備をおこなってきたが、今年度はそのプログラム実施上の課題整理の手続きを経て、就労移行支援モデルの開発を行った。

３．発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み（鈴木さとみ）

今年度は、昨年度までに整備したアセスメントの予備調査結果を踏まえ、改訂版アセスメントシートを作成し、これを用いて就労支援サービスを受給する発達障害者 21 名とその支援者及び統制群 21 名を対象に調査を実施した。

４．知的障害者の生活の補完的手段の研究（石渡利奈）

発達障害者の就労支援に役立つ支援ツール調査に関しては、今年度は前年度作成したツールリストを基に、ICF に基づく支援ツールマップの開発を行った。具体的には、個別の機器について、機器が必要となる背景にある心身機能のコード、機器が支援する活動参加のコードを複数該当可としてリストに記載した。分析は、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の親、リハエンジニア、作業療法士の協議により行った。これらの結果を基に、縦軸を心身機能、横軸を活動参加とする表を作成して、機器のマッピングを行った。

５．入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念（北村弥生）

きょうだい調査については、前年度までに行った１８歳以上の発達障害を伴う軽度群 12 名のきょうだいを対象とした調査１、重度知的障害者施設入所者 50 名のきょうだいを対象とした調査２、の結果提示された課題である「障害者の将来」に関する情報パンフレットを作成し、重度群きょうだいに送付し、課題が解決されたか否かの調査を行った。

（倫理面への配慮）

本研究は、国立障害者リハビリテーションセンターにおける倫理審査委員会の承認を受けて実施された。また、参加にあたっては、研究への協力について口頭ならびに文書で説明し、同意書により同意を得た。

C．研究結果

１．重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

入所中の重度群に関する検討では、18 歳以上の入所者 54 名のうち研究期間中の地域移行者数は 17 名である。移行者の年齢は 19 歳から 52 歳、在籍年数は 3 年から 40 年、性別は女性 5 名、男性 12 名である。移行先は埼玉県 11 名、東京都 2 名、栃木、群馬県、千葉県がそれぞれ 1 名である。移行先は入所施設 14 名、重心施設 2 名、家庭 1 名である。

障害程度区分認定取得に関して障害程度区分認定終了者 34 名中、「区分 4」が 3 名(9 %)、「5」が 5 名(15 %)、「6」が 26 名(76 %)である。移行群、非移行群で異常行動チェックリスト日本版および大島分類改訂版のスコアに有意な差はなかった。

２．軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

発達障害を伴う軽度知的障害者に対する就労移行支援モデルの開発にあたっては、①「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」の３つの場面を支援フィールドとして位置づけ、②「働く」ためにという統一した支援の文脈設定、③体験学習と体験の振り返りによる意味づけの支援を軸に、④「自己理解」、「他者理解」、「社会的規範の理解」を下位目標とした支援プログラムの整備、⑤就労支援と社会生活力を高める支援の並行した、かつ螺旋的な支援プログラムの整備、⑥定型発達の段階に則した支援プログラムの整備、に留意した。

今回の対象者６名中、支援継続中の 1 名を除いた 5 名については、全員が就職という支援目標を達成したが、開発した就労移行支援モデルにもとづいて支援を行った 3 名の就労移行支援利用期間は、開発前に支援を行った 2 名と比較すると 3.5 月短くなり、１５ヶ月であった。5 名の就職先における業務としては、事務補助の 1 名を除いては、梱包や清掃、商品の品出しなどのバックヤード業務や工場のライン作業であった。いずれも、地域の障害者就業・生活支援センターとの連携による職場定着支援を行い、離職者は出ていなかった。

３．発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

就労を目指す発達障害者のアセスメントツール作成については、昨年度の予備調査の結果を受け、研究者間で表現法等を再度検討し調査紙に修正を加え、質問項目の回答の分布の偏りから質問項目の一部を削除した。この結果改訂版アセスメントは質問項目数 73 となり、平均所要時間は発達障害者で 30 分、統制群は 15 分であった。これを用いた調査で、独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定の結果、発達障害者と統制群とで ICF 総得点に有意差がみられた（$p<0.01$）（図２）。

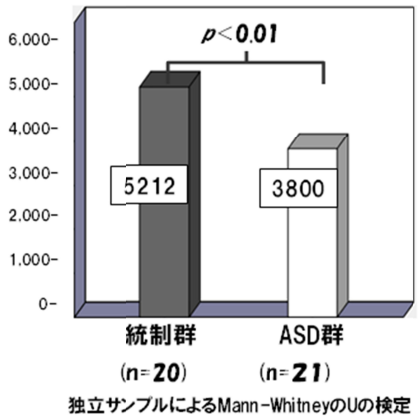


図 2　改訂版アセスメントによる発達障害者（ASD）群と統制群の ICF スコア

下位項目の第一分類の活動と参加では、「学習と知識の応用」（$p<0.01$）、「一般的な課題と要求」（$p<0.01$）、「コミュニケーション」（$p<0.01$）、「運動・移動」（$p<0.05$）、「家庭生活」（$p<0.01$）、「対人関係」（$p<0.01$）、「主要な生活領域」（$p<0.01$）、環境因子では「支援と関係」（$p<0.05$）、「サービス、制度、政策」（$p<0.01$）について有意差がみられた。発達障害者本人による自己評価および支援者による他者評価の比較では、「話し言葉の理解」、「非言語的メッセージの理解」、「書き言葉によるメッセージの理解」、「非言語的メッセージの表出」、「会話の持続」、「多人数での会話」といった「コミュニケーション」領域と「複雑な対人関係」において自己評価は他者評価よりも有意に低かった。これは支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっていることを示す。

４．知的障害者の生活の補完的手段の研究

就労に役立つことが期待される個別支援ツールとして抽出された 68 の個別ツールを用いてツールマップを作成した。ツールの形態の内訳は、ハードウェア 50、ソフトウェア 18 であり、今後の見通しとして、携帯端末用のソフトウェアの発展が期待された。機能としては、活動と参加の８項目（１．学習と知識の応用、２．一般的な課題と要求、３．コミュニケーション、４．運動・移動、５．セルフケア、６．家庭生活、８．主要な生活領域、９．コミュニティライフ・社会生活・市民生活）、心身機能の２項目（１．精神機能、２．感覚機能と痛み、３．音声と発話の機能）に関わるツールがあることが把握された。この分析結果を基に、縦軸を ICF の心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。

５．入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

重度群きょうだいの課題は、「（入所前および帰省時における）入所者の家庭での行動」「親亡き後の後見」について多くあげられたが、家族支援のニーズが指摘された項目は、きょうだいからが母親からよりも有意に少なかった。青年期および成人期のきょうだいの最も大きな課題であると考えられた「障害者の将来の生活」に関する情報提供を目的としたパンフレットを作成し、重度群の家庭へ配布した。内容は妥当と評価されたが、パンフレットを読んだ後もなお強い不安をアンケートに記載しており、保護者ときょうだいの不安を解決するには及ばなかった。

D．考察

１．重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

入所者の地域生活移行について今回の検討の範囲では、個人の身体・知的重症度および異常行動といった心身機能は移行を困難にする因子とはなりにくい。初年度行った入所者家族を対象としたアンケート調査結果とあわせると、家族の理解といった環境因子が大きく関与する可能性が示唆される。

２．軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

障害福祉サービスにおける就労支援モデルを開発することで、支援目標とその下位目標が明確になり、下位目標に則した支援

プログラムを整備することが可能となった。これらにより、支援者側の支援の文脈が統一され、対象者全員が就職という帰結に至ったほか、支援期間の短縮が図られたものと考えられた。

３．発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

発達障害者は自己を客観的に評価することの困難さが示されているが、今回開発したアセスメントシートを用いた調査の結果、発達障害者群の自己評価の結果は統制群と比較して有意に低く、活動および参加に関する支援ニーズを把握するのに適していると考えられた。これまで自閉症の中核症状とそれらに関連して起こる対人面での課題については研究が進んでいるが、発達障害者は家庭生活やコミュニティライフ、社会生活、市民生活など様々な生活場面で困難状況を呈しているものの、そうした日常生活機能に関する系統的な調査研究はほとんどなく、今後さらに検討が必要な分野と考える。

４．知的障害者の生活の補完的手段の研究

発達障害者の就労に役立つ支援ツール調査では、就労時の困難さの解決に向け開発が求められるツールは、職場生活を営む上での土台となる､「自身の言動を自己管理し、日々のスケジュールの遂行する」能力領域に焦点を当てる必要があると考察された。また､支援ツールを開発する際は､「ツールの大きさ」「 ツールのデザイン」「ツールの使用の容易性」「ツールのカスタマイズ機能」「ツールの音声でのメモ機能、音声ナビゲート機能」「ツールでの１日の生活の時間割立て機能」「ツールの学習機能」「ツールのゲーム機能・トークンエコノミー機能」などに留意することが有効と考えられた。

本研究で開発したマップにより､「補いたい心身機能」や「支援したい活動」に関係するツールを支援者が見つけ、支援に役立てられることが期待される。

５．入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

昨年度行った重度群きょうだいに対する調査で、予測した「入所者ときょうだいの関係が希薄であること」「親亡き後の関係が薄いこと」は否定され、きょうだいが（障害者本人の）将来の生活に対して心配していることが明らかとなった。また未成年のきょうだいも保護者から「後見人」と考えられており、きょうだい自身からも「親亡き後の心配」「障害についての情報不足」が回答されたことは、入所者の将来を見据えた情報提供を、未成年のきょうだいにも行う必要があることが示唆された。

今年度の調査では、パンフレットを送付された回答者のすべてが入所者の将来への不安を自由回答欄に記述し、ほとんどがきょうだいへの負担を記述した。パンフレットは課題の所在を整理し対処方法の方向性を示すように設計したが、不安を解消することはできなかったと考えられる。また、親ときょうだいの話し合いや、きょうだい同士のグループワークに発展することも、直接にはなかった。したがって、課題を整理した後の対処の支援方法を検討することは今後の課題である。

E．結論

１．重度知的障害者の地域生活移行に関す

る研究

障害児入所施設(秩父学園)において、１８歳以上の年齢超過者５４名を対象とし、研究期間内の地域生活移行群（１５名）と非移行群（３９名）を対象に、個人因子として心身機能を大島分類改訂版および異常行動チェックリスト日本版を用いて調査した。結果、今回検討した大島分類改訂版および異常行動チェックリスト日本版スコアは移行群､非移行群で有意な差はなかった。環境因子としての家族の理解、地域での支援期間整備などが大きく関与すると考えられる。今後、地域移行支援・フォローアップシステムを活用することで家族の信頼を得ながら地域生活移行を推進していくことが重要と考える。

２．軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

発達障害を伴う軽度知的障害者に対しては、従来の発達障害を伴わない知的障害者や知的障害を伴わない発達障害者に対する支援手法とは異なる手法の開発の必要性を考えた。そこで、障害福祉サービスとしての就労移行支援の枠組みに則し､「施設内訓練」､「行事参加」､「職場実習」という３つの場を支援フィールドとして、体験と体験の意味づけの支援を繰り返し行いながら「自己理解」､「他者理解」､「社会的規範の理解」の促進を図る支援モデルと支援プログラムの開発を行った。この支援モデルにもとづいて６名に対して支援を行った結果、支援継続中の１名を除く５名全員が就職という帰結が得られたほか、支援期間の短縮化が図られるなど、その有用性が示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害成人においては、体験と体験の意味づけをとおした支援を積み重ねることが生活体験の乏しさやイメージをもつことの苦手さ、三段論法などの論理的思考の苦手さを補う支援手法として有効であったことが推察された。研究期間内には６名の検討しか得られなかったが、さらに事例を積み重ねて支援モデルにもとづいた支援の効果検証と、標準的な支援プログラムの策定が今後の課題である。

３．発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

開発したアセスメントを就労支援中の発達障害者２１名および統制群２１名に対して施行し、両群に有意な差を認めた。また発達障害の本人評価と支援者による他者評価では、支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっているか、ニーズを拾いきれていないことが示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害者の日常生活上の支援ニーズを把握するためには、ある程度構造化した方法で系統的に行う必要があり、また、介入の効果測定をするためには、初期評価時に自己評価と支援者評価の差の傾向を把握しておくことは、重要である。

４．知的障害者の生活の補完的手段の研究

軽度知的障害を伴う発達障害者の就労に役立つことが期待される 68 の個別支援ツールを抽出し、縦軸を ICF の心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。

５．入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

重度群のきょうだいに「障害者の将来の生活」に関してパンフレットを作成し提供した。

F．研究発表

１．論文発表

1) 深津玲子，医療と福祉、労働、教育との連携のために医療者が知っておくべき基礎知識　ASD 成人の社会参加に向けて,成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル，神尾陽子編．医学書院: 東京．2012．p.79-83.

2) 高橋秀俊，深津玲子，神尾陽子，成人 ASD の社会参加に向けて．精神科，2012．21(6): p.687-691.

2．学会発表

１）車谷洋，深津玲子，四ノ宮美恵子，小林菜摘，青年期発達障害者の運動能力に関する研究 第 46 回日本作業療法会議，宮崎，2012，2012-06-16

２）四ノ宮美恵子，小林菜摘，深津玲子，障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅰ）－青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から－，日本発達障害学会第 47 回研究大会，横浜，2012-08-12

３）小林菜摘，四ノ宮美恵子，深津玲子，障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅱ）－就労支援モデル検証の試み－，日本発達障害学会第 47 回研究大会，横浜，2012-08-12，優秀賞受賞

４）鈴木さとみ,四ノ宮美恵子,深津玲子，自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査-ICF-Based アセスメントの開発と試行による一考察-, 日本発達障害学会，横浜，2012-08-12

５）北村弥生、上田礼子．入所知的障害者のきょうだいの課題と対処方法、日本健康心理学会，2012，東京．

６）北村弥生.障がいや病気の子どもの家族ができること．東京都南多摩保健所，2012.（講演）

７）車谷洋，深津玲子，四ノ宮恵美子，小林菜摘，就労移行支援を要する発達障害成人の上肢機能の調査 日本発達障害学会第 47 回研究大会，横浜，2012，2012-08-12

８）車谷洋，深津玲子，青年期にある発達障害者の体力に関する調査 第 53 回日本児童青年精神医学会総会，東京，2012，2012-11-01

９）車谷洋，深津玲子，四ノ宮美恵子，就労支援を受けている発達障害成人の運動能力と上肢機能の検討 就労に至った症例から介入指標を考える，第 6 回日本作業療法研究学会・学術大会，長崎，2012，2012-09-23

１０）　鈴木さとみ，深津玲子，自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究 ICF-Based アセスメントを用いた調査による一考察 第 53 回日本児童青年精神医学会総会，東京，2012，2012-11-01

G．知的所有権の出願・取得状況（予定を含む。）

なし

厚生労働科学研究費補助金（障害福祉総合研究事業）
分担研究報告書

重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

研究分担者　高木晶子　国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局　秩父学園
研究協力者　永吉敏広，齋藤信哉，須永貴之，滝澤剛敏、遠藤圭子、藤井知亨，黒田憲治，
同秩父学園

研究要旨

今回の研究では、福祉サービス整備の緊急課題となっている重度知的障害者の地域生活支援体系を、施設入所者の地域生活移行を通して検討する。

知的障害児施設である国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局秩父学園(以下、秩父学園と記す)における円滑な地域生活移行を可能にするプログラムと適正な移行判定基準システムを構築して、対象者の状況と要望に適う、と同時に家族の理解と安心を得る地域生活移行をめざす。今年度の対象者である秩父学園に入所している年齢超過者(18 歳以上)の移行状況と評価・判定基準とフォローアップシステムに関して報告する。

1. 地域生活移行を困難にする因子としては、個人因子としての対象者の重症度と並んで環境因子の課題があり，今回は「家族の地域生活移行への理解」を検討する。
2. 個人因子に関して秩父学園の年齢超過者の重症度を、身体機能・知能レベル及び行動学的状態(強度行動障害等)で分類層別し提示する。
3. 身体機能・知能レベルの評価に関して IQ の測定が困難である重度知的障害者の評価として大島分類改訂版を用いた。その結果、対象群は「動く重症心身障害者」に相当している。また、S-M 生活能力検査において知能レベルと異なる適応行動 (社会能力)の評価を試みた。特に自己統制、集団行動、意志交換の発達年齢が低く(7、8 割の対象者が 3 歳未満)コミュニケーション能力、対人相互関係の課題は大きい。
4. 行動学的状態(強度行動障害等)を異常行動チェックリスト(Aberrant Behavior Checklist : ABC)の日本語版(以下、ABC-J と記す)を使用し評価した。対象のうち自閉症群と非自閉症群では異常行動総得点に有意差が認められたが、移行群と未移行群に有意差はない。
5. 移行群と未移行群において身体機能･知能レベル(大島分類改訂版)及び行動学的状態(強度行動障害:ABC-J)との相関関係はなく、現時点では知的・身体・行動的重症度が地域移行を阻む因子として認められない。
6. 平成 22 年度からの年における地域移行者数は 17 名である。移行者の年齢は 19 歳から 52 歳、在籍年数は 3 年から 40 年、性別は女性 5 名、男性 12 名である。移行先は入所施設 14 名、重心施設 2 名、家庭 1 名である。
7. 環境因子である「対象者家族の地域生活移行への理解」に関して、家族のアンケート調査を実施した。結果として「家族の移行に関する理解と要望」が地域移行の推進において大きな要因と推定された。これを基に、地域生活移行のあり方を家族と共に検討できる「施設と家族の円滑な関係を促進する」ための秩父学園の試行を報告する。
8. 秩父学園において円滑な地域生活移行を可能にするプログラムと適正な移行判定基準システムを構築した。小集団生活による短期・長期地域生活移行トレーニングを対象者に施行して、ADL、余暇、コミュニケーション、社会生活に関する個別評価を行い、地域移行に関する個別支援計画を作成する。移行時期に関して組織内地域移行審査会議で検討する。また、移行後の対象者とその家族のフォローアップシステムを構築した。
9. 24 年度は地域生活移行実績と地域移行評価システムの状況を報告する。

A. 研究目的

今回の研究では重度知的障害者の地域生活の支援体系に関して施設入所者の地域生活移行を通して検討する。

秩父学園は知的障害児施設として入所機能を備えているが、入所者の 8 割が年齢超過者であり、地域生活移行は急務である。こうした移行事業を遂行するにあたって、移行を困難にする以下のような因子の分析と検討を目的とした調査研究を施行し、重度知的障害者の地域生活移行を支援する福祉サービス体系を整備するためには何が必要か、そのエビデンスを集積する。

地域生活移行を困難にする因子として、1.個人因子としての入所者の重症度　2.環境因子としての入所者家族の地域生活移行への理解、地域のリソース、福祉サービス体系の課題がある。今回は個人因子と共に、環境因子に関して「家族の地域生活移行への理解」を検討する。

1.の事項に関して秩父学園の年齢超過者の重症度を身体的・知的、行動学的状態(強度行動障害等)で層別分類し重症度の実態を提示する。

2.の事項について、家族の理解を促進するための秩父学園の試みを提示し、入所者家族へのアンケート調査を経年的に施行することで地域生活移行の理解度と要望を把握する。

また、重度の知的障害者は医療的課題が多く、地域のリソースとしての医療体制は不可欠な検討事項である。今後、秩父学園生の地域移行を通じて地域の医療のセーフティネットに関する考察が必要である。

平成 22 年度の報告内容は次項であった。

1. 秩父学園地域生活移行システムの説明

このシステムは「国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」の先行事業[1)]を参考にした。

2. 秩父学園からの地域生活移行者の状況

1)　個人因子としての身体・知的機能を大島分類改訂版[2)]で、生活能力を S-M 生活能力検査で評価した

2)環境因子としての地域生活移行に関する家族の理解に関するアンケート調査結果とその考察

3. 重度知的障害者を「動く重症心身障害者」と捉えた地域移行の課題

平成 23 年度は下記の事項を報告した。

1. 秩父学園地域生活移行プログラムと移行判定に関する評価システム

1) 上記のシステムにおける流れ

2) 地域生活体験トレーニングホームを利用した移行判定基準と判定会議

3) フォローアップシステムの構築

2. 秩父学園の地域生活移行者の状況

1) 年齢超過者の行動評価(ABC-J)[4)5)]と地域生活移行の困難性に関する評価

2) 年齢超過者の障害程度区分の状況

3) 地域生活移行実績

3. 地域生活移行に影響する個人因子に関する考察

平成 24 年度(最終年度)には下記の事項を報告する。

1) 3 年間の地域生活移行実績の分析

2) 当学園の地域生活移行システムにおける支援プログラムと移行判定基準の評価

3) フォローアップシステムの構築と状況

B. 研究方法

1. 対象者

秩父学園の入所者全員を対象として地域生活移行を準備している。今回の研究において研究開始年度平成 22 年度は入所者数 62 名のうち年齢超過入所者(18 歳以上)54 名を対象群としてデータを集積した。平成 22 年度の年齢超過者の平均年齢は 33 歳、平均在所期間が 19 年に及んでいる。平成 22 年度から 24 年度の期間において、地域移行による退所

者は 17 名であり、現時点における年齢超過入所者 37 名である。

2. 地域生活移行対象者の個人因子分析

昨年度は 1) 対象者の個人因子としての重症度、2) 環境因子としての「家族の地域生活移行への理解」の課題を記載したが、今回は下記の事項に関して報告する。

1) 地域移行実績

研究結果に後述する。

2) 対象者の個人因子と地域生活移行

対象者である秩父学園の年齢超過者の重症度を身体的・知能レベル、行動学的状態(強度行動障害等)で分類層別し重症度を提示した。身体的・知能レベルに関して心身障害の重症度を評価する大島分類改訂版を、行動学的状態に関して行動障害の評定尺度である ABC-J を使用した。

従来重症心身障害児（者）施設において入所者の状態を把握するために用いられてきた大島分類は知能指数(IQ)を縦軸、移動機能を横軸で示し知的障害と肢体不自由の組み合わせで重症度を表現している。知能テストの施行には良好な上肢機能と言語機能が不可欠であり、前述したように重度知的障害や重症心身障害において IQ の算定は困難である。この点を改良すべく、既存の発達評価法を用いて知能の発達過程を階層化して作成されたのが大島分類改訂版である。生活寮の支援者が対象者の状態を評価し、それを主治医と生活寮看護師が再度検討した。

平成 22 年度には対象群は「動く重症心身障害者」に相当している [3]。

ABC-J は知的障害を対象とした治療効果の評価を目的として開発された。内容は 0-3 までの 4 点法で評定される 58 項目の評価尺度であり、興奮性、無気力、常同行動、多動、不適切な言語の 5 項目のサブスケールのスコアとして表現されている。

秩父学園の年齢超過入所者(18 歳以上)54 名を対象群として、生活寮の担当職員が ABC-J を平成 23 年 10 月時点の状態を記載した。対象が既に移行した場合、移行直前の対象者の記録と既担当職員の記憶に基づいて評価した。

今回は現時点の地域生活移行者 17 名のデータを提示し研究結果に後述する。

3. 環境因子(家族の理解)と地域生活移行

平成 22 年度に年齢超過入所者の家族に地域生活移行に関するアンケート調査を施行した。また、24 年度には移行した家族へ移行後の状況と家族の思いに関するアンケート調査を施行した。

4. 秩父学園地域生活移行システム

平成 22 年度報告書に秩父学園地域生活移行システムに関して掲載したが、今回、秩父学園の地域生活移行の流れ図（図 1）を改めて説明する。

1) システムにおける流れ

①個別支援計画の作成

生活寮では家族の要望を含めて個別支援計画を作成する。年度初めに支援内容を家族に説明し同意を得る。生活寮における ADL の支援と日中活動（グループ活動）を行い、必要に応じてケースカンファレンスを開催する。ここで園生に携わる多職種で構成されたチームで生活上の課題を検討している。また、生活全般について標準評価票を用いて経時的に評価する。

②自立生活体験 「コスモス」

秩父学園における自立生活体験とは生活寮内の「コスモス」の呼称を持つ 3LDK の居住空間を使用し施行している、小集団における短期(1 泊 2 日)宿泊体験の活動である。上記の「コスモス」の居住空間およびシステムを含めて以下に「コスモス」と記す。ここでは

生活寮では体験できない環境設定の中で、公共交通機関を利用する買い物、掃除、洗濯機の使用など、地域生活に向けた幅広い支援が可能になる。このように少人数で生活し地域生活に必要なスキルのアセスメントを施行している。18 歳以上の園生全員が対象であり、1 泊 2 日を 1 回として合計 3 回施行し、これを 1 クールとして評価する。

③地域生活体験ホーム「ウィズ」

「ウィズ」の呼称を持つ地域生活体験ホームにおける 1～6 ヶ月間の長期生活体験トレーニングシステムを「ウィズ」と記す。これにより対象者に必要な支援を検討して、学園内の地域生活の移行を円滑にすすめる。将来グループホームやケアホームでの生活を視野に入れたアセスメントと支援を行うと同時に、安定した地域生活の継続をはかる。

④「ウィズ」判定委員会

「コスモス」における評価で一定の基準を満たした対象者が、次段階として地域生活体験ホーム「ウィズ」における生活体験トレーニングの必要性を判定する委員会である。具体的な評価基準は地域生活に関する項目で構成される標準評価票を利用している。

⑤ 地域生活移行審査会議

秩父学園における審査会議規程に基づいて地域生活移行に向けた退所の妥当性を検討する会議である。審査判定基準として、家族が移行を要望する、学園で対応困難な医療的ケアが必要である、「ウィズ」を終了、または「ウィズ」判定委員会で承認された場合等がある。会議で承認された後に、地域生活移行に向けて準備していく。

⑥移行先候補を紹介し、家族と協働して施設見学を積極的に施行する。その後、家族の要望に応えて移行先候補の施設体験利用を行い対象者の移行に関する見通しを検討する。

⑦ 移行後のフォローアップについては、移行先・事業所・行政・本人及び家族と連携を取りながら丁寧に行っていく。移行先の訪問等の際、現況の課題を移行先と共に検討し、同時に対象者および家族の心情等の情報収集をする。

2) 地方自治体との地域移行等連絡調整会議の設定と開催状況

地方自治体と円滑な地域生活移行を目指し、対象者の移行先となる地方自治体と連絡調整会議を設定した。

5. 秩父学園地域生活移行プログラムと評価システム

1)自立生活体験「コスモス」の概略、評価シートの作成と評価

「コスモス」は 1 泊 2 日を 1 回として合計 3 回施行し、これを 1 クールとして評価する。3 回目が終了したら、「「コスモス」評価まとめシート」に総評を記入する。まとめシートには目標への取り組みが何回目の「コスモス」で実施できたかを記入するだけでなく、目標への達成状況の経緯も記載される。「コスモス」の次段階である長期生活体験のトレーニングホーム「ウィズ」では、「コスモス」評価まとめシートを基に次段階の支援計画が作成される。

評価については「「コスモス」評価シート」を作成し、地域生活移行に向けて、対象者個別に必要な領域の目標を立て、それらを達成することができたか、未達成の場合はどのような支援が必要かを評価して次の支援に繋げている。この評価シートは秩父学園個別支援計画を基に作成した。個別支援計画の目標は 1 運動行動、2 コミュニケーション、3 社会性、4 日常生活関連動作（ADL）、5 行動障害、6 余暇、7 その他、以上 7 項目に分類されている。 「コスモス」評価シートは、個別支援計画の「運動行動」、「社会性」、「行動障害」の項目の代わりに、地域生活移行で必要と思われる「家事スキル」、「買い物」、「移

動」の項目を設定している。個別支援計画作成の際に用いたニーズ表（本人ニーズ・家族ニーズ・医療的ニーズ・社会的ニーズ・関係者ニーズより選定し、記入する）を基に、それぞれの領域毎に目標を記入、その目標に対し「達成状況」の欄で「○：一人でできる: 2 点」、「△：一部援助でできる: 1 点」、「×：要援助: 0 点」、「未実施」のうちから達成状況を表す。そして「評価」、「今後の対応」の欄に記載する。「今後の対応」欄には、目標を達成するための具体的な支援のポイントを記入している。

2) 「ウィズ」判定会議

具体的な評価基準は地域生活に関する項目で構成される標準評価票を利用している。

「ウィズ」判定委員会における標準評価票に基づく評価として、「ウィズ」の生活に最低限必要と推定される 69 項目のスキルの平均点が 1 点（一部援助でできる）以上で合計 69 点以上、及び第 3 回目の「コスモス」評価シートの平均点が 1 点（一部援助でできる）以上を合格点としている。

なお、その以外の事項も勘案し次段階の「ウィズ」試行の可否を決定している。

3) 地域生活体験ホーム「ウィズ」の概略、○個別支援計画の作成と評価

「ウィズ」では、「コスモス」評価まとめシートを基に個別支援計画が作成される。

「ウィズ」と「コスモス」との違いは「長期間」の生活体験トレーニングという点であり、地域生活を目指した環境設定や取り組みを行うという目的は「コスモス」と同様である。「コスモス」評価まとめシートに記した園生の今後の課題及び目標が「ウィズ」での支援計画の中に組み込まれてくる。

○「ウィズ」個別支援計画立案の視点と内容作成について

「ウィズ」では最初の 1 ヶ月間で「ウィズ」評価票(資料 2)を利用してアセスメントを行う。評価項目の内容は「買い物」・「理髪」・「通院」・「街を移動中の行動」・「車や公共交通機関の利用」・「散歩など歩行に関する状態」・「公衆トイレ利用」・「待ち時間全般に関わる状態」・「外食中の行動」・「社会的な活動への参加」・人との距離の取り方として「人との接近レベル」である。今後の地域生活の支援優先度として「高」・「中」・「低」で表す。アセスメント期間終了後、優先度の高い項目を中心に個別支援計画を立案している。

秩父学園「ウィズ」評価表作成にあたり、日常生活の課題の具体性と評価項目に関するリストに優れていることから、社会福祉法人「はるにれの里」[6]の評価表を参考にした。

4) 地域生活移行審査会議

詳細は結果に後述する。

6. 知的障害者の地域移行にむけた訓練課程におけるストレス評価の試み

個別支援計画の作成と評価の向上を目的としたリサーチである。支援者の主観的観察と共に対象者の客観的な生理的データ測定を施行する事で、支援者の観察による評価の検証や再検討を試みる。詳細は後述する。

7. 研究協力に関する対応

＜倫理面での配慮＞

国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会の承認済みである。研究参加者へ研究目的、方法、そこで生じるリスク、個人情報の管理と保証について口頭と文書で説明した。同意が得られた場合のみ同意書を作成して協力を得る。参加に関する本人の自己決定が不確実な場合、家族の同意を得た。その際、人権に関する配慮を充分に施行した。

個人情報はカルテと同じ基準で保管している。研究データは個人情報を外した連結可能匿名化臨床情報にして保存している。

C. 研究結果

1. 対象者の個人因子分析と地域生活移行の関連

1) 地域生活移行実績

平成 22 年 3 月から 25 年 1 月の期間における当学園対象者の地域生活移行実績を示す(表 1)。上記の期間における地域移行者数は 17 名である。移行者の年齢は 19 歳から 52 歳、在籍年数は 3 年から 40 年、性別は女性 5 名、男性 12 名である。移行先は埼玉県 11 名、東京都 2 名、栃木、群馬県、千葉県が夫々1 名である。入所施設 14 名、重心施設 2 名、家庭 1 名である。

2) 障害認定区分を用いて

障害程度区分認定取得に関して平成 22 年度から作業を開始した。平成 23 年 4 月 1 日の段階で取得者 17 名であった。その後、取得に関する家族の理解を促進する情報提供を励行することで、平成 24 年 3 月時点において(18 歳以上の対象者全員が認定調査を受けた(結果待ち 2 名を含める)。

障害程度区分認定終了者 34 名中、「区分 4」が 3 名(9 %)、「5」が 5 名(15 %)、「6」が 26 名(76 %)である。

3) 大島分類改訂版を用いて

昨年度で報告した対象者における大島分類改訂版に移行者 17 名(移行者数)のデータを追加して示す(図 2)。移行者群の身体(移動)機能は寝返り可から歩行可までの状態、知的レベルとしては言語理解不可から簡単な言語理解可の状態、発達年齢としては 6 カ月以上から 1 歳から 2 歳前後、全訂版田中ビネー知能検査に準拠して算出すると IQ 約 10 となる。

4) 行動評価(ABC-J)を用いて

ABC-J のサブスケール 5 項目の素点平均値により移行群17 名と未移行群37 名を比較した結果を表 2 と図 3 に示す。T-検定において、5 項目共にこの 2 群間で有意差を認めない。

移行群と未移行群において身体機能・知能レベル(大島分類改訂版)及び行動学的状態(強度行動障害:ABC-J)との相関関係はなく、現時点では知的・身体・行動的重症度が地域移行を阻む因子として認められない。

2. 環境因子(家族の理解)と地域生活移行対象者家族への地域移行後のアンケート調査

平成 24 年 10 月に地域移行した 14 名の家族を対象に移行後のアンケート調査を施行した。回答数は 14 件中 8 件であり、その質問事項と回答結果を示す。(表 3)

移行先施設の対応、対象者の生活に関する満足度は 6 件が高く評価している。当学園からの移行に関する家族の思いとしては「良いところがあれば考えたい」、不安に関して「本人が(移行先)になじめないのではないか」という回答が回答全件(8 件)に認められた。

回答が得られなかったケースは今後、フォローアップシステムの中で調査する必要がある。

3. 秩父学園地域生活移行プログラムと評価システム

1) 自立生活体験「コスモス」の評価

平成 22 年 5 月から 2 5 年 1 月の期間において、年齢超過者である対象者 40 名が 3 クール全課程の「コスモス」の総評価を終了している。「「コスモス」評価・まとめシート」に関して対象者 40 名の支援の各領域の達成度の結果を示した。(表 4) 支援領域において、家事スキル、買い物、移動等は回数を重ねる事で達成度が高くなっている。生活寮の集団生活と比較して、「コスモス」では個別の機会の設定と詳細なアセスメントが可能であり、その成果と推定される。

なお、対象者の個別の特性により、目標設定及び評価が困難な項目も認められるが、対象者一人当たりの目標設定項目数の平均値

は 1 回目 5.18、2 回目 6.23、3 回目 5.44 であった。「コスモス」を利用した対象者の全領域の総合評価の平均点を示す。(図 4) 全対象者の「コスモス」の総合評価平均点数は 1.61 である。1 点未満は 0 名であり、全対象者が「ウィズ」判定会議の基準を満たす 1.0 点以上を取得している。

「「コスモス」の目的」は全入所者が「コスモス」を体験することであり、この試みにより地域生活移行に関する各対象者の個別の課題を詳細に検討することにある。この「コスモス」の評価を基盤にして、「ウィズ」の個別支援計画を適正に詳細に設定していく。今回の評価の結果、目標設定項目数と内容共に「ウィズ」に結びつけていく役割を概ね果たすことができた。

2) 「ウィズ」判定会議

平成 22 年 5 月から 25 年 1 月の期間において、年齢超過者である対象者 13 名が**「ウィズ」判定会議で**検討され**地域生活体験ホーム「ウィズ」を体験**している。

「ウィズ」判定会議において以下の項目に関して検討された。

・対象者及びその家族の地域生活移行に関する意向の確認と検討

・対象者の ADL(食事・入浴・排泄・衣類の着脱等)に関するスキルの獲得状況

・ 新たな環境(新規場面)における対象者の潜在的な力を引き出せる可能性、般化に関して

・「ウィズ」による小集団での生活による支援内容(社会生活、余暇スキルの向上)

・「ウィズ」を利用する対象者の性別・相性などのマッチング関する検討

対象者の状態(障害特性、生活、医療の課題の検討、具体的にはコミュニケーションスキル、睡眠状況、てんかん発作の発生頻度・状況、自傷・他害・破壊行動等行動障害、帰宅状況)を参考にした

・「ウィズ」の職員体制(宿直体制)について

・「ウィズ」利用開始時期、宿泊・日中利用の選択・期間等

3) 地域生活体験ホーム「ウィズ」

図 5 において、「ウィズ」の開始時と終了時の「ウィズ」評価結果の比較を 3 名の対象者のデータ(図 5)で示す。地域生活移行自体はシステム構築中にも進行しており、このように比較データとして提示できるケース数は現時点では 3 名のみである。

今回、ADL と社会生活(買い物、移動、余暇等)の領域において、「ウィズ」の支援成果を評価点で比較した。 ADL に比較して社会生活の評価は 3 ケース共に「ウィズ」の生活体験で明らかに伸びを示している。

4) 地域生活移行審査会議

地域生活移行審査会議を受けた地域生活移行対象者 31 名の判定結果を示す。(表 5) 上記会議に申請された対象者地域生活移行審査会議判定基準内訳 31 名全員が「保護者が地域生活移行を要望した」ケースである。対象者一人に対し複数の判定基準が認められるが、全例において保護者が地域生活移行を理解し了解と要望しており、これが判定の不可欠条件となっている。

5) 移行後フォローアップシステム

平成 22 年 5 月から 25 年 1 月の期間において、17 名の対象者が各地域の入所施設や家庭へ当学園から移行した。全例に関して以下に記載した定期的なフォローアップを施行している。

①移行先への支援

移行先には、定期的な連絡や訪問を行い、円滑な支援が行われるようにする。「困ったことがあったら連絡してほしい。」と提示して相談を促すことで、支援に関するアドバイスを施行している。適時、要望に応じて移行先を訪問して個別支援会議等に出席し共に検討している。

また、移行先が新規開設施設の場合、医療機関との提携が整備されていないことも多く、当学園医務課が医療面における協力体制を組んでいる。

②家庭への支援

家庭に戻る対象者の場合、今後の安定した生活基盤づくりにとって不可欠な条件として、移行先地域支援チームを当学園在籍中に編成し家庭とその地域の環境設定を予め準備することである。

移行先地域の相談支援センターの相談支援専門員が主導するチームを構成する。メンバーは援護の実施者（市区町村福祉担当者)、児童相談所、日中活動事業所、民生委員、そして当学園職員である。このチームが定期的な情報交換と今後の方針を検討して対象者とその家族の安定した生活を支援する。

③保護者への支援

移行後、当学園の地域生活移行担当者が保護者へ定期的に連絡を取り、移行後生活が円滑に営まれているか、情報収集する。また、気軽に相談できる体制を作り、必要に応じた面談、事情聴取等を設定して家族の心情を安定させる細やかな配慮を提供していく。

④移行後情報の収集に関して

フォローアップシステムとして、電話や面談等による移行後の定期的な情報収集を施行しており、その際、現在の課題や支援法に関する相談を受けている。また、半年単位で移行先訪問を行い、移行先と協力下に対象者の移行後の状態や支援の方針について情報交換し検討している。

今回、移行した 17 名全ての移行先と保護者に定期的な訪問や電話による情報交換を実践している。

家庭を移行したケースにおいて、地域の通所施設へ円滑に通所できるように、保護者と検討した。秩父学園の支援者が同行して環境設定を図った。

4. 地方自治体との地域移行等連絡調整会議の設定と開催状況

平成23年7月から24年末の期間において、東京都(6 回)、千葉県(6 回)、埼玉県(2 回)との連絡調整会議を開催して、移行先の検討や地域のセーフティネットに関して情報交換した。

5. 知的障害者の地域移行にむけた訓練家庭におけるストレス評価の試み

1) 研究目的

我々は、秩父学園での小集団における短期宿泊体験施設「コスモス」での地域生活移行に向けての体験の評価方法と結果について、平成 22 年度の当研究の成果として報告した[7]。体験訓練の成否の背景には、知的障害者の情動があると我々は経験から推測しているが、知的障害者の心の動きを表情等の外観から読み取ることが困難な場面にも多く遭遇する。

近年、携帯性に優れた唾液アミラーゼ活性値測定器を使用し、侵襲性の低い測定方法によりストレスを検討した研究が報告されている[8) 9) 10)]。

そこで、本年度は、秩父学園・地域生活体験ホーム「ウィズ」にて長期宿泊者を対象にストレスの客観的・定量的測定を試みた。

2) 方法

被験者

「ウィズ」で研修中の当園入所者・男性 3 名（被験者 A、被験者 B、被験者 C と表記する）を調査対象とした。被験者の概略を表 6 に示す。

測定する訓練課題と回数

屋外活動

○信号のある横断歩道での横断訓練

○コンビニエンスストアで買い物訓練

これらは、一回の外出につき、信号―買い

物一信号の順で連続して実施した。コースは全長約 1640mで、歩道と車道がセパレートされた直線部が多い見通しのよいコースをゆっくりとした歩行ペースで移動しながら、11 か所で測定した。最初の信号は押しボタン式、次の信号は大きな交差点に設置された自動式である。コンビニエンスストアでは、菓子を 1、2 個といった少量の買い物を行う。 コースの概略と測定ポイントを図 6 に示す。

室内活動

○調理実習

調理実習では 3 人は一緒に同じ活動をするのを原則としているが、測定機器が一組しかないことから、測定機会を違えることにしたため、3 名の調理内容は下記 3 種類の個別メニューとなった。調理のプロセスは、材料の処理と機器使用の 2 段階である。測定ポイントは、①調理開始 5 分前　②調理開始直前（作業テーブルの前にスタンバイした時）③調理完了時試食前　④唾液アミラーゼ活性値（Salivary Amylase Activity: 以下 SAA と略）への食事の影響を避けるために、飲食後、リビングのソファ等で約 1 時間くつろいだ後、の計 4 ポイントである。

調理手順を以下に示す。

被験者Ａ　ホットケーキ：卵を割り、ホットケーキミックスの粉等と混ぜＩＨ調理器で焼く。

被験者Ｂ　カップケーキ：材料を混ぜ、スポンジ台に載せ、レンジに入れて焼く。

被験者Ｃ　バナナジュース：包丁でバナナを切り、砂糖、牛乳を加えてミキサーで撹拌する。

各訓練は日を替えて 3 回測定することを原則にしたが、いくつかのデータ欠損が生じた。本来ならデータが欠ければ、そのシリーズをすべて破棄すべきであるが、対象が測定への積極的な協力が期待できない重度の知的障害者であること、またケーススタディとしての研究デザインであることから、部分的なデータもできるだけ呈示する方針とした。

測定方法

客観的評価

・唾液アミラーゼモニター（ニプロ、 東京）にて SAA を測定した。この機器は小型、簡便で、かつ侵襲性が低いという利点があり、舌下に測定チップを 30 秒間留置して唾液を収集後、1 分後には数値が表示される。

・装着型心拍計・心拍数(Heart Rate: 以下 HR と略)を RS800CX（ポラール・エレクトロ・ジャパン、東京）にて持続的に計測した。心拍計付の温水で湿らせたベルトを胸部に装着し、指導員の手首に装着した腕時計型の受信機でデータを受ける方式である。

測定時刻は、唾液アミラーゼ活性値の日内変動から安定した数値が得られやすい午後 [11] に設定した。

主観的評価

・Visual Analog Scale(以下 VAS と略)を用いて、指導員による外観観察の印象を数値化した。一方、気が付いたことを自由にコメントとして残すことにした。本研究では、同じ視点での評価を得ようとする意図から、主観的評価者はできる限り特定の者に固定し、さらに、すべてのデータ収集が完了するまで、SAA と HR のデータを教えずブラインドとした。

なお、日程は、同課題を最短で 3 日連続、最長でも 1 週間以内に完了するようにスケジュールを組んだ。

3)　結果

○被験者の属性

被験者の属性を表 6 に示した。本研究中の「ウィズ」入所者は 3 名とも男性であったためでとくに意図はない。全員抗てんかん薬を内服している。年齢は 20 代が 1 名、40 代が 2 名である。

○事前測定

安静時に、3 回続けて SAA を測定し、測定

に協力的かどうかを判定した。測定値には多少のばらつきがあるものの、開口拒否やチップを噛む、吐き出そうとするといった拒絶的態度は認められなかった。（表 7）

また、HR についても、試験的な装着にて拒絶的態度はみられず、SAA、HR とも測定可能と判断した。

○訓練時間

屋外活動は 3 名とも 40 数分、調理時間は、被験者 A：約 13 分　（ただしうち 1 回は途中で動作停止したため 1 時間 10 分を要した）、被験者 B：約 15 分、被験者 C：約 9 分であった。

○測定について

SAA の測定については、測定自体が成り立つのかという当初の不安はあったが、比較的スムーズに行うことができた。

極端に低い場合は、測定ミスの可能性を考慮し、再測定を実施した。

唾液アミラーゼ活性値と心拍数

○屋外活動

＜被験者 A＞　（図 7－1）

SAA：3 回のデータから共通の特徴は見いだせなかった。

HR：3 回のデータのうち、1 回目と 2 回目は類似していた。傾向としては、3 回目も測定ポイント②以外では類似しているといえる。

SAA と HR の関連：関連性は見いだせなかった。

＜被験者 B＞　（図 7－2）

SAA：欠損データはあるが、概ね前半優位に増加傾向がみられた。2 個目の横断歩道の課題では 3 回とも低下している。

HR：1 回目の HR データが欠損しているが、2 回目と 3 回目のデータは類似していると考えられた。

2 回目の測定ポイント①では 160bpm と増加しているが、記録図でみるとこのときスパイク様の上昇がみられていた。

SAA と HR の関連：3 回目の測定ポイント⑦までは SAA と HR の増減パターンは似ていたが、全体的には関連性を認められなかった。

＜被験者 C＞　（図 7－3）

SAA：最初の横断歩道と買い物で増加が認められた。2 個目の横断歩道では低下していた。測定ポイント⑩から⑪では 3 回とも増加があった。

HR：測定ポイント⑦（コンビニストアを出たところ）では 3 回とも減少し、⑩から⑪では増加した。

SAA と HR の関連：⑩から⑪での増加傾向を除いて、関連性を認めなかった。

○調理実習

＜被験者 A＞　（図 8－1）

SAA：1 回目と 2、3 回目では、相反する増減を示していた。測定ポイント④（食後 1 時間）でも、事前測定値平均の 2 倍以上であった。

HR：ピークが調理中にある点は共通していた。

SAA と HR の関連：関連性は見いだせなかった。

＜被験者 B＞　（図 8－2）

SAA：1 回目と 2 回目では測定ポイント②から④に向かうにつれて減少している点で傾向が一致しているが、3 回目ではポイント②で最小値になっており、全体としての再現性は認めなかった。

HR：1 回目と 3 回目は類似していた。

SAA と HR の関連：3 回目は SAA と HR が相反していた。

＜被験者 C＞　（図 8－3）

SAA：1 回目のデータが欠損しているが、試行としては行っているため、データ 2、3 としている。2 回目と 3 回目ではスタートから値が大きく異なっていた。

HR：①から③までは 90～100bpm 程度に増加しており、④では急に減少している。持続的に記録したデータからは、調理開始前後から調理終了までは持続的に増加しており、その後、低いレベルで 1 時間経過していたことが分かった。

SAA と HR の関連：すべてのポイント④では SAA、HR とも最低値を示しており、この点について関連を認めた。

○外観観察からの主観的評価

全体的に、屋外活動開始時に緊張度が比較的高く、緩やかに軽減していくという評価が目立った。後半に緊張度を高く評価したケースもあるが、いずれの場合も SAA、HR とも明らかな相関傾向を認めなかった。（データ掲載省略）

4)　考察

今回使用した唾液アミラーゼモニターの測定範囲は、説明書によれば 10～200KU/L であるため、この測定範囲を超えたデータについては参考値扱いとなることを前提に記述する。

事前測定にて拒絶的な態度がみられなかったため、調査可能と判断した。数値については、AとBでは 3 回目に増加している。これは、たてつづけて 3 回測定したことによりストレスが生じた可能性があるので、やり直しを含めても 2 回目までで計測を終了することが適切と考えられた。

本研究の 3 名の被験者は、パニックや社会的に不適切な問題行動をおこすことはなく、「ウィズ」での通常の訓練メニューの実施には、危険性はないと判断された。ただし、重度知的障害や自閉症が特性としてあるため、何をどのように感じるのかという予測ができず、ストレッサーとして相応しい訓練の選択は難渋した。人権を考慮すると、確実に嫌がることが予測される訓練を課題に設定することはできない。よって、課題遂行が不快なストレス（distress）を与えているだろうという予測がなりたたず、SAA が上昇していてもストレスがあったのか、ストレス以外の上昇機序によるものなのかの解釈は、外観等の主観的評価を参考にせざるを得ないことを想定し、評価項目に加えた。

さらに、被験者への配慮として、屋外活動では、周囲からの興味本位の視線に晒されぬように、コンビニエンスストア内での測定は行わず、買い物後は店外に出て測定した。そのため、我々が緊張の高まりを予測したレジでの支払い時の場面から、測定ポイントが後方にずれてしまった感がある。

これまで報告された、SAA を利用したストレス研究では、刺激が加わる前の安静時というコントロール値を得られるポイントを基準にしているものが多いが、本研究の屋外活動、たとえば信号のある横断歩道の手前での待機という条件が、渡る前のコントロールとして適切か否は、個々のストレスの感じ方によっても異なると考えられる。　社会生活能力の低い被験者にとっては、交通量の多い場所に立っているだけでもストレスになる可能性はあるので、信号の手前 180mでの測定をもってコントロールと設定したが、そこへ到達するまでの歩行という運動行為のため、SAA や HR が影響を受けることは避けられない。より厳密に安静時からの変化をみるためには、自動車等によって横断歩道まで移動するしかないと考えられるが、移動中の車内にいること自体がストレスを生じる可能性もある。

そこで、課題毎に測定することはせず、実際に行っている屋外活動に準じた形で「横断」と「買い物」という 2 種類の課題を 1 回のコースに組み込んで測定することにした。測定ポイント②（横断前）と③（横断後）とは約 2 分弱の間隔であり、SAA 測定上のタイムラグを考えると、ボタンを押す際の緊張か、青

信号を待つ間の緊張か、横断歩道を渡る時の緊張か、といった細かい動作との関連を特定するのは無理がある。そのため、②もしくは③で上昇すれば横断に関してストレスを感じた可能性がある、といったゆるやかな捉え方でグラフを評価する姿勢が必要と考える。

山口らは、不快な刺激では増加、快適な刺激では低下という SAA の変動を利用して、不快と快適を判別できる可能性を示している[12)]。今回、同じ測定ポイントであっても日によって、相反する現象がみられたが、状況を正確に記録し、詳細に検討を加える必要がある。

被験者 B では、施設の門を出る時点ですでに SAA レベルが高く、施設外に出ること自体がストレッサーである可能性が考えられた。ただし、後半には「慣れ」が生じるためか、帰り道ということを自覚して気持ちの高揚がなくなるのか、活動後半には減少する傾向を示した。被験者Aでも、2 回目、3 回目で前半優位の上昇をみせており、すべての訓練をみても後半優位だったのは被験者 A の 1 回目だけであることから、総じて、施設外に出たという環境変化をベースにして、押しボタン式信号のボタンを押すなどの非日常的行為が、緊張を高めていることが考えられる。それに比べて、後半の信号は自動式で、交差点であるため他に渡る人や自転車もあり、むしろ安心感があったのかもしれない。なお、当施設周辺での歩行は被験者にとって初めてではなく、見知らぬ場所を連れ回されるストレスがあったと考えにくい。

SAA と HR との相関について、竹田は重心児のスヌーズレン施行中には相関関係を認めたが、その前後には認めなかったことから、病棟における安静時の唾液アミラーゼ活性値が心拍数と同じ自律神経の活動状況を反映していないことを示唆している、と報告している[13)]。本研究でも相関については認められなかった。ただし、HR では、被験者 A と被験者 C の各 1 回目と 2 回目、そして被験者 B の 2 回目と 3 回目が類似した動きをしており、運動負荷が同じであれば、ある程度の再現性は得られると考えられ、SAA の結果との乖離は、SAA が個人によってばらつきが大きい指標であることに由来している可能性がある。

被験者 C では、すべての課題を終了したあとに、直線の歩道を施設まで帰るという歩行運動で SAA と HR の上昇が認められた。純粋な運動負荷以外の刺激が歩行中にあった可能性も否定はできないが、3 回とも同じ結果が得られたことから、突発的な精神的ストレスではなく、運動ストレスと考えられた。彼の安静時心拍数と、屋外活動中の平均心拍数から、アメリカスポーツ医学会のテキスト記載の式に従って計算すると、57%HRR となり、十分に有酸素運動レベルであった。歩行ペースは、2METS 以下の弱い運動強度であるが、スポーツ等の機会に乏しい被験者 C にとっては、活動終盤に身体的負荷があったのかもしれない。SAA 測定のための時間が休息になっていたため、この程度の負荷にとどまった可能性もある。

ウォーキングには、身体活動という一面と環境による気分転換という一面があり、たとえば、三井らは、森林植物園でのウォーキングの前後では唾液アミラーゼ活性値の有意な低下を認めたが、住宅地では変化を認めなかったと報告している[14)]。その際に POMS 法での検討では「活気」に関して、森林植物園コースでは上昇、住宅地コースでは低下と、異なる気分変動を示したとしている。このことはウォーキング自体がストレス低下作用をもつわけではなく、環境がもつ影響力を合わせて評価する必要性を示している。今回の我々が使用したコースは、交通量の多い車道脇の歩道であり、健常人にとっては、リラク

ゼーションに有効な環境を提供できる設定とはいえない。

一方、三島は、景勝地として有名な青森県・奥入瀬渓流でのウォーキングを対象に唾液アミラーゼ活性を検討したが、予想に反して、継時的変化を認めなかったと報告している[15)]。運動および環境に関する SAA の変動については、今後さらなる検討が必要であろう。

室内活動は、運動に対する生体のストレス応答や外界からの突発的な刺激を考慮しなくてもよい利点があるが、「ウィズ」での調理プログラムが簡便であり、火を扱うこともないため、強いストレッサーとはなりがたく、SAA が顕著な増加を示さなかった可能性がある。被験者 B では、3 回目のデータで、調理開始直前の SAA が下がったが、「慣れ」が生じた可能性や、興味ある物には強いこだわりを見せる反面、あっさりと気分が冷める特性があるため、3 回目には気持ちが調理に向けにくくなっていたのかもしれない。訓練間の日数を多くとる必要があったかもしれない。

被験者 C は調理中に継続して HR の上昇が記録されたが、包丁を使用する場面があることと関連があるかもしれない。

施設に入所している知的障害者の表情などから気分変動の評価を行うことは、指導員の業務の基本である。本研究では客観的評価との比較を試みたが、明らかな関連は認められなかった。ツールとして、無段階で評価する VAS を使用したが、心理的に両端に近い部分にチェックを入れがたいことや、極端な感情の動きが生じるような、強力なストレッサーが課題として設定されていないためと考えられた。また、知的障害者の感情を読み取りにくいという現実をそのまま反映した結果とも言える。ただし、客観的評価を解釈するうえで、参考資料として有用である場面がみられた。一例をあげると、被験者Cの屋外活動終盤では 3 回とも SAA、HR が増加していたが、指導員の評価コメントは「楽しそうにしている」であり、歩行疲労による身体ストレスとは別に、「もうすぐ施設に帰って休める」という期待が外観に表出された可能性もある。また、被験者 C の調理実習で、3 回目の SAA が 2 回目の数値に比べて高かったが、評価コメントには「穏やかであったが、バナナと言いながら要求してくることが多かった」とあり、一見落ち着いているようでも、初めから気分の亢進があった可能性が示唆された。内山らは、ホースセラピーにおいて、乗馬中に気分は良かったと答えた被験者の SAA が上昇しており、SAA による生理学的応答と主観的評価との間に乖離があったことを報告している[16)]。

前述したように、メーカーによる測定範囲の上限は 200KU/L であり、今回はそれを上回ったデータが多かった。予備測定の数値と比較すると、たんなる測定ミスではなく、高値だった可能性が高いと考え、そのまま記載することにした。被験者Aでは、予備測定では平均 78.6KU/L であったが、調理実習・試食後にリビングで 1 時間くつろいだ測定ポイント④では、すべて 150KU/L を越えており（図 2-1）、安静にしているという外観だけからは分からない情動があると推察された。

今回はマンパワーの不足から、指導員１名による評価であったが、現場での複数での評価や、ビデオ撮りによって後日、多人数で評価する等の工夫も必要であろう。

5)　まとめ

簡易型の唾液アミラーゼ活性値測定モニターを使用して、重度知的障害者の社会適応訓練におけるストレスを評価するケーススタディを行った。SAA は、運動や環境等の影響を受けるほか、基準値も定まっていないため、個人の絶対的なストレス指標として応用

することは、現時点では困難と考えられた。しかし、地域生活移行へ向けて、円滑に訓練を有効に実施するためには、より深く入所者の特性を理解する必要があり、本研究のようなストレス測定は、その一助となる可能性がある。今後さらに症例を蓄積していきたいと考えている。

D. 考察

1. 対象者個人因子と地域生活移行の関連

障害認定区分を含む地域生活移行者リスト及び大島分類改訂版を用いて検討すると、現時点の移行実績と行動を含める身体、知的障害の重症度は相関せず、この時点では重症度は地域生活移行を阻む因子とは言えない。これも今後の移行進捗状態、移行する対象者の特性により結果が変化する可能性があり、再度検討が必要である。

2. 環境因子としての地域生活移行への家族の理解

平成 22 年度に未移行群である対象者の家族に地域生活移行にたいするアンケート調査を施行した。54 名中 45 名から回答を得た。移行後に強く関連している因子として保護者の要望が推定される。地域生活移行審査会議における移行者の判定基準の内容をみると判定会議を受け移行した 31 名全員が「保護者が地域生活移行を望む者」であった。障害が軽度であっても保護者を含む家族が望まなければ「移行」はあり得ない。

なお、環境因子として加齢化する移行者の課題[17) 18)]地域の医療ネットワーク[19)]、親亡き後の成年後見人の調整、終の住処の課題と検討すべき環境因子は山積している。

3. 秩父学園地域生活移行プログラムと評価システム

1) 個別支援計画立案の視点

「コスモス」と「ウィズ」評価表に基づき移行に関する個別支援計画が立案される。この「ウィズ」評価表の内容は家庭生活、地域社会生活に関わる活動を中心に構成されている。今回、「ウィズ」まとめ評価の具体例を報告した。これで示したように、対象者の地域生活の具体的な課題をリストアップし、支援法に関して行動分析による検証を重ねることで、日常活動が向上して自信と自尊心の育ちが得られることが示された。このような支援の積み重ねにより対象者の今後の社会参加を促進していく。

次段階で必要になる評価項目が「自分を守る事(自己防衛)」と「自分の権利を擁護すること」であり、アメリカ知的障害・発達障害協会の前身である米国精神遅滞協会が編集した支援尺度[20)]に提示されている。これらの項目を施行するのは家族、成人後見人または施設支援者だけではない。対象者に携わる人々、例えば地域住民の協力は不可欠である。移行後のフォローアップの時点でこの自己防衛と権利擁護の支援の検討が特に必要となる。

2) 「知的障害者の地域移行にむけた訓練家庭におけるストレス評価の試み」

医学的客観的評価(唾液アミラーゼ測定等)を地域移行トレーニングに取り入れ、支援者の観察(主観的評価)と合わせて多角的な評価を試みた。この研究の目的はふたつある。ひとつは地域生活移行へ向けて、円滑に訓練を有効に実施するためには、より深く入所者の特性を理解する必要があり、本研究のようなストレス測定は、その一助となる可能性がある。ふたつめはこのような客観的ストレス測定を並行して施行することで、支援者の観察眼と被支援者への洞察が深まることである。その成果が個別支援計画作成に反映され、支援の質の向上が期待される。

今後もこのような視点の試みを積み重ねる必要がある。

4. フォローアップシステムの構築

前述したように移行先の安定した生活はその地域のセーフティネットの状況が大きく関与する[21]。現時点において移行先施設との連携内容は対象者の日常生活の支援に関する情報交換や検討が中心となっている。しかし、今後各ライフステージで生じる課題、例えば社会参加の場の拡大、疾病や老化、家族の課題、被災や避難等においてどのように対処していくか、すべきかという検討が必要である。また、このような議論を発展させるために個別事例の情報集積が経年的に必要になる。このエビデンスの集積が「望まれる形の地域生活に関する調査研究」として地域のセーフティネットの再構築の指針作りに貢献すると考えている。

5. 今後の地域生活移行の課題

地域生活移行実績における移行先の大半(17 名中 14 名)は成人施設であった。今後、グループホーム、ケアホームの設立を検討している法人施設を優先的に候補に挙げているが、家族の要望から「施設の安全性」を重視している傾向が認められる。また、医療課題の大きい対象者は重症心身障害者を対象とする医療機関に移行している。

個人としての快適な環境設定を重視するグループホーム、ケアホームの課題として検討すべきことは地域のリソースである医療と福祉サービスの充実とそれによるセーフティネットの構築である。この点が家族の不安因子となっている。

今後、本人と家族に提供しなければならない情報として、移行先だけでなく、その地域の支援体制やセーフティネットの構築に関するものが必要である。これを迅速かつ適正に準備し、わかりやすく説明していく入念な情報提供が必要である。これにより家族の移行に関する適正な理解が促進される。

「家族が望む地域生活移行」に関して今後更に検討する必要がある。対象者の生活リズムの安定、危機管理による安心も必須条件ではあるが、支援者としてはより重要である自尊心を育む地域生活設定を確立していかなければならない。

E. 結論

現在の福祉課題である円滑な地域移行に関して、多角的評価法を導入したシステムモデルとして提示する。障害児(入所)施設における重度知的障害者の年齢超過者の地域移行を円滑に進める組織内システムを構築した。移行後のフォローアップシステムを利用して家族のさらなる信頼を得て、地域連携をはかり、今後、地域のセーフティネットの構築に関与していく。

現時点において対象者 54 名中 17 名が地域移行した。移行を困難にする個人・環境因子を分析すると、この段階では移行の有無と個人因子(知的・身体・行動的重症度)に有意差はなく、環境因子(地域移行に関する家族の理解と要望)の関与が推定された。

F. 健康危険情報　該当せず

G. 研究発表

学会発表、講演　該当せず

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得　該当せず
2. 実用新案登録　該当せず

参考文献

1) 年報. 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園　第 7 号, 2010

2)「重症心身障害児（者）の支援体制のあり方に関する調査研究事業」報告書. 独立行政法人福祉医療機構（高齢者・障害者福祉基金）助成　社団法人日本重症児福祉協会 2006

3) 重症心身障害療育マニュアル. 医歯薬出版株式会社　1999

4) Michael G.Aman、Nirbhay N.Singh、小野

善郎：異常行動チェックリスト日本語版(ABC-J) による発達障害の臨床評価．株式会社じほう　2006
5) 井上雅彦:強度行動障害の評価尺度と支援手法に関する研究．厚生労働科学研究費　補助金　障害保健福祉総合研究事業　平成 21 年度総括・分担研究報告書
6) 社会福祉法人はるにれの里
札幌市自閉症者自立支援センター
札幌市東区東雁来 12 条 4 丁目 1－5
7) 知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究　平成 22 年度　総括・分担研究報告書.2011.5-20.
8) Kazunori Takeda, Maiko Watanabe, Mieko Onishi, Masaki Yamaguchi. Correlation of Salivary Amylase Activity With Eustress in Patients With Severe Motor and Intellectual Disabilities. Jpn. J. Spec. Educ. 2008. 45(6): 447-457.
9) 下村有紀子、深澤美華恵、竹田一則　小児がん患児の医療処置におけるストレスの評価‐唾液アミラーゼ活性値と行動観察および保護者・医療者による評価との関連性の検討．ライフサポート．2010. 22: 26-32.
10) 加藤篤、鴨狩たまき、戸田文世、松井かおる、石黒光．障害者の唾液アミラーゼによるストレス評価の試み‐自閉症者と重症心身障害者の比較‐．障害者歯科．2011. 32: 539-541.
11) 下村弘治、金森きよ子、西牧淳一、芝紀代子．教育現場でのストレスマーカーとしての唾液アミラーゼと唾液コルチゾール測定の有効性について．生物試料分析. 2010. 33: 247-254
12) M. Yamaguchi, T. Kanamori et al. Correlation of Stress and Salivary Amylase Activity. 2001. 39: 234-239.
13) 竹田一則．重症心身障害児（者）とのコミュニケーションへの応用‐ストレスの計測と情動評価の可能性‐.ヒューマンインターフェースのための計測と制御．2009. 3: 282-295.
14) 三井知代．森林植物園ウォーキングによるストレス軽減効果の検討．心身医学. 2011. 51: 345－348.
15) 三島隆章．奥入瀬渓流での散策が唾液アミラーゼ活性に及ぼす影響について．八戸大学紀要．2011. 44: 35-42.
16) 内山三郎、小原翔太、朝岡将人、山手寛嗣．ホースセラピーにおける唾液アミラーゼ活性の応答．岩手大学教育学部研究年報. 2012. 71: 1-8.
17) 加我牧子：知的障害児・者の機能退行の要因分析予防体系開発に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　障害保健福祉総合研究事業　平成 18 年度総括・分担研究報告書 2007
18) 遠藤浩：知的障害者の地域移行を困難にする二次的障害とその対策に関する研究．厚生労働科学研究費補助金　障害保健福祉総合研究事業　平成 18 年度総括・分担研究報告書　2007
19) 大屋滋、村松陽子、坂井聡、伊藤盛之、堀江まゆみ：発達障害のある人の診療ハンドブック．自閉症・知的障害・発達障害児者の医療機関受診支援に関する研究会　2008
20) 渡辺勧持、古屋健、三谷嘉明 共訳　アメリカ知的・発達障害協会（AAIDD）：知的障害のある人の支援尺度(SIS)～介護から支援への転換～ Supports Intensity Scale Users Manual．中央法規　2008
21) 安心して暮らせる地域の拠点モデル事業の運営マニュアル作成事業．厚生労働省平成 21 年度障害者保健福祉推進事業　社会福祉法人　愛成会　2010

図 1　秩父学園の地域生活移行の流れ

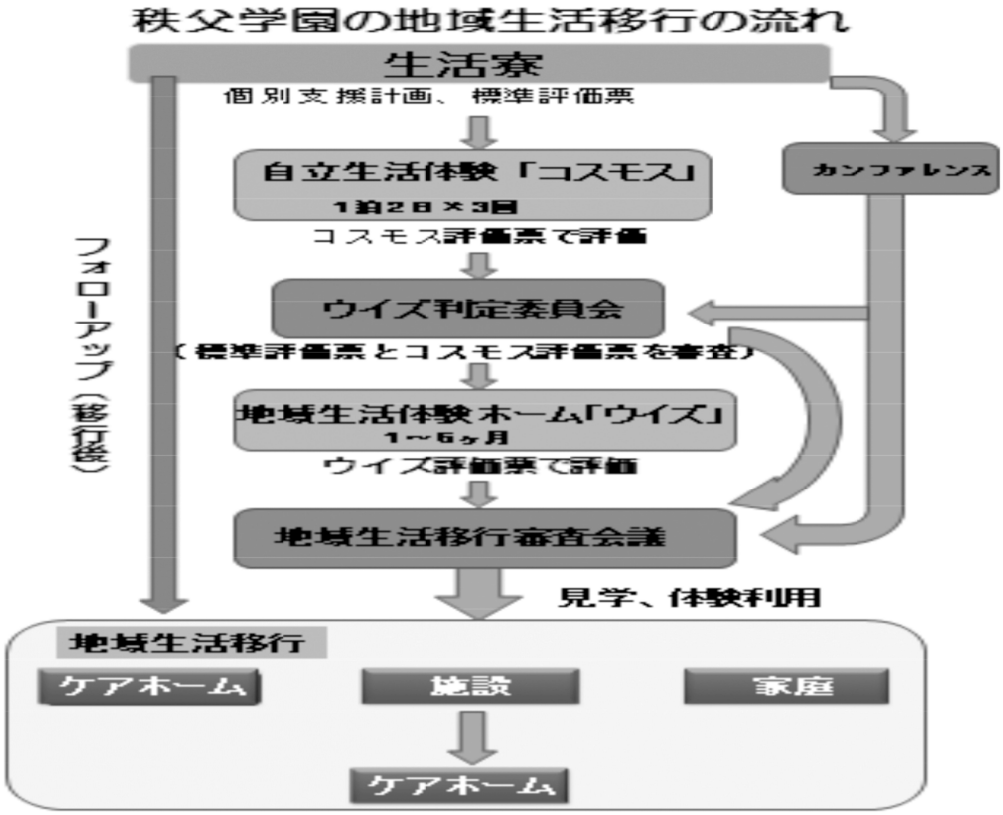


表 1　平成 24 年度　秩父学園地域移行実績

	年齢	性別	在籍年数	区分	診断名	入所形態	入所理由	移行場所	種別
1	52歳	女	41年	一	知的障害、ＳＬＥ、全盲	契約	養育困難	栃木県	重心施設
2	19歳	男	3年	5	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
3	19歳	女	5年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
4	40歳	男	33年	4	知的障害、自閉症	契約	養育困難	東京都	入所施設
5	28歳	男	15年	5	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
6	47歳	男	40年	6	ダウン症候群	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
7	30歳	男	19年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
8	38歳	男	26年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
9	28歳	男	16年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	群馬県	入所施設
10	19歳	女	4年	5	知的障害	措置	養育困難	埼玉県	家庭
11	20歳	男	15年	6	ダウン症候群	措置	養育拒否	埼玉県	入所施設
12	26歳	男	12年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
13	22歳	男	13年	6	知的障害	契約	養育困難	埼玉県	入所施設
14	40歳	男	32年	6	ダウン症候群	契約	養育困難	埼玉県	重心施設
15	39歳	男	27年	6	知的障害、自閉症	契約	養育困難	千葉県	入所施設
16	24歳	女	7年	4	知的障害、自閉症	契約	養育困難	東京都	入所施設
17	35歳	女	18年	6	知的障害、アンジェルマン症候群	契約	養育困難	東京都	入所施設

図 2　大島分類改訂版の結果

知能レベル↓	6	5	4	3	2	1	←移動機能レベル
E							簡単な計算可
D	1						簡単な文字・数字理解可
C							簡単な色・数理解可
B	27 (9)	10 (3)	2	1			簡単な言語理解可
A	5 (1)	6 (2)		1 (1)	1 (1)		言語理解不可
	戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可	

表 2　ABC－J 各項目の平均値と標準偏差（移行者と非移行者）

	Ⅰ興奮性	Ⅱ無気力	Ⅲ常同行動	Ⅳ多動	Ⅴ不適切な言語	総得点
移行者　（17名）	21.6±(11.2)	20.5±(11.3)	7.5±(5.3)	19.3±(9.3)	3.3±(3.4)	72.3±(29.9)
非移行者(37名)	23.0±(11.4)	19.0±(11.3)	9.9±(6.7)	24.5±(11.8)	3.5±(4.6)	79.9±(33.9)

図 3　移行者・非移行者の ABC-J 結果

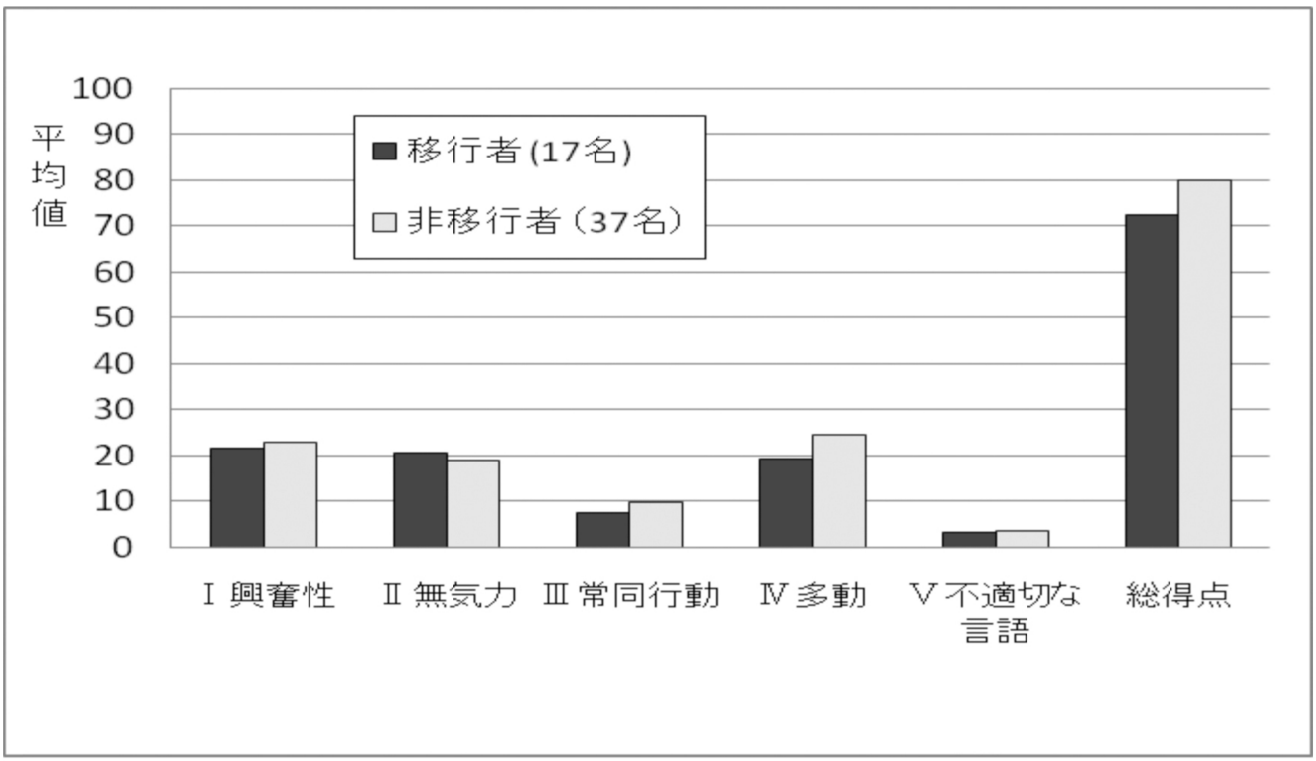


表３　ご家族・保護者への移行後についてのアンケート集計結果　※複数回答有り

※　アンケート対象者：１４家族

※　回答数：８家族

回答者内訳

父	2
母	4
兄弟姉妹	1
成年後見人	1

1.ご本人について

（1）現在のご本人の生活についてお聞かせ下さい。

大変満足している	3
まあまあ満足している	3
少し不満である	1
大変不満である	0
よくわからない	1

（2）満足と感じた理由

安定した生活で幸せそう	4
家と施設が近く頻繁に会える	2
施設がきちんと対応している	5
その他　　（　・遠いが施設が信頼でき、安心）	1

（3）不満と感じた理由

本人が不満を訴える、又は不満の様子がうかがえる	1
施設に不満がある	1
その他	0

2. ご家族・保護者の立場としてのお気持ちについて

＊秩父学園から移行するまではいかがでしたか？

（1）地域移行を薦められた時のお気持ちをお聞かせください。

本人が望むなら移行してもよいと思った	0
良いところがあれば考えたいと思った	8
突然のことで驚いた	1
本人にとって移行は無理だと思った	1
移行自体、反対だった	0

（2）一番気がかりだった点は何でしたか？

本人がなじめないのではないか	8
移行先にいられなくなった場合、家に帰されるのではないか心配	1
金銭的な負担を強いられるのではないか心配	1
移行先から面会や帰省を求められるのではないか	0
その他	0

(3) 移行を決めた一番の理由を教えてください。

本人の熱意に押された（本人の気持ちを大切にしたい）	0
施設が信頼できる（見学、体験で安心した）	5
家が近いから（秩父学園は遠い）	2
生活環境が変わったから（家族構成や住居など）	2
その他 （・本人の体調不良により福祉事務所より施設を移る事を求められた） （・親が元気なうちの移行が本人にとっても良いと考えた）	2

＊移行後の様子についてお聞かせください。

(1) ご本人との関わりはどうなりましたか？

深まった（多くなった）	2
少なくなった	4
変わらない	2

(2) お困りになっていることはありますか？

ない	7
ある （・睡眠について施設ではあまり眠れていない様子） （・職員の対応が良くない）	1

3. 移行先の施設についてお聞かせください

(1) 移行先の施設を紹介された時の印象はいかがでしたか？

とても良い	1
本人にとっては合っている	3
大丈夫だろうか？	5
その他 （・個人のスペースが狭い）	1

(2) 移行先施設に決めた理由についてお聞かせください

施設長や担当者の話を聞いて安心した	3
施設がしっかりしている	5
建物がきれい	2
家から近い	2
その他	2

(3) 移行先施設の対応についてお聞かせください

大変満足している	3
満足している	3
普通	1
少し不満	1
非常に不満	0

(4) 移行先施設へのご要望がありましたらお聞かせください。

・施設の職員体制について、1 人あたりの負担が大きい様子。改善策はないのか。

4. 秩父学園へのご意見、ご要望、近況などについてお聞かせください

・移行の時は不安だったが、今は本人が安定して生活しており安心している

表 4　コスモスの評価基準と評価結果

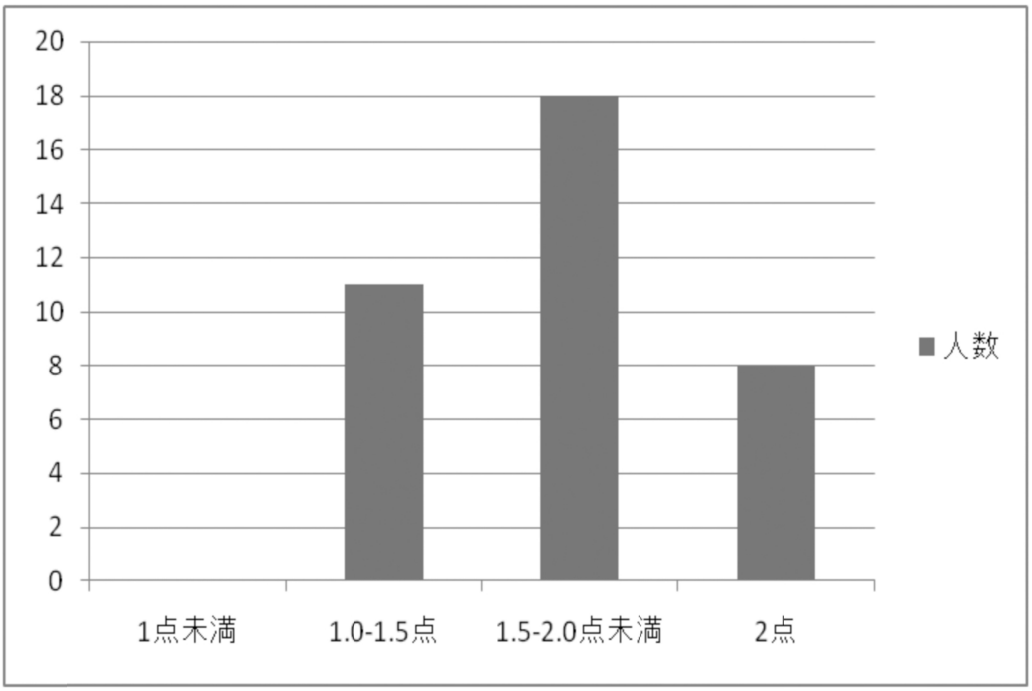
	実施1回目					実施2回目					実施3回目				
評価	2	1	0	未実施	目標設定無	2	1	0	未実施	目標設定無	2	1	0	未実施	目標設定無
日常生活関連動作（ADL）	15	20	2	0	4	18	16	3	1	5	17	17	1	2	5
余暇（自由時間の過ごし方）	28	10	4	1	0	27	15	2	0	1	28	10	1	0	3
コミュニケーション	20	9	0	1	9	16	15	1	1	9	21	10	5	0	5
家事スキル（掃除･洗濯･食事の支度･後片付け）	14	19	2	0	14	19	22	1	1	12	15	16	3	1	15
買い物	12	3	1	0	23	16	4	1	0	19	17	7	1	0	14
移動	15	10	2	1	10	20	9	2	1	8	24	5	2	1	6
その他	10	6	1	0	26	15	6	2	0	21	15	3	3	1	23
合計	114	77	12	3	86	131	87	12	4	75	137	68	16	5	71

n ＝**40**

評価対象機関　平成 22 年 5 月から平成 25 年 1 月実施

※評価基準：　2＝1 人で達成可能　1＝一部支援できる　0＝要援助　未実施＝目標設定されたが評価できなかった項目　※目標設定無＝目標が設定されなかった項目

図 4　コスモス利用者総合評価における平均点



n ＝37 名

図 5　ウィズ利用者 3 例の評価得点

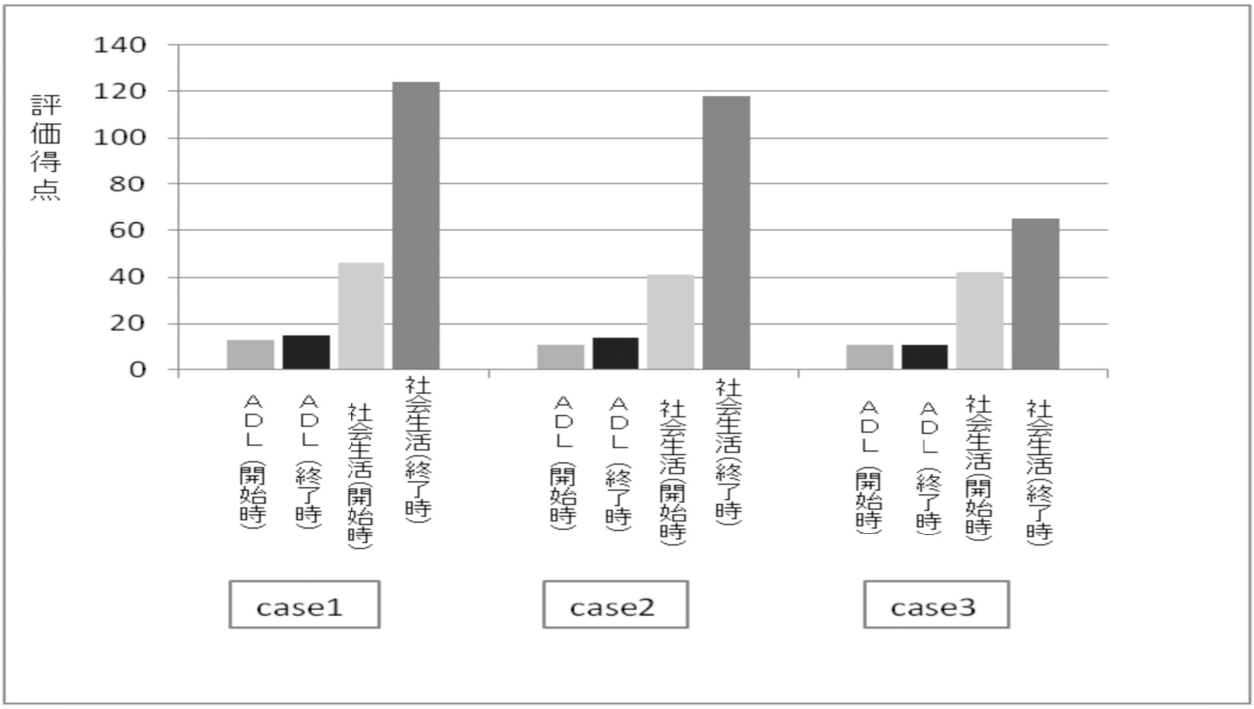


表 5　地域移行対象群における地域生活移行審査会議判断基準内訳　　H25　1 月

	判定基準	人数
1	ウィズ判定委員会で基準に達した者	(1)
2	ウィズでの生活を終了した者	(1)
3	ケースカンファレンスにて移行が妥当と判断された者	(4)
4	特別支援学校中学部 3 年に進級した者	0
5	保護者が地域生活移行を望む者	(31)
6	その他	0

審査合計人数は 31 名．（ ）内の人数は判定基準 5 と重複するケースである

表 6　被験者の属性

被験者	年代	障害・疾患	特徴・嗜好等
A	**40** 代男性	重度知的障害 自閉症　てんかん	ときに動作停止あり
B	**20** 代男性	重度知的障害 てんかん	自動車等の乗り物を好む
C	**40** 代男性	重度知的障害 自閉症　てんかん	普段の活動性は低い 食欲旺盛

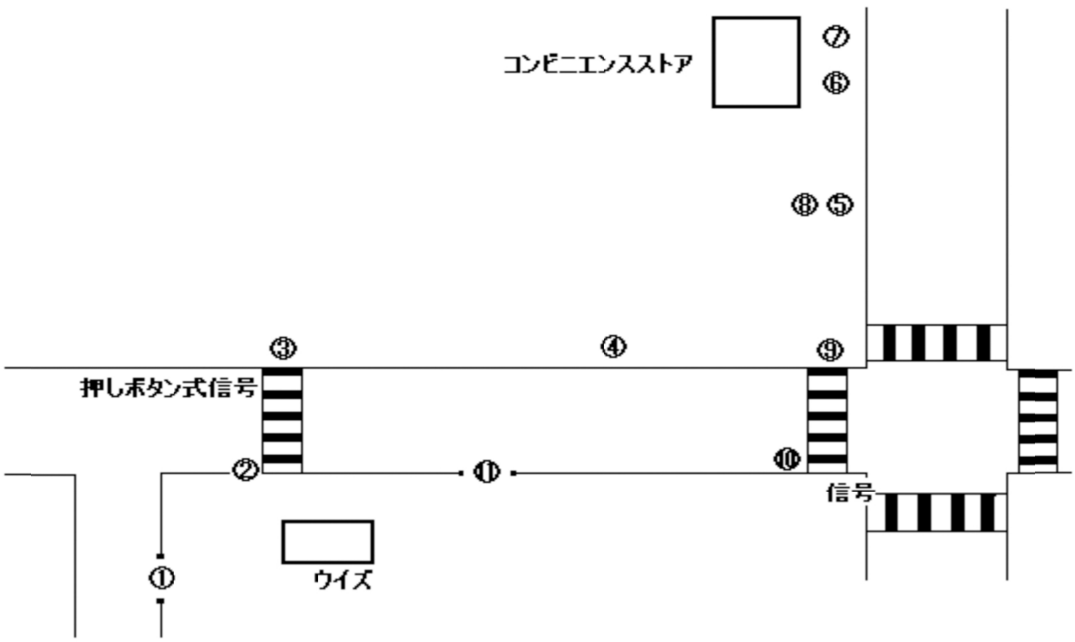
※正確な年齢、身体的障害等の個人の特定につながる情報は記載していない

表 7　唾液アミラーゼ活性値の事前測定結果

被験者	1 回目	2 回目	3 回目	平均±SD
A	85	44	107	78.7±32.0
B	143	150	244	179.0±56.4
C	23	30	33	28.7±5.1

※単位はすべて KU/L　　SD：Standard Deviation

図 6　野外活動コース図と測定ポイント



コース全長　約 1640m

①　秩父学園東門（ウイズから 60m）	①から②まで約 180m
②　押しボタン式信号手前	②から③まで 9m
③　押しボタン式信号向こう側	③から④まで 260m
④　信号間測定ポイント	④から⑤まで 400m
⑤　コンビニエンスストア手前のバス停	⑤から⑥まで 160m
⑥　コンビニエンスストア入り口前	（店内で買い物をしてレジを済ませたのち⑦へ）
⑦　コンビニエンスストア入り口前	⑦から⑧まで 160m
⑧　コンビニエンスストア手前のバス停	⑧から⑨まで 130m
⑨　自動式信号手前	⑨から⑩まで 12m
⑩　自動式信号向こう側	⑩から⑪まで 330m
⑪　秩父学園正門	

（図 1　脚注）

屋外活動に使用したコース図を示す。①から⑪の順で歩行しながら、施設の東門を出て、押しボタン式の信号のある横断歩道を渡り、直進後、交差点を直角に曲がり、コンビニエンスストア前の駐車場で、入店前後に測定後、来た道を戻り、大きな交差点で横断歩道を渡り、直進して、正門に帰ってくるというコースである。①東門をでて、信号のある通りにでるまでは、交通量の少ない道路で、この部分以外は、図には明示していないが、車道と歩道は完全にセパレートされており、縁石で隔てられ

ている。活動時間帯は午後で、交通量は多い状況である。コース周辺は建築物で囲まれている。

図 7

図 7－1　被験者 A　屋外活動

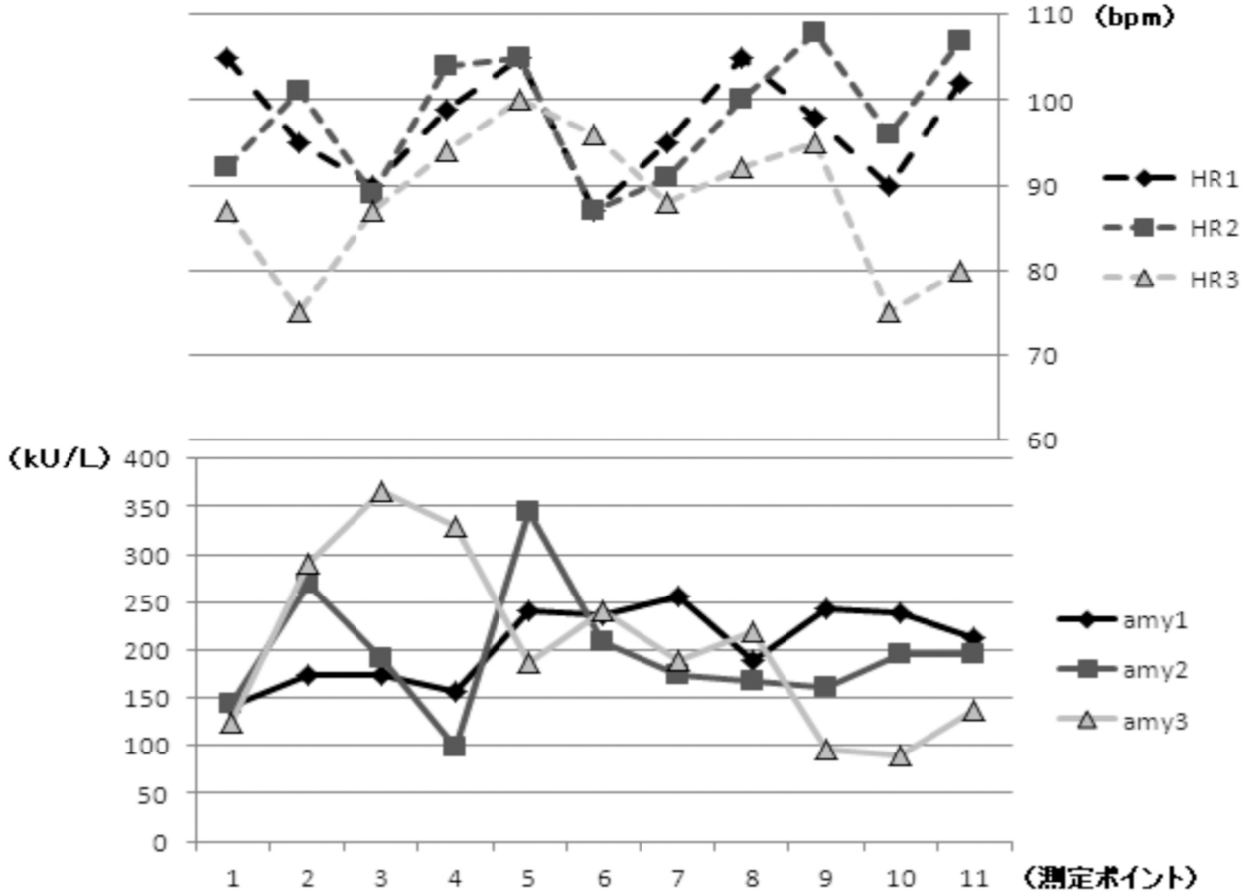


図 7－2　被験者 B　屋外活動　HR1、amy2 のポイント 2　、10 はデータなし。

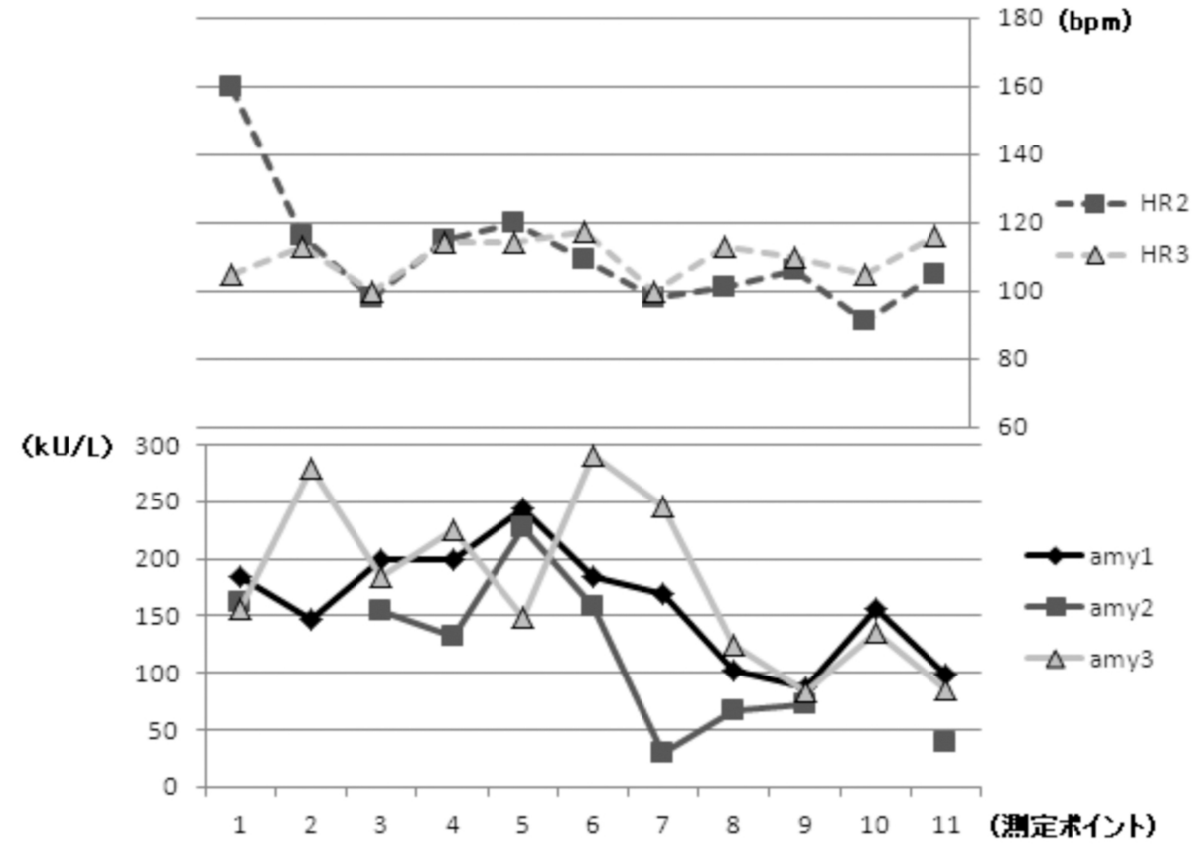
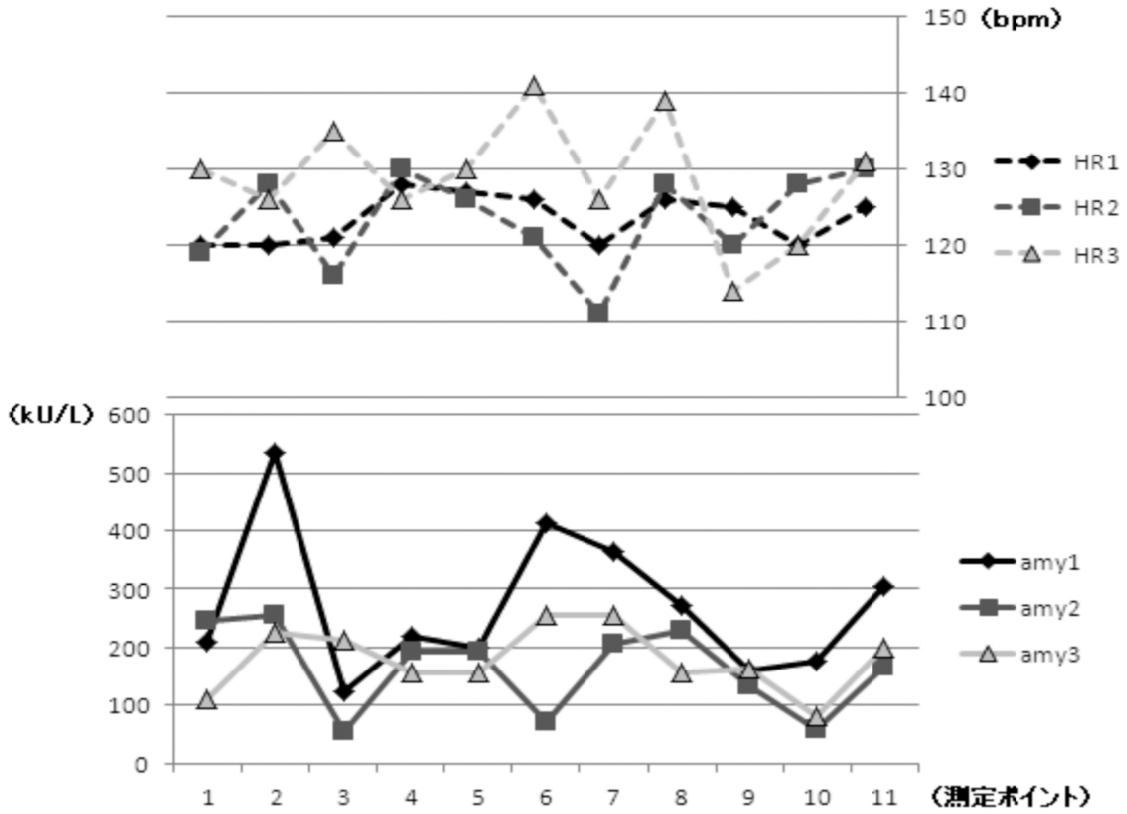


図 7－3　被験者 C　屋外活動



（図 7 脚注）
屋外活動での測定ポイント①から⑪で測定した心拍数（上段)、唾液アミラーゼ活性値（下段）を示す。各々3 回実施した。amy1：1 回目の唾液アミラーゼ活性値　HR 1 ：1 回目に唾液アミラーゼ活性値と同時に計測した心拍数　以下 2 回目、3 回目も同様

図 8

図 8－1　被験者 A　調理実習

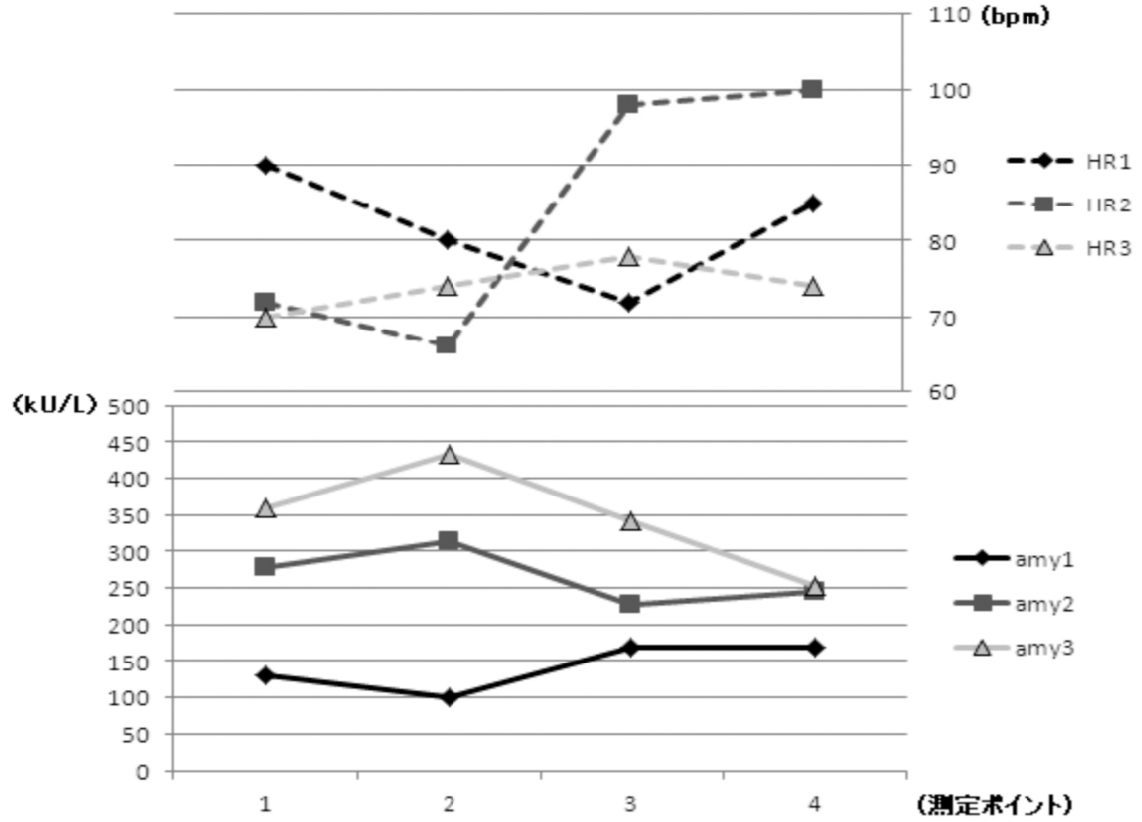


図 8－2　被験者 B　調理実習

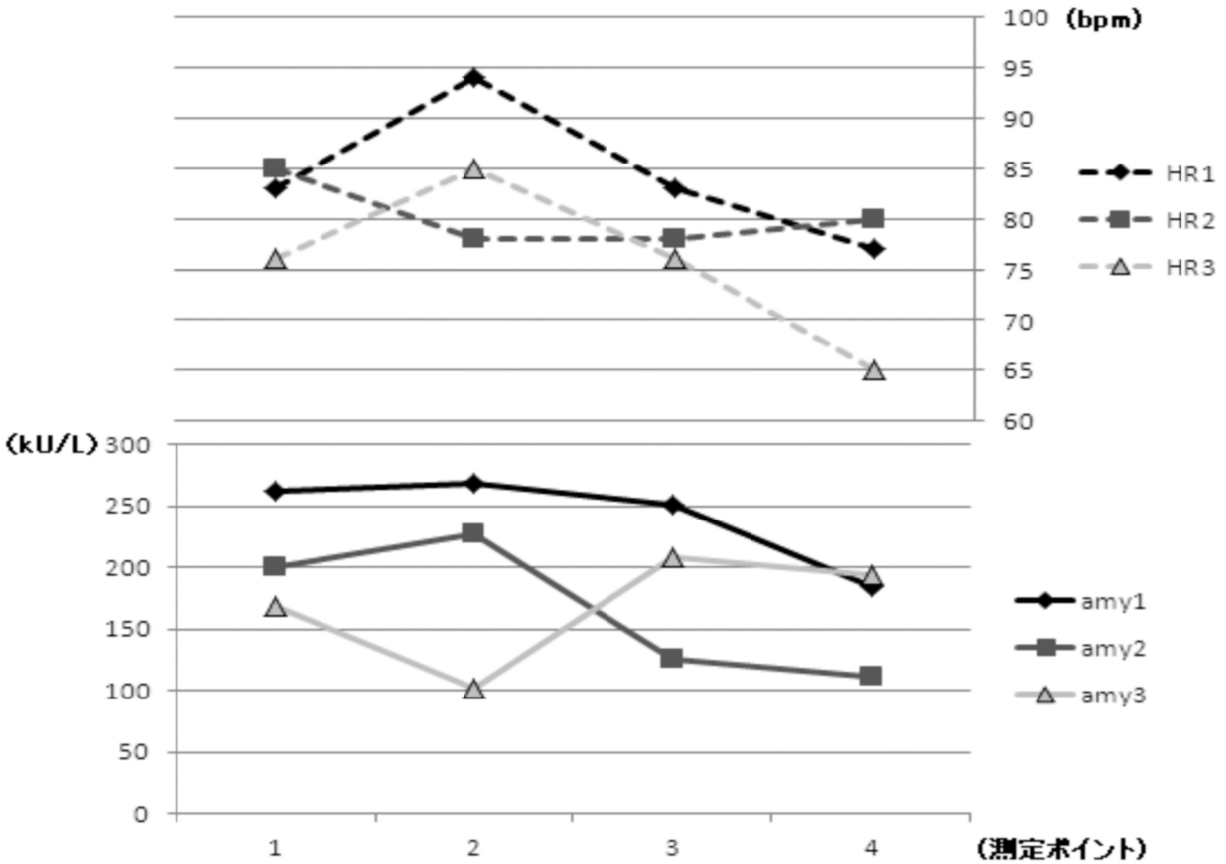
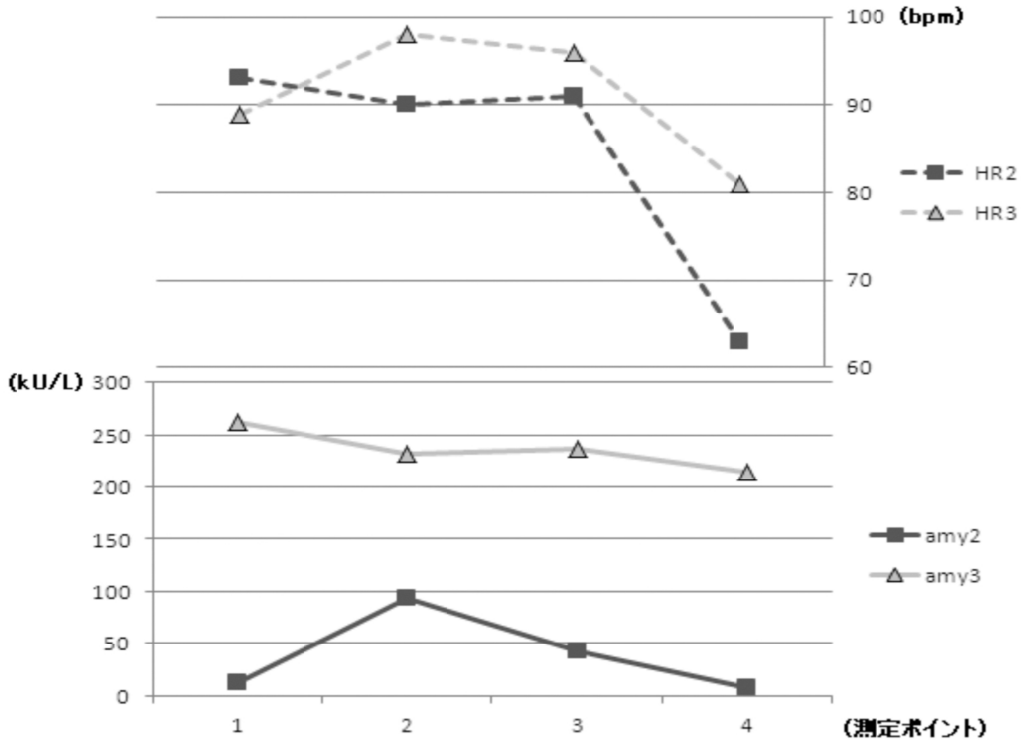


図 8－3　被験者 C　調理実習　※amy1 、HR1 はデータなし



（図 8 脚注）

調理実習での測定ポイント①から④で測定した心拍数（上段)、唾液アミラーゼ活性値（下段）を示す。各々3 回実施した。amy1：1 回目の唾液アミラーゼ活性値　HR 1 ：1 回目に唾液アミラーゼ活性値と同時に計測した心拍数　以下 2 回目、3 回目も同様

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（身体・知的等障害分野））
分担研究報告書

軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

研究代表者　深津　玲子　国立障害者リハビリテーションセンター研究所
分担研究者　四ノ宮　美恵子　国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局
研究協力者　小林　菜摘　国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局

研究要旨

軽度～正常境界域の知的障害者群として、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局（以下、自立支援局という）を利用する発達障害成人 14 名のうち、WAIS－R または WAIS－Ⅲの PIQ において 85 未満の者 6 名を対象に、就労移行支援サービスを提供しながら障害福祉サービスとしての就労支援手法の検討および開発を行った。この対象群においては、障害特性としての想像やイメージすることの苦手さに加えて、生活体験の乏しさ、就労上も支障となることが予想される日常生活上の課題、論理的思考や言語的推論にもとづいて作業を効率的に遂行することの困難さがなどみられた。そこで、支援手法の検討にあたっては、テキストなどに準拠した技能習得中心の支援プログラムではなく、体験を中心とした支援プログラムを整備するとともに、就労に向けて支援を進めていく過程において、日常生活上の課題への支援も包含した支援プログラムの開発を念頭においた。そこでは、「働く」ことを目標に、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」の 3 つの場面を支援フィールドとして、その下で体系立った体験場面を提供するとともに一つ一つの体験に対して社会的文脈に即して意味づけを再構成する支援を繰り返しながら、自己理解、他者理解、社会的規範の理解を促進することを下位目標とした支援モデルを構築した。個々の支援プログラムについては、このモデルに沿って整備した。

個別支援計画にもとづいた支援の帰結は、平成 25 年 1 月末時点で、5 名が就職、1 名が就労移行支援利用継続中であった。就職者に対しては、自立支援局と地域の障害者就業・生活支援センターとの連携による職場定着支援を実施し、5 名全員が職場定着していた。

今後、さらに事例を集積しながら、開発した軽度知的障害を伴う発達障害成人に対する就労移行支援の手法の有用性を検証していくことが課題である。

A　目的

「青年期発達障害者の円滑な地域生活移行への支援についての研究」（平成 19 年度～21 年度厚労科研）において、自立支援局では青年期の発達障害者 9 名を対象に障害福祉サービスとしての就労移行支援を提供しながら支援プログラムの検討ならびに開発を行った。その中で、①軽度～正常境界域の知的障害群に相当する発達障害者が多く含まれていたこと（88.9%）、②同様の障害特性はありながらも、論理的思考や言語的推論により作業効率を向上させる工夫が可能である知的障害を伴わない群と、軽度～正常境界域の知的障害群では、効果的な支援方法が異なる可能性があることが示唆された。

そこで、今後障害福祉サービスの対象の中心となっていくことが予想される軽度～正常境界域の知的障害を伴う発達障害成人に対する就労移行支援の手法を検討することが目的である。

B　方法

１．対象

発達障害成人のうち、①発達障害の診断が確定されていること、②就労に対するニーズがあること、③研究協力について同意が得られていること、④WAIS－R または WAIS－Ⅲの PIQ において 85 未満であること、の 5 条件を満たしている者で、平成 22 年度から平成 24 年度までの間に自立支援局において何らかの就労支援を行った 6 名を対象とした。

２．方法

上記対象に対し、障害福祉サービスとしての就労移行支援の個別支援計画に則って支援を進めながら、支援目標の達成に向けた現実的で具体的な支援手法の検討、開発を行った。開発した支援手法については、個別または小グループによるプログラムとして試行的に実施しながら、必要な修正を行った。

C　結果

１．対象者の概要

１）性別と年齢構成

性別の内訳は、男性 5 名、女性 1 名、年齢構成別では、10 代が 1 名、20 代が 5 名であった。

２）診断名

DSM-Ⅳによる診断名は、特定不能の広汎性発達障害 4 名、アスペルガー障害 1 名、自閉性障害 1 名であった。

３）手帳の取得状況

精神保健福祉手帳 4 名（うち 1 名は療育手帳も取得）、療育手帳 2 名であった。1 名は中学在籍時に取得済みであったが、それ以外の 5 名は自立支援局利用を契機に本人、家族の希望により取得に至った。

４）学歴および職歴

最終学歴は、高卒 3 名、専門学校卒 1 名、大卒 2 名であったが、うち 3 名が中途退学者であった。退学時の在籍校は、専門学校 1 名、短大 1 名、大学 1 名であった。また、全員が普通校普通学級に在籍し、教育上の特別な配慮は受けていなかった。

職歴のある者は 2 名であり、いずれも一般雇用で正社員としての勤務経験を有していた。在職期間は、最長 2 年であり、離職理由は、解雇または業務遂行上の不安による自己都合退職であった。

５）WAIS-R または WAIS-Ⅲによる検査結果

WAIS-R 受検者は 2 名であり、平均 PIQ は 58（最小値 54、最大値 62）、平均 FIQ は 63.5 であった。WAIS-Ⅲ受検者は 4 名であり、平均 PIQ は 72.5（最小値 60、最大値 83）、平均 FIQ は 80.3 であった。

２．支援期間および支援時間数

自立支援局における支援期間（就職後の職場定着支援は除く）は、14 月から 21 月とばらつきがみられたが（平均 16.8 月）、平成 22 年度から現行の支援プログラム導入後は 14 月から 17 月（平均 15.3 月）で就職という支援目標が達成されていた。17 月の支援期間であった者は、利用開始直後に

東日本大震災があったことにより、交通事情から 1 月間自宅待機の措置をとったため、実質の利用期間は 16 月であった。

利用継続中の 1 名を除く、平均支援時間数は、1688.0 時間であった。支援内容別の時間数は、図１のとおりであった。従前の支援プログラムを実施した群（A、B）では、職業訓練の占める時間数が平均 82.8%であったのに対し、現行の支援プログラムを実施した群（C、D、E、F）では、平均 65.2%であり、相対的に職業訓練の占める割合が減った。一方で、生活支援や就職活動に向けた支援などを含む就労支援、企業等における職場実習、作業療法、その他（リハビリテーション体育、個別面接など）を合わせた割合が増加した。

３．支援体系および支援内容

１）支援体系

平成 22 年度から体験型の支援プログラムの整備に着手し、平成 23 年度には、「働く」を支援目標に、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」の３つの場面を支援フィールドとした体験型の支援モデルとして再構成を行った。それらをとおして、個々の特性や理解の状況に合わせて可能な限り一つ一つの体験に対し、体験場面の導入前と体験後に意味づけを再構成する支援を繰り返しながら、自己理解、他者理解、社会規範の理解を促進することをめざした。日常生活上の課題への支援も、「働く」という同じ文脈の下で意味づけを行い、支援プログラムの中に位置づけた。こうして、支援の文脈を明確化し、その中で体験とその意味づけの支援を行うことにより、論理的思考力や言語的推論力の不足を補うものとした。

考案した就労移行支援モデルは、図 2 のとおりである。

施設内訓練においては、職業訓練（パソコン操作の習得・習熟訓練、郵便物の仕分け・配付、封入・宛名ラベル作成等の郵便物発送準備、消耗品類の在庫確認、倉庫整理、清掃、ファイリング、求人情報の入力、雑誌等のデータベース作成、会議室の設営など）、作業療法（手工芸、作業時の身体の使い方、全身運動など）、就労支援（就労マッチング支援、履歴書作成支援、就職面接の支援、地域支援機関への登録支援など）からなる支援プログラム（図 3 参照）を個別支援計画にもとづき週単位で作成した。職業訓練では、自立支援局における実際の業務から切り出して、体験的な訓練となるように配慮を行ったほか、その他の訓練においても体験の付与を意図した内容となるように配慮した。また、低体力で身体バランスの不良な者が多いことから、体力向上や身体バランスの向上をねらいとした訓練を作業療法士および体育訓練（球技、水泳など）を担当する運動療法士が実施した。

行事参加においては、それぞれの利用者が学校生活において行事参加の経験があった場合でも、主体的に参加した経験がある者はなく、むしろ行事で疎外感を強くもった者が多かったことから、主体的に参加する体験を付与し、そこから自己と他者の役割を認識する、協働作業を体験することなどをねらいとした支援を行った。特に、文化祭では、手作り菓子をメニューに加えた喫茶店を出店することにより、来客者に対するもてなしや人から喜ばれるという体験の機会を付与することをねらいとした。

職場実習においては、施設内訓練や行事

参加における体験をとおして促進された自己理解や他者理解、社会規範の理解を、実際の職場において確認し、さらに促進するための機会として捉え支援を行った。支援にあたっては、地域の支援機関である障害者就業・生活支援センターと連携しながら、職場実習先の選定や実習場面での支援を行った。

また、これらの 3 つの場面を統合した意味づけの支援を行う面接場面を随時設定したほか、日常生活上の体験の幅を広げ、就労に直結した生活上の課題解決を図る支援として、日常生活訓練（身だしなみ、買物、調理、洗濯、被服管理など）を実施した。そのほか、支援の状況について情報を共有し、支援に対する理解を促進することをねらいとして家族支援を実施した。

利用開始時から、先に示した就労移行支援モデルにもとづいた支援を行った利用者 2 名の支援時間の内訳は図 3 のとおりであった。

2）職場定着支援

職場に専門の支援員が配置されていることを理由に支援不要とされた 1 名を除き、就職者については地域の障害者就業・生活支援センターとの連携の下に、職場定着支援を実施した。個々の就職先の状況に応じて、関係機関と調整しながら職場訪問の頻度を決めて、主として第 1 号ジョブコーチ養成研修を修了した就労支援員が職場を訪問し、職場の担当者と情報交換を進めながら就労上の課題をアセスメントし、課題解決に向けた支援を行った。特に、発達障害者の雇用が初めての企業に対しては、関連資料による情報提供を行ったほか、実際の事例をとおして特性理解や対応方法の理解のための支援を行った。職場定着支援は、概ね 6 ヶ月を目途とし、個々の状況によっては最長 1 年に及んだ。この間に、徐々に支援の主体を障害者就業・生活支援センターに移行していった。

職場定着の期間は、就職して 5 月の間もない事例を除き、いずれも 22 月以上であった。

4．帰結状況

本研究対象者 6 名中 5 名が自立支援局における支援（職場定着支援を除く）を終了しており、1 名が利用継続中である。

5 名の帰結状況については、平成 25 年 1 月末現在で全員が就職し、職場に定着していた。

就職者 5 名の職種は、作業系 4 名、事務補助 1 名であった。

D　考察および結論

平成 23 年度は、平成 22 年度に着手した支援プログラムの整備を受けて、さらに見直しと修正を進め、「働く」という支援の文脈の下に、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」を有機的に統合した体験型の支援モデルを開発した。平成 24 年度は、開発した支援モデルの有用性について事例検討による検証を試みた。

この支援モデルにもとづいて個別支援計画を作成し、支援を進めた結果、事例数としては少ないものの、支援対象となった者がいずれも就職という支援目標が達成された。また、就労移行支援モデルの考案とその導入により、支援の文脈が統一された結果、合理的なサービス提供が図られ支援期

間も短縮したものと考えられた。全員が職場定着している点については、就労上も支障となることが予想された生活上の課題に対して、施設内訓練として事前に支援に取り組んだ結果、安定した生活リズムや生活習慣が獲得されたことも要因となっていることが推測された。

事例検討からは、軽度知的障害を伴う発達障害成人に対する支援手法として、障害福祉サービスとしての就労移行支援事業の枠組みに則し、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」を有機的に統合した体験型の支援体系の下で、各体験プログラム導入前後に意味づけを再構成するための支援を繰り返し行いながら、自己理解、他者理解、社会規範の理解の促進を図る支援プログラムの有用性が示唆された。これは、支援の文脈の明確化と、論理的思考力や言語的推論力の不足を補うものとして体験とその意味づけを再構成するための支援を繰り返す手法が有効であったと考えられた。

今後、さらに事例を集積しながら、開発した軽度知的障害を伴う発達障害成人に対する就労移行支援手法の有用性を検証していくことが課題である。

E　健康危険情報　　なし

F　研究発表

１．論文発表　なし

２．学会発表

１）水村慎也，四ノ宮美惠子，小林菜摘，深津玲子，車谷洋：青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業１－支援の実施状況－，日本発達障害学会第 46 回研究大会，2011，8.

２）小林菜摘，四ノ宮美惠子，水村慎也，深津玲子，車谷洋：青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業 2－小グループによる支援の試み－，日本発達障害学会第 46 回研究大会, 2011, 8.

３）車谷洋，深津玲子，四ノ宮美惠子，水村慎也，小林菜摘：青年・成人期にある発達障害者の運動能力，日本発達障害学会第 46 回研究大会，2011，8.

４）小林菜摘，四ノ宮美惠子，水村慎也，深津玲子，車谷洋：発達障害者を対象とした小グループでの就労支援に向けた支援プログラムの試み，第 19 回職業リハビリテーション研究発表大会，2011，12.

５）四ノ宮美惠子，小林菜摘，深津玲子：障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅰ）－青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から－，日本発達障害学会第 47 回研究大会，2012，8

６）小林菜摘，四ノ宮美惠子，深津玲子：障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅱ）－青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から－，日本発達障害学会第 47 回研究大会，2012，8

７）鈴木さとみ，深津玲子，四ノ宮美惠子：自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査－ICF-Based アセスメントの開発と試行による一考察－，日本発達障害学会第 47 回研究大会，2012，8

８）車谷洋，深津玲子，四ノ宮美惠子，小林菜摘：就労移行支援を要する発達障害成人の上肢機能の調査－年代平均値および標準値との比較より－，日本発達障害学会第

47 回研究大会，2012，8

９）小林菜摘，四ノ宮美惠子，深津玲子：障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援モデルの検証の試み，第20回職業リハビリテーション研究発表大会，2012，11.

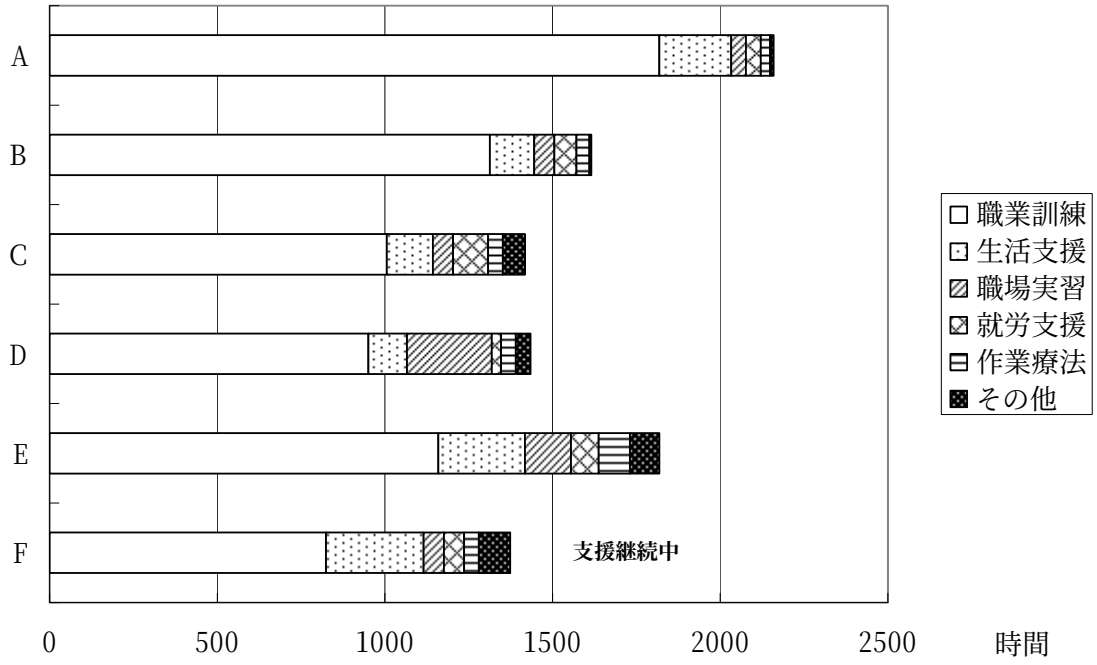


図１　利用者別支援時間数

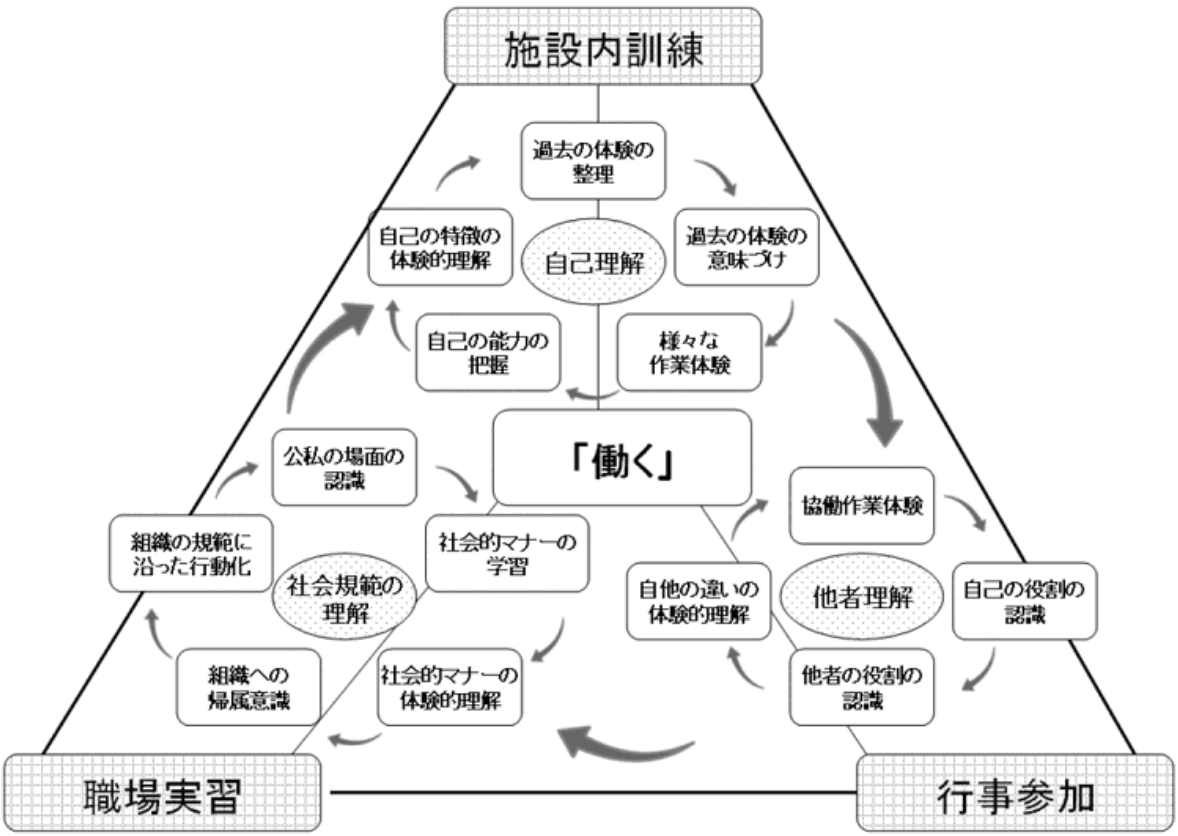


図２　就労移行支援モデル

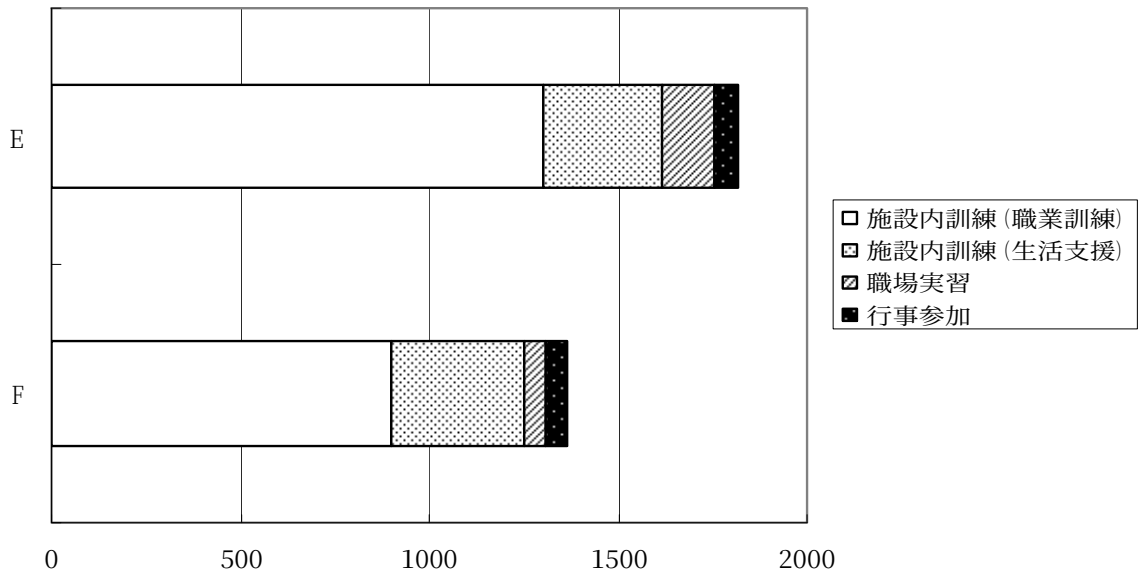


図 3　就労移行支援モデルにもとづいて支援を行った利用者の支援時間の内訳

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

分担研究者　四ノ宮美恵子　国立障害者リハビリテーションセンター　自立支援局
研究協力者　鈴木さとみ　国立障害者リハビリテーションセンター　病院

研究要旨

本研究の目的は、発達障害者の支援ニーズを客観的に評価し、当事者中心の地域連携の促進を図るためのアセスメントツールを作成することである。

初年度は文献検討を行い、最近の International Classification of Functioning, Disability and Health（国際生活機能分類、以下、ICF）の活用の動向及びコアセットの作成手順について調査をした。次に、ICF をベースにした質問紙の作成手続きに準拠し文献レビューを行った。

次年度は、ICF コアセット開発の手続きに準拠し、ICF の活動と参加及び環境因子項目の抽出を行い、試行版アセスメントシートを作成した。発達障害者 3 名とその支援者、及び統制群として高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の者で発達障害の診断のない統制群 15 名を対象に、試行版アセスメントシートを用いて予備調査を実施した。方法は、研究対象者全てに半構造化面接を実施し、統制群には SRS-A（対人応答性尺度）への回答を依頼した。支援者には質問紙調査で依頼した。調査結果については統計学的に処理を行った。

最終年度は、予備調査の結果を踏まえ、研究者間で表現法等を再度検討し調査紙に修正を加えた。また、質問項目の回答の分布の偏りから質問項目の一部を削除した。改訂版アセスメントシートを就労支援サービスを受給する発達障害者 21 名とその支援者、及び統制群として高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の者で発達障害の診断のない統制群 21 名を対象に調査を実施した。調査結果は統計学的に処理を行った。

A　研究目的

本研究の目的は、発達障害者の支援ニーズを客観的に評価し、当事者中心の地域連携の促進を図るためのアセスメントシートを作成することである。発達障害が障害者自立支援法の対象として明確に位置づけられ、同法におけるサービス利用者の増加が予想される。しかしながら実際のところ、個別支援計画策定や地域連携体制の構築にあたり共通のアセスメントツールがなく支援ニーズや課題が共有化されにくいという状況が生まれている。障害者自立支援法では、指定障害福祉サービス事業者に個別支援計画の作成及び、これを基にしたサービスの

提供、モニタリング・評価の実施により利用者に対して適切で効果のあるサービスを提供することが義務付けられているが、関連業務に従事する支援者間において共有できる客観的評価ツールは少ない。
このような現状を踏まえ、本研究では支援者が介入の初期段階において利用者のうまく表現できない困り感・ニーズを把握し、個別支援計画の作成・実行・評価及び環境等状況の変化に合わせたモニタリングに客観的指標を提供するアセスメントシートである ICF を基にした調査票(以下, ICF 調査票)を作成することを目的とした。

B　研究方法

１．対象

就労支援サービスを受給する発達障害者 21 名（以下、ASD 群）（男性 19 名、女性 2 名）とその支援者、及び統制群として高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の者で発達障害の診断のない者 20 名（以下、統制群）

２．方法

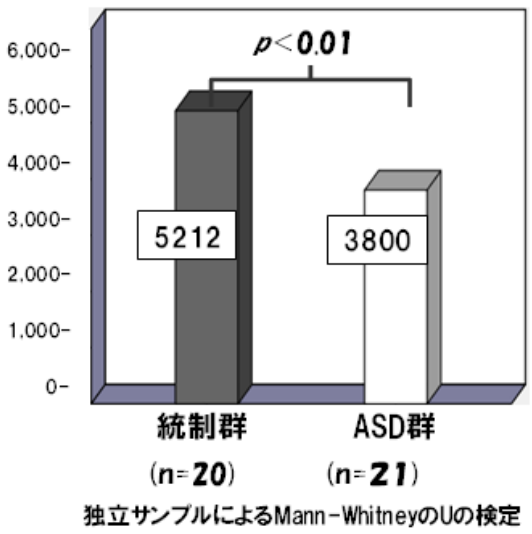
初年度及び次年度において、ICF の活動と参加及び環境因子項目に関して、ICF コアセット開発の手続きに準じ、試行版 ICF 調査票を作成、予備調査を行った。
最終年度である本年度は、予備調査の結果をもとに研究者間で表現法等を再度検討し調査紙に修正を加えた。また、質問項目の回答の分布の偏りから質問項目の一部を削除した。改訂版 ICF 調査票を用いて、発達障害者２１名とその支援者、及び統制群として高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の者で発達障害の診断のない統制群 20 名を対象に調査を実施した。方法は、研究対象者全てに半構造化面接を実施し、支援者には質問紙調査で依頼した。調査結果については統計学的に処理を行った。

（倫理面への配慮）

本研究は、国立障害者リハビリテーションセンターにおける倫理審査委員会の承認を受けて実施された。調査対象者全てに調査目的や方法を紙面と口頭で説明し、調査協力の同意を得た。

C　研究結果

ASD 群及び統制群はそれぞれ、21 名（男性 19 名、女性 2 名）、20 名（男性 15、女性 5）、平均年齢はそれぞれ、24.8±4.2 歳、21.7±3.0 歳であった。
独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定の結果、ASD 者と統制群とで ICF 総得点に有意差がみられた（$p<0.01$）。（図 1）



（図 1）ICF 総得点の群間差

下位項目の第一分類の活動と参加では、「学習と知識の応用」（$p<0.01$）、「一般的な課

題と要求」（$p<0.01$）、「コミュニケーション」（$p<0.01$）、「家庭生活」（$p<0.01$）、「対人関係」（$p<0.01$）、「主要な生活領域」（$p<0.01$）、環境因子では「支援と関係」（$p<0.01$）、「サービス、制度、政策」（$p<0.01$）について有意差がみられた。（表 1-1、表 1-2）

支援者評価の回収率は 100%であったが、15 の調査票において欠損値がみられたため総得点及び第 1 分類において有意差検定を行うことができなかった。なお、支援者評価のうち第 2 分類及び詳細分類の項目では、62 項目中 27 項目は有効回答であった。有効回答項目全てについて、有意差検定を実施したところ、「話し言葉の理解」、「非言語的メッセージの理解」、「書き言葉によるメッセージの理解」、「非言語的メッセージの表出」、「会話の持続」、「多人数での会話」といった「コミュニケーション」領域と「複雑な対人関係」において ASD 群の自己評価は支援者よりも有意に低かった。（表 2-1、表 2-2）支援者評価のうち、支援者が回答しやすかった項目は、「コミュニケーション」と「移動・運動」であったが、「コミュニケーションの理解」の分類において、支援者は ASD 者が認識するよりも ASD 者のコミュニケーションの理解度を高く見積もっていた。

D　考察

ICF 調査票を用いた調査の結果は、ASD 群は統制群よりも社会生活上の活動や参加に制限があると感じていることを示す結果であった。ASD 者は自己を客観的に評価することの困難さが示されているが、ASD 群の自己評価の結果は統制群と比較して有意に低く、特に自閉症の特性を反映する項目に多かった。本研究で作成した ICF 調査票は ASD 者の支援ニーズを把握するのに適していると考えられた。

支援者評価において欠損値が多かったことは、就労支援機関によって提供するサービスメニューが異なるため，支援者が利用者の状態・状況について把握する内容が異なることが一因するのではないかと考えられる。一方で、ASD 者が安定した職業生活を送るには日常生活が安定して営めていることがキーポイントの 1 つとなるため、支援者が介入初期から社会生活上の課題を構造化した方法で把握することは特性や個人の支援ニーズにより即したサービスを提供するのに必要であると考えられた。

また、支援者評価において、支援者は ASD 者が認識するよりも ASD 者のコミュニケーションの理解度を高く見積もる傾向があることを示唆していた。ASD 者にはそれまでの社会生活の中の言語でのやり取りにおいて、会話相手に対して、実際には理解していなくても「理解している」と判断させるような会話能力と会話への応答様式がある程度確立している場合が多く、支援者も ASD 者が主観的に捉えるよりの有意に彼らの理解能力が高いと認識していると考えられる。

本研究では、ICF のコアセットに依拠した ASD 成人版の ICF 調査票を開発しその有用性を確認した。

ICF の活用については、特定の疾患や障害のある人の状態を評価するために作成された ICF コアセットは、脳卒中、うつ病、肥満、外傷性脳損傷、睡眠障害、ヨーロッパの社会保障システムにおける障害者評価、職業リハビリテーションなどの領域におけ

る開発等にみられるが、ASD 者を対象としたものはなく、本研究で作成した ICF 調査票が初の試みとなる。国際的な共通言語を使用する疾患別ごとの ICF 調査票は、障害別国際比較を可能とするものである。

WHO-FIC （ WHO Family of International Classifications）では、ICD のコードと定義を ICF に整合させ、ICD と ICF を公衆衛生のための WHO の参考分類として併用することが検討されており、本研究は、発達障害領域の疾病分類に対する生活機能分類を提示するための 1 つの試みとなる。

国内では、ASD 者への障害福祉サービスにおいて、ASD 者の個人的・社会的事象を客観的に評価し共通言語を提供するツールがないため、サービス利用者と支援者間で、及び支援者間の連携やケアマネジメントにおいて齟齬が生じやすい状況が生まれている。ICF は、利用者及び支援者に共通言語を提供するものである。

また、障害者自立支援法では指定障害福祉サービス事業者に個別支援計画の作成及び、これを基にしたサービスの提供、モニタリング・評価の実施により利用者に対して適切で効果のあるサービスを提供することが義務付けられている。しかしながら、障害福祉サービスの効果を量的に把握する統一的な方法がほとんどないため、本研究で開発した ICF 調査票は個別ケースの介入効果を量的に把握するツールとして役立つことが期待されると考えられる。

E　結論

本研究では、ASD 者の支援ニーズを客観的に評価し、当事者中心の地域連携の促進を図るためのアセスメントツールを作成するため、就労支援サービスを利用する ASD 者とその支援者、及び ASD の診断のない同年齢の若者を対象にした調査を実施した。

ASD 者は自己を客観的に評価することの困難さが示されているが、ASD 群の自己評価の結果は、統制群よりも有意に低く、作成したアセスメントツールは、ASD 者の日常生活上の支援ニーズを系統的に把握するのに適していると考えられた。

ASD 者への自己評価に対する支援者の他者評価は、支援者によって ASD 者の日常生活機能の把握にバラつきがあることが分かった。支援者は、発達障害者が見積もるよりもコミュニケーションの理解に関して困難さを過小評価していた。ASD 者の日常生活上の支援ニーズを把握するためには、ある程度構造化した方法で系統的に行う必要があり、また、介入の効果測定をするためには、初期評価時に自己評価と支援者評価の差の傾向を把握しておくことは、重要であると考えられた。

F　研究発表

1.　論文発表

鈴木さとみ, 深津玲子, 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究 ICF-Based アセスメントを用いた調査による一考察. 第 53 回日本児童青年精神医学会総会　抄録集, 2012: p. 337.

鈴木さとみ, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査. 日本発達障害学会第 47 回研究大会発表論文集, 2012: p. 130.

2.　学会発表

鈴木さとみ，深津玲子，四ノ宮美恵子，自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査 日本発達障害学会第 47 回研究大会，横浜, 2012-08-12

鈴木さとみ，深津玲子，自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究 ICF-Based アセスメントを用いた調査による一考察 第 53 回日本児童青年精神医学会総会，東京, 2012-11-01

鈴木さとみ，中小企業における手帳のない発達障害を持つ人の就労～持続可能なマッチングのために～，日本 LD 学会第 21 回大会, 自主シンポジウム, 指定討論者, 仙台，2012-10-8

G　知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

１．　特許取得　なし

２．　実用新案登録　なし

３．　その他　なし

参考文献

世界保健機構（WHO）（2002）ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－．中央法規

第 11 回社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会　配布資料 1－1WHO-FIC ネットワーク年次会議（ケープタウン）報告

Marcel W. M, Luc P. de Witte, Enid Reichrath, Manon M. Verdonschot, Gert Jan Wijilhuizen, Rom J. M. Perenboom (2008) Development and Validation of IMPACT-S, An ICF-Based Questionnaire to measure Activities and Participation, J Rehabilitation Medicine 40:620-627

World Health Organization (2001) International Classification of Functioning, Disability and Health short version. Geneva

World Health Organization Geneva (2002) ’ WHO/EIP/GPE/CAS/01.3, Towards a Common Language for Functioning, Disability and Health ICF ＜ http://www.who.int/classifications/icf/training/icfbeginnersguide.pdf＞ （最終アクセス日 2012 年 2 月 29 日）

ICF Code第1分類	ASD群 vs 統制群	
総得点	0,000	＊＊
a1　学習と知識の応用	0,001	＊＊
a2　一般的な課題と要求	0,000	＊＊
a3　コミュニケーション	0,000	＊＊
a4　運動・移動	0.120	
p5　セルフケア	0.179	
p6　家庭生活	0,000	＊＊
p7　対人関係	0,000	＊＊
p8　主要な生活領域	0,000	＊＊
p9　コミュニティライフ・社会生活・市民生活	0.582	
e3　支援と関係	0,001	＊＊
e4　態度	-	–
e5　サービス・制度・政策	0,000	＊＊

独立サンプルによるMann-WhitneyのUの検定

＊ $p < .05$, ＊＊ $p < .01$

表1-1　ICF総得点及び第一分類における群間差

No	活動と参加	ICF Code 2nd 3rd	ICF Code分類（Domain）	ASD vs Control *P*-value	
	第1章　学習と知識の応用				
1	目的をもった感覚的経験	d110	注意して視ること	0,000	＊＊
2		d115	注意して聞くこと	0.004	＊＊
3		d120	その他の目的のある感覚(触覚)	0.434	
4			その他の目的のある感覚（味覚）	0.380	
5			その他の目的のある感覚（嗅覚）	0.073	
6	基礎的学習	d130	模倣	0.079	
7		d155	技能の習得	0.123	
8	知識の応用	d160	注意を集中すること	0.537	
9		d163	思考	0.027	＊
10		d166	読むこと	0.140	
11		d175	問題解決	0.004	＊＊
12		d177	意思決定	0.039	
	第2章　一般的な課題と要求				
13		d210	単一課題の遂行	0.073	＊
14		d2103	グループでの単一課題の遂行	0,002	＊＊
15		d220	複数課題の遂行	0,000	＊＊
16		d2203	グループでの複数課題の遂行	0,000	＊＊
17		d230	日課の遂行	0.263	
18		d240	ストレスとその他の心理的要求への対処	0.011	＊
19		d2402	危機への対処	0.137	
	第3章　コミュニケーション				
20	コミュニケーションの理解	d310	話し言葉の理解	0.050	＊
21		d315	非言語的メッセージの理解	0,008	＊＊
22		d325	書き言葉によるメッセージの理解	0.023	＊
23	コミュニケーションの表出	d330	話すこと	0.054	＊
24		d335	非言語的メッセージの表出	0,000	＊＊
25		d345	書き言葉によるメッセージの表出	0.026	＊
26	会話並びにコミュニケーション用具および技法の利用	d350	会話	0,000	＊＊
27		d3500	会話の開始	0.006	＊
28		d3501	会話の持続	0,000	＊＊
29		d3502	会話の終結	0,000	＊＊
30		d3504	多人数での会話	0,000	＊＊
31		d355	ディスカッション	0.002	＊＊
	第4章　運動・移動				
32		d4503	障害物を避けての歩行	0.090	＊
33		d470	交通機関や手段の利用	0.915	
	第5章　セルフケア				
34		d520	身体各部の手入れ(頻度)	0.581 [1)]	
35			身体各部の手入れ	0.106	
36		d5201	歯の手入れ	0.512	
37		d530	排泄	0.906	
38		d540	更衣	0.490	
39		d5404	適切な衣服の選択（ドレスコード）	0.199	
40			適切な衣服の選択（身だしなみ）	0.002	＊＊
41		d550	食べること	0.885	
42		d570	健康に注意すること	0,666	
43		d5701	食事や体調の管理（時間）	0.008	＊
44			食事や体調の管理（食事の量）	0.297	
45			健康の維持（体調管理）	0,001	＊＊

46		d5702	健康の維持（飲酒）	0.004 1)	＊
47			健康の維持（睡眠）	0.029 1)	
	第6章　家庭生活				
48	必需品の入手	d610	住居の入手	0,001	＊＊
49		d620	物品とサービスの入手	0,000	＊＊
50	家事	d630	調理	0,000	＊＊
51		d640	調理以外の家事	0,000	＊＊
52	家庭用品の管理及び他者への援助	d660	他者への援助	0.021	＊
	第7章　対人関係				
53	一般的な対人関係	d710	基本的な対人関係	0.000	＊＊
54		d720	複雑な対人関係	0.614	
55		d7203	社会的ルールに従った対人関係	0.008	＊＊
56	特別な対人関係	d730	よく知らない人との関係	0.014	＊
57		d740	公的な関係	0.000	＊＊
58		d750	非公式な社会的関係	0.000	＊＊
59		d7504	仲間との非公式な関係	0.000	＊＊
60		d760	家族関係	0.048	＊
61		d770	親密な関係	0.013	
	第8章　主要な生活領域				
62	教育	d830	高等教育	0.000	＊＊
58	仕事	d845	仕事の獲得・維持・終了	0.014	＊
		d850	報酬を伴う仕事		
59	経済生活	d865	複雑な経済的取引き	0,007	＊＊
	第9章　コミュニティライフ・社会生活・市民生活				
60		d910	コミュニティライフ	0.169	
61		d920	レクリエーションとレジャー	0.009	＊＊
62		d998	その他の特定の、コミュニティライフ・社会生活・市民生活	0,233	
	環境因子				
	第3章　支援と関係				
68		e310	家族	0.004	＊＊
69		e355	保健の専門職	0.000 1)	＊＊
70		e360	その他の専門職		自由記述
	第4章　態度				
71		e410	家族の態度		
		e430	権限をもつ立場にある人々の態度		
		e450	保健の専門職者の態度		
		e455	その他の専門職者の態度		
	第5章　サービス・制度・政策				
72		e545	市民保護サービス・制度・政策	0.000	＊＊
		e550	司法サービス・制度・政策		
		e570	社会保障サービス・制度・政策		
		e575	一般的な社会的支援サービス・制度・政策		
73		e580	保健サービス・制度・政策	自由記述	自由記述
		e585	教育と訓練のサービス・制度・政策		
		e590	労働と雇用のサービス・制度・政策		

＊ $p<.05$, ＊＊ $p<.01$
独立サンプルによるMann-WhitneyのUの検定
1）はχ^2検定

（表1-2）ICF第二分類及び詳細分類における群間差

ICF Code第1分類	%
a1　学習と知識の応用	33.3
a2　一般的な課題と要求	28.6
a3　コミュニケーション	83.3
a4　運動・移動	100.0
p5　セルフケア	14.2
p6　家庭生活	20.0
p7　対人関係	22.2
p8　主要な生活領域	33.3
p9　コミュニティライフ・社会生活・市民生活	33.3
e3　支援と関係	50.0
e4　態度	0.0
e5　サービス・制度・政策	0.0

表2-1
ICF下位項目（第2分類及び詳細分類）における支援者評価回答率

No	活動と参加	ICF Code 2nd 3rd	ICF Code分類（Domain）	回答数（%）	ASD vs 支援者 *P*-value	
	第1章　学習と知識の応用					
1	目的をもった感覚的経験	d110	注意して視ること	52.3		
2		d115	注意して聞くこと	100	0.155	
3		d120	その他の目的のある感覚(触覚)	52.3		
4			その他の目的のある感覚（味覚）	52.3		
5			その他の目的のある感覚（嗅覚）	57.1		
6	基礎的学習	d130	模倣	95.2		
7		d155	技能の習得	100	0.629	
8	知識の応用	d160	注意を集中すること	100	0.184	
9		d163	思考	66.6		
10		d166	読むこと	100	0.411	
11		d175	問題解決	90.4		
12		d177	意思決定	95.2		
	第2章　一般的な課題と要求					
13		d210	単一課題の遂行	100	0.726	
14		d2103	グループでの単一課題の遂行	95.2		
15		d220	複数課題の遂行	100	0.067	
16		d2203	グループでの複数課題の遂行	95.2		
17		d230	日課の遂行	95.2		
18		d240	ストレスとその他の心理的要求への対処	95.2		
19		d2402	危機への対処	85.7		
	第3章　コミュニケーション					
20	コミュニケーションの理解	d310	話し言葉の理解	100	0.013	＊
21		d315	非言語的メッセージの理解	100	0.009	＊＊
22		d325	書き言葉によるメッセージの理解	100	0.009	＊＊
23	コミュニケーションの表出	d330	話すこと	100	0.069	
24		d335	非言語的メッセージの表出	100	0.002	＊＊
25		d345	書き言葉によるメッセージの表出	95.2		
26	会話並びにコミュニケーション用具および技法の利用	d350	会話	100	0.201	
27		d3500	会話の開始	100	0.391	
28		d3501	会話の持続	100	0.007	＊＊
29		d3502	会話の終結	100	0.197	
30		d3504	多人数での会話	100	0.019	＊
31		d355	ディスカッション	90.4		
	第4章　運動・移動					
32		d4503	障害物を避けての歩行	100	0.352	
33		d470	交通機関や手段の利用	100	0.885	
	第5章　セルフケア					
34		d520	身体各部の手入れ(頻度)	61.9		
35			身体各部の手入れ	52.3		
36		d5201	歯の手入れ	61.9		
37		d530	排泄	42.8		
38		d540	更衣	100	0.674	
39		d5404	適切な衣服の選択（ドレスコード）	100	0.250	
40			適切な衣服の選択（身だしなみ）	57.1		
41		d550	食べること	52.3		
42		d570	健康に注意すること	66.6		
43		d5701	食事や体調の管理（時間）	61.9		
44			食事や体調の管理（食事の量）	66.6		
45		d5702	健康の維持（体調管理）	85.7		
46			健康の維持（飲酒）	38.1		
47			健康の維持（睡眠）	38.1		

	第6章　家庭生活					
48	必需品の入手	d610	住居の入手	100	0.842	
49		d620	物品とサービスの入手	71.4		
50	家事	d630	調理	52.3		
51		d640	調理以外の家事	71.4		
52	家庭用品の管理及び他者への援助	d660	他者への援助	66.6		
	第7章　対人関係					
53	一般的な対人関係	d710	基本的な対人関係	85.7		
54		d720	複雑な対人関係	100	0.034	＊
55		d7203	社会的ルールに従った対人関係	100	0.116	
56	特別な対人関係	d730	よく知らない人との関係	76.1		
57		d740	公的な関係	76.1		
58		d750	非公式な社会的関係	95.2		
59		d7504	仲間との非公式な関係	95.2		
60		d760	家族関係	76.1		
61		d770	親密な関係	71.4		
	第8章　主要な生活領域					
62	教育	d830	高等教育	95.2		
58	仕事	d845	仕事の獲得・維持・終了	100	0.206	
		d850	報酬を伴う仕事			
59	経済生活	d865	複雑な経済的取引き	76.1		
	第9章　コミュニティライフ・社会生活・市民生活					
60		d910	コミュニティライフ	100	0.941	
61		d920	レクリエーションとレジャー	76.1		
62		d998	その他の特定の、コミュニティライフ・社会生活・市民生活	66.6		

独立サンプルによるMann-WhitneyのUの検定
＊ p ＜.05, ＊＊ p ＜.01

表2-2　ICF総得点及び第二分類・詳細分類における群間差(活動)

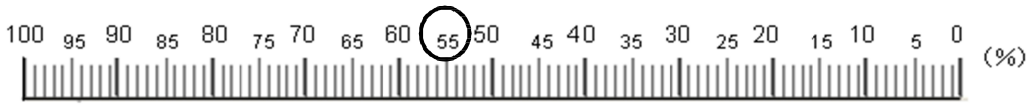
ICF（国際生活機能分類）をもとにした活動・参加に関する調査

【回答について】 各質問について、あなたの言動や現在の生活状況にどの程度あてはまるかをお答えください。 目盛りのある回答欄は、100%を「全くそのとおりである」、0%を「全くそうではない」 として、最も近いと思う目盛りを選んで○で囲んでください。

（回答例）

全く
そのとおりである

全く
そうでない

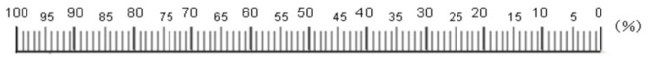
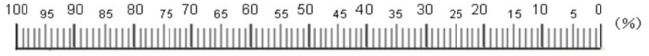
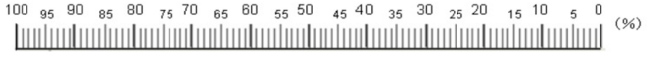
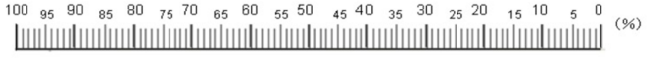
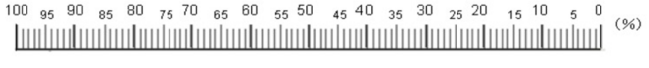
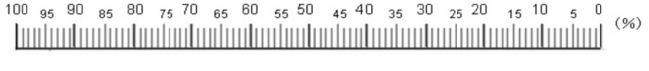
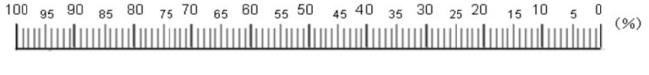
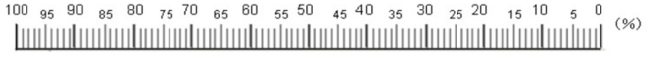


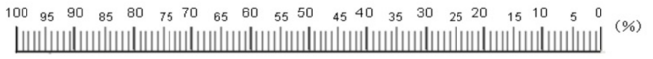
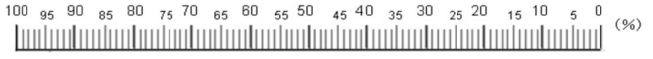
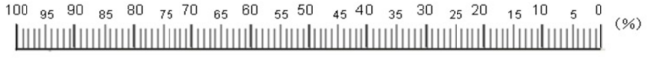
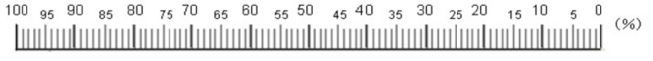
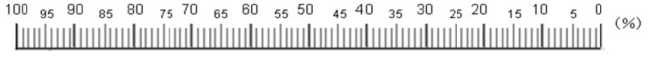
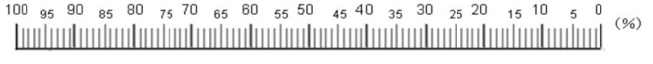
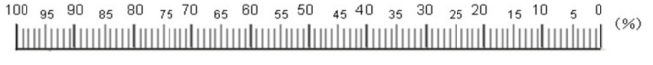
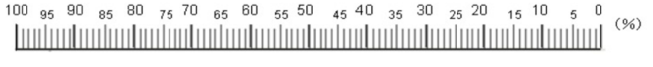
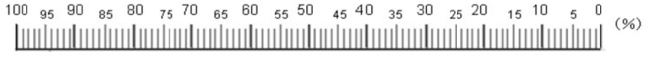
回答番号　34,36,46,47,63,69,71については、最も近い番号を選んで○で囲んでください。 回答番号　70,73について当てはまる場合は、記述でご回答ください。
「経験」欄については、経験のない場合に☑を入れてください。
「支援」欄については、家族や支援者、支援機器等の支援を受けている場合に☑を入れてください。

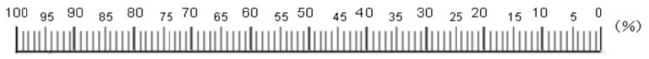
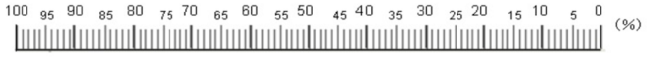
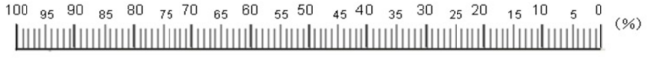
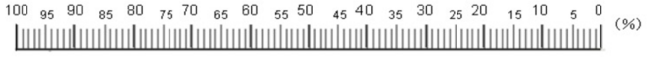
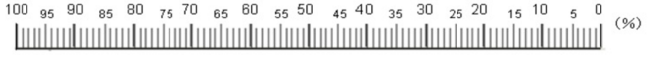
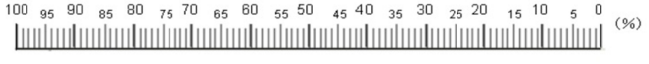
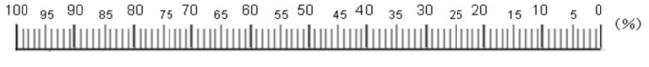
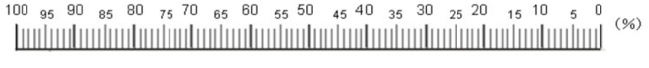
ご本人氏名　　年齢：　　歳　　性別： 男・女 回答

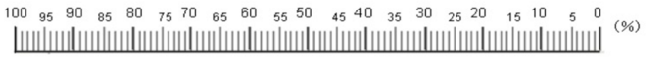
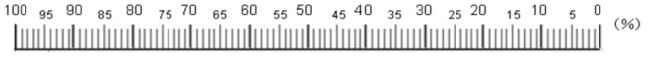
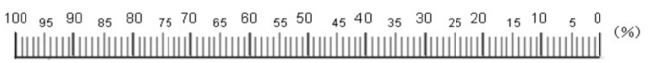
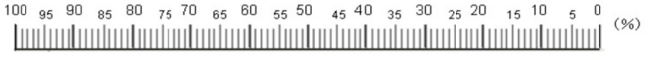
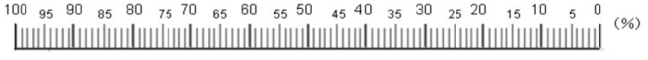
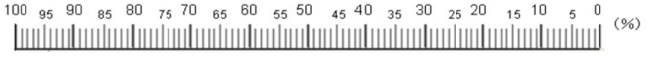
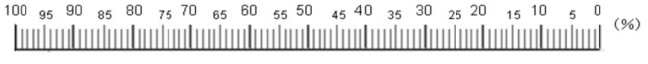
者氏名_

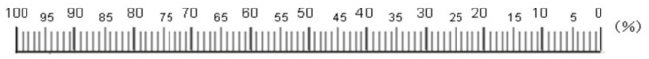
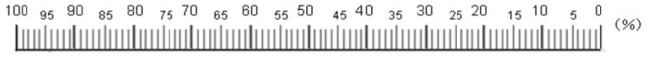
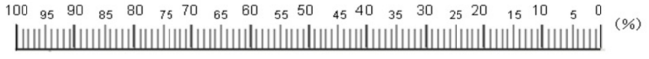
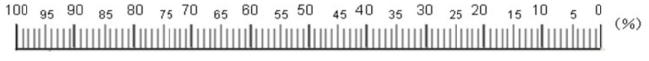
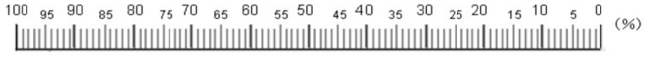
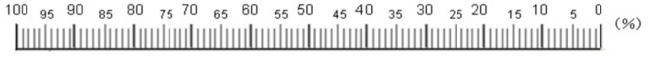
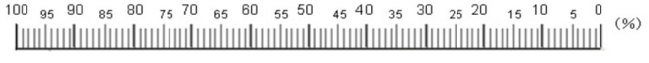
記入日：平成　　年　　月　　日

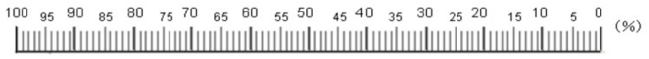
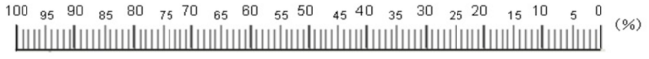
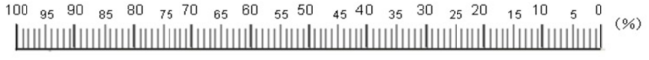
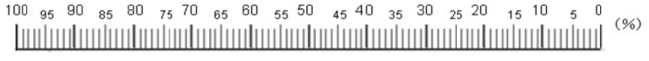
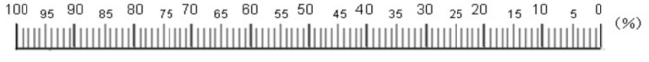
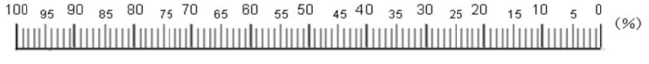
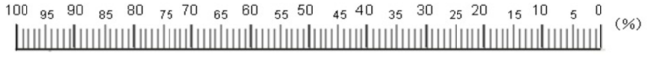
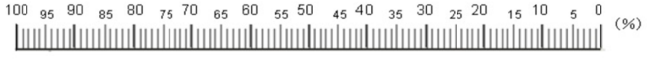
No	質問	VAS	経験	支援
1	（ボールや選手を目で追うなどして）視線を動かしながらスポーツを観戦しますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
2	音楽や人の話などを注意・集中して聞きますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
3	「つるつる」、「ざらざら」、「すべすべ」など、肌で触って感じていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
4	甘い・苦いを味わいますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
5	花を見て香りを楽しもうとしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
6	漢字やアルファベッドを覚えるときに、お手本をまねして憶えますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
7	新しい作業やゲームの方法などを覚えて、スムースに行いますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
8	人の話を聞いている時に、何らかの音や別の人の動作が気になって、話し手の言っていることに集中できなくなることがありますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
9	小説を書く、数学の定理の証明をする、物事を深く考えるなど、左記のうち1つ以上をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
10	本や新聞、インターネットの記事などを読んで知識を得ていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		

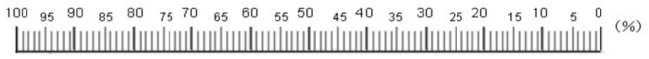
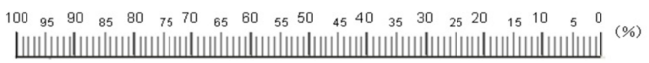
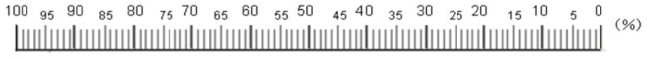
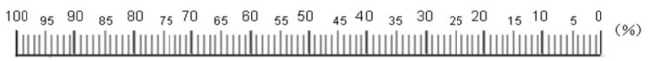
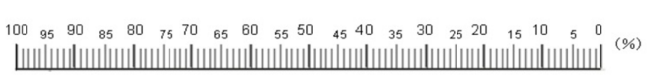
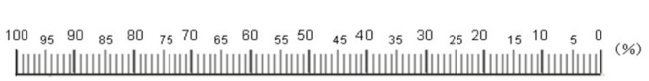
No	質問	VAS	経験	支援
11	何か問題やトラブルが起こった時に、適切な人に相談したり相手と話し合うことによって解決をしますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
12	たくさんの選択肢の中から選択をしますか。 例えば、資格をとる、料理を作るなどといった自分の目的を達成するために数多くある書籍の中から自分に合った本を選ぶことなどです。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
13	単純な1つの作業を1人で最後までやり遂げますか。 単純な1つの作業とは、例えば、物を動かす、布団を敷くなどの作業です。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
14	3人以上で単純な1つの作業を協力して行いますか。 単純な1つの作業とは、例えば、物を動かす、布団を敷く、ベッドメイクをするなどの作業です。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
15	複雑な作業を1人で最後までやり遂げますか。 複雑な作業とは、例えば、料理やお菓子作りなどの作業です。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
16	複雑な作業を3人以上で協力して行いますか。 複雑な作業とは、例えば、お菓子作りや部品を組み立てるなどの作業です。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
17	毎日のスケジュールを最後までこなしますか。 毎日のスケジュールとは、例えば、風呂に入る、顔を洗う、歯を磨く、部屋の掃除をするなどのことです。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
18	緊張するような責任の大きな仕事を与えられたとき、最後までやり遂げますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
19	急に起こった危険な状況に対応できますか。 急に起こった危険な状況とは、例えば、大きな地震などです。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
20	人の話を聞いて内容を理解しますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		

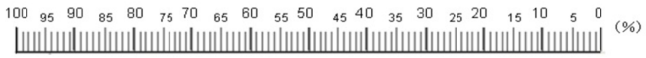
No	質問	VAS	経験	支援
21	マーク、ジェスチャー、記号などをみて、何を意味しているか理解しますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
22	本や新聞などに書いてある内容を読んで理解しますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
23	自分がいいたいことを話し言葉で伝えますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
24	自分がいいたいことを表情やジェスチャーで伝えますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
25	自分の伝えたいことをメールや手紙に書いて伝えますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
26	他の人と話のやりとりをしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
27	あいさつをしたり、自己紹介をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
28	話のやりとりは続きますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
29	適切な時間内で自分から話を終えますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
30	3人以上で話のやりとりは続きますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		

No	質問	VAS	経験	支援
31	会議やミーティングで自分の意見を言ったり人の意見を聞きますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
32	物や人にぶつからないで歩きますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
33	交通機関を利用して移動をしますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
34	週に何回入浴またはシャワーをしますか。 あてはまるものに〇をつけてください。	1. 1日に1回またはそれ以上 2. 2日に1回程度 3. 3日に1回程度 4. ①～③より少ない頻度		
35	入浴、シャワーの際には、肌や顔、歯、頭皮、爪、陰部などの身体部位を洗って乾かしますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
36	1日のうち何回歯を磨きますか。 あてはまるものに〇をつけてください。	1. 1日に2回またはそれ以上 2. 1日に1回程度 3. 2日に1回程度 4. ①～③より少ない頻度		
37	急にトイレに行きたくなって困りますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
38	季節や気温に見合った服装をしますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
39	目的に合わせた服装をしますか。 　例えば、就職活動の時にスーツを着ますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		
40	外出前には、鏡で身だしなみをチェックをしていますか。	全くそのとおりである　全くそうでない 		

No	質問	VAS	経験	支援
41	食事の食べ方で注意されることがありますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
42	体の健康を考えて飲食をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
43	1日に3回食事を取っていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
44	適切な食事量を考えて食事をしていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
45	体調が悪い時に、病院に行くかどうかの判断を自分でしていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
46	アルコールを摂取しますか。	1.　はい　　2.　いいえ （はいの場合、どのくらいの頻度で飲酒をしますか） 1.　1ヶ月に1日以下　2.　1ヶ月に2～4日 3.　1週に2～3日　　4.　1週に4日以上 （はいの場合、通常どのくらいの量を飲みますか） ビール500ml缶（又は中瓶）、ワイングラス、日本酒、焼酎お湯割り 1.　上記のうち、いずれか1杯（1本／1合）に相当する量 もしくは、それよりも少ない 2.　上記のうち、いずれか2杯（2本／2号）に相当する量 3.　上記のうち、いずれか3杯（3本／3号）に相当する量 もしくは、それよりも多い		
47	睡眠時間は足りていますか。	1.　はい　　2.　いいえ （何時間寝ていますか）　　時間 （途中で何度も目覚めますか）　1.　はい　　2.　いいえ （怖い夢などを見ますか）　　1.　はい　　2.　いいえ		
48	マンションやアパートを借りて1人暮らしをしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
49	日常生活に必要な物品は、自分で買っていますか。 日常生活に必要な物品とは、食料、飲み物、衣服、掃除用具、台所用品などのことです。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		

No	質問	VAS	経験	支援
50	自分で料理をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
51	自分で洗濯や掃除をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
52	家の手伝いをしますか。 1人暮らしの場合は、実家に帰った時に家の手伝いをしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
53	家族以外の人と対人関係をもっていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
54	人と話していて大声を出したり、物をたたいたりしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
55	人の上下関係が分かりますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
56	道に迷った時に人に道を聞きますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
57	役所などで書類の申請や相談をする場合、自分でしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
58	友人や仲間と関わりがありますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
59	同じ趣味の人と話をしますか。 *ここでは、対面で話をすることを指します。インターネット等を使用したチャットやメールなどは含みません。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		

No	質問	VAS	経験	支援
60	家族とうまくいっていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
61	恋人とうまくいっていますか。 （恋人がいない場合は、0%に印をつけてください）	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
62	大学、専門学校等を卒業していますか。	1. はい 2. いいえ 3. 中途退学をした 4. 現在、在学中である		
63	自分で報酬を伴う仕事を探したり、与えられた仕事をしますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
64	自分の銀行口座を自分で管理し、利用していますか。 （自分の銀行口座を持っていない場合には0%に印をつけて下さい）	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
65	学校や職場など、定期的に通っていますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
66	趣味を楽しんでいますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
67	警察官やガードマンにに声をかけらて話しをすることがありますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
68	家族はあなたのことを手伝ってくれますか。	全く そのとおりである　　全く そうでない 		
69	連絡を取っている、または行ったことがある福祉・就労・医療機関はありますか。	1. ある 2. ない		

No	質問	VAS	経験	支援
70	あるに回答された方におうかがいします。 差し支えなければ、その機関の名称を教えてください。（複数可）	【機関名】		
71	支援者はあなたのことを助けていますか。	全く そのとおりである 全く そうでない 		
72	現在、あなたは福祉や就労の制度を利用していますか。	1. 利用している 2. 利用していない		
73	利用していると回答された方におうかがいします。 利用している場合、その制度の名称または内容について教えてください。（複数可）	【制度の名称、または内容など】		

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）
分 担 研 究 報 告 書

知的障害者の生活の補完的手段の研究

研究分担者　石渡利奈　国立障害者リハビリテーションセンター研究所
福祉機器開発部研究員

研究要旨　軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の就労移行支援に役立てるため、利用可能な支援ツールを明らかにすることを目的とし、今年度は、国際生活機能分類（International Classification of Functioning、以下 ICF）に基づく支援ツールマップの開発を行った。まず、昨年度の調査により抽出された、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の就労時の職業生活、および日常生活に役立つ可能性のある支援ツール 68 個について、作業療法士の協力を得て、マップ化するツールを絞り込み、最終的に 64 個をマップ化の対象とした。つづいて、各ツールが補う心身機能、支援する活動参加の項目を ICF の第 2 レベルでコード化した。この結果、「精神機能」を中心とする 4 つの第 1 レベルに属するコード、および「学習と知識の応用について」を中心とする 8 つの第 1 レベルに属するコードがリストアップされた。また、縦軸を心身機能、横軸を活動参加とする表を作成し、各コードに関係するツールを表上に配置した支援ツールマップを開発した。この結果、心身機能では、b140 注意機能、b144 記憶機能、b156 知覚機能、b164 高次認知機能、b167 言語に関する精神機能、b760 随意運動制御を補う支援ツールが多くあることが明らかになった。また、活動参加では、d110 注意して視ること、d115 注意して聞くこと、d155 技能の習得、d160 注意を集中すること、d166 読むこと、d170 書くこと、d210 単一課題の遂行、d220 複数課題の遂行、d230 日課の遂行、d440 細かな手の使用を支援する支援ツールが多くあることが明らかになった。本研究で開発したマップにより、「補いたい心身機能」や「支援したい活動」に関係するツールを支援者が見つけ、支援に役立てられることが期待される。

研究協力者氏名･所属機関名及び所属機関における職名
山口佳小里（国立障害者リハビリテーションセンター研究所発達障害情報・支援センター・作業療法士）
伊藤直美（国立障害者リハビリテーションセンター研究所・技術補助員）

A. 研究目的

機器による知的障害者の支援において、従来、重度の知的障害がある群については、生活上の困難が顕著であるために、機器の開発と機器を用いた支援が行われてきた。一方、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者のように、近年になって、困難の実態が明らかになってきた群については、どのような機器が役立ち得るかが充分にわかっていない。

これらの群は、「社会規範の概念形成の難しさによる社会性や他者とのコミュニケーション能力の乏しさ」や「聴覚情報の理解の弱さや注意・記憶・判断の弱さから生じる作業の遂行困難」など困難を抱えているが、適切な機器および人的支援を適用することにより、円滑な就労移行が可能になることが期待される。

以上より、本研究では、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の就労移行支援に役立てるため、利用可能な支援ツールを明らかにすることを目的とし、最終年度は、就労に向け、就労時の職業生活、および日常生活に役立つことが期待される支援ツールについて、ICF の心身機能、活動参加との関係を示した支援ツールマップの開発を行った。

本支援ツールマップの利用者は、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の支援を行う支援者を想定した。

B. 研究方法

B-1. マップ化に向けた機器の抽出

昨年度の調査により抽出された、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の就労時の職業生活、および日常生活に役立つ可能性のある支援ツール 68 個について、発達障害者の支援を行っている作業療法士がリストの確認を行い、マップ化の対象から 4 個の機器を除外した。また、書字（描画）に困難のある発達障害者を対象に、筆記補助具を用いた支援を行い、その結果を基に、リストに掲載していた筆記補助具（グリップ型）のツール例の差し替えを行った。

B-2. 心身機能、活動参加項目の分析とコード化

続いて、マップ化対象とした 64 個のツールについて、それぞれのツールで支援する活動参加の項目、およびツールのユーザーが困難を持っていると考えられる心身機能の項目の候補をリストアップした。このリストアップは、機器と ICF の関係の分析経験を持つエンジニアと、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の親が協同して行った。また、候補は、役立つ可能性があるツールを支援者がより多く見つけられるようにするため、関係があると考えられる項目をできるだけ広くリストアップした。

リストアップした項目は、基本的に ICF の第 2 レベルのコード（心身機能を表す b／活動参加の構成要素に含まれる領域を表す d のアルファベットと、3 桁の数字で構成　例：b210　視覚機能）で記載し、一部について、さらに下位項目の第 3～4 レベルのコード（心身機能を表す b／活動参加の構成要素に含まれる領域を表す d のアルファベットと、4～5 桁の数字で構成 例：b2102 視覚の質、b21022 コントラスト感度）も記載した。

リストアップされたコードの候補を元に、前述の作業療法士とエンジニア、当事者の親でディスカッションを行った後、作業療

法士が候補の妥当性を評価、個々の支援ツールに関する心身機能、活動参加項目の特定を行った。

B-3. ICF に基づく支援ツールマップの作成

縦軸を心身機能、横軸を活動参加とする表をマイクロソフトオフィスのエクセルを用いて作成し、B-2 で特定された第 2 レベルのコードを軸上に記載した。なお、活動参加については､特定されたコードに加え、当センター自立支援局および発達障害情報・支援センターで開発中の ICF-Based アセスメントに用いられるコードも記載した。

続いて、個々のツールと関係する心身機能、活動参加がクロスする欄に、ツール名を記載した。

C. 結果および考察

C-1. マップ化に向けた機器の抽出

作業療法士の指摘により、除外、および差し替えを行ったツールとその理由を以下に示す。

【除外したツール】

- レジ業務支援システム
  複雑な商品の注文、計算等を絵表示やタッチ画面で簡単にできるシステム
  →重度者が対象と考えられるため。また、近年、レジシステムが発達し、計算等が不要になってきているため。
- 手順支援キット
  手順のステップを一枚ずつのカードに示し、ステップ毎に確認ができるようになっているツール
  →実際には、手順が一つの図に示されている方が見通しを持って取り組みやすいと考えられるため。
- ユニバーサル定規（分度器ルーラー付き）
  縦横斜めの平行線が引ける分度器付きルーラー
  →多機能であることが使用法の混乱を招く可能性があるため。また、ルーラー付きであるため、固定の際に普通の定規以上の協調性（随意運動制御機能）を要すると考えられるため。
- 携帯電話
  →アプリをリストアップしているので不要。

【差し替えたツール】

- 筆記補助具（グリップ型）
  差し替え前：持ち部断面円形
  差し替え後：持ち部断面三角
  →握る場所をわかりやすくしたり、鉛筆がまわらないようにするため。

C-2. 心身機能、活動参加項目の分析とコード化

各ツールに関係する心身機能、活動参加項目のコードを記した表を表 1 に示す。各ツールについて、最終的に、心身機能、活動参加それぞれ1～4の関係するコードが特定された。

補う心身機能については、4 つの第 1 レベル（1.精神機能、2.感覚機能と痛み、3.音声と発話の機能、7.神経筋骨格と運動に関連する機能）に属するコードが抽出された。このうち、以下の通り、精神機能の下位項目が最も多く、12 の第 2 レベルのコードがリストアップされた。

＜心身機能の下位項目（第 2 レベル）数＞

1.精神機能	12
2.感覚機能と痛み	3
3.音声と発話の機能	3

7.神経筋骨格と運動に関連する機能　3

支援する活動参加については、8つの第1レベル（1. 学習と知識の応用、2.一般的な課題と要求、3.コミュニケーション、4.運動・移動、5.セルフケア、6.家庭生活、8.主要な生活領域、9.コミュニティライフ・社会生活・市民生活）に属するコードが抽出された。このうち、以下の通り、学習と知識の応用についての下位項目が最も多く、10の第2レベルのコードがリストアップされた。

＜活動参加の下位項目（第2レベル）数＞

1.学習と知識の応用について	10
2.一般的な課題と要求	4
3.コミュニケーション	4
4.運動・移動	2
5.セルフケア	1
6.家庭生活	2
8.主要な生活領域	1
9.コミュニティライフ・社会生活・市民生活	1

以上より、広範囲の精神機能の補完を中心に、関連する感覚機能と痛み、音声と発話の機能、神経筋骨格と運動などの心身機能を補う支援ツールが利用可能なことが明らかになった。

また、支援し得る活動参加は、学習と知識の応用が主であり、他、一般的な課題と要求、コミュニケーション、運動・移動、セルフケア、家庭生活、主要な生活領域、コミュニティライフ・社会生活・市民生活に関わる支援ツールも利用可能であることが明らかになった。

C-3. ICFに基づく支援ツールマップの作成

図1に、作成した支援ツールマップを示す。心身機能の下位項目では、b140注意機能、b144 記憶機能、b156 知覚機能、b164 高次認知機能、b167 言語に関する精神機能、b760 随意運動制御を補う支援ツールが多くあることが明らかになった。

また、活動参加の下位項目では、d110 注意して視ること、d115 注意して聞くこと、d155技能の習得、d160注意を集中すること、d166 読むこと、d170 書くこと、d210 単一課題の遂行、d220 複数課題の遂行、d230 日課の遂行、d440 細かな手の使用を支援する支援ツールが多くあることが明らかになった。

D. 結論

軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の就労移行支援に役立てるため、利用可能な支援ツールを明らかにすることを目的とし、ICFに基づく支援ツールマップの開発を行った。その結果、以下の結論が得られた。

- マップ化の対象として、64個のツールが抽出された。
- 各ツールに関係する心身機能として、「精神機能」を中心とする4つの第1レベルに属するコードがリストアップされた。
- 各ツールに関係する活動参加として、「学習と知識の応用について」を中心とする8つの第1レベルに属するコードがリストアップされた。
- 縦軸を心身機能、横軸を活動参加として、各コードに関係するツールを配置した支援ツールマップを開発した。
- 心身機能では、b140 注意機能、b144 記憶機能、b156 知覚機能、b164 高次認知機能、b167 言語に関する精神機能、b760

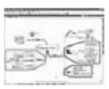
随意運動制御を補う支援ツールが多くあることが明らかになった。

- 活動参加では、d110注意して視ること、d115 注意して聞くこと、d155 技能の習得、d160 注意を集中すること、d166 読むこと、d170 書くこと、d210 単一課題の遂行、d220 複数課題の遂行、d230 日課の遂行、d440 細かな手の使用を支援する支援ツールが多くあることが明らかになった。

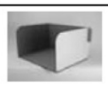
以上より、本研究で開発したマップにより、「補いたい心身機能」や「支援したい活動」に関係するツールを支援者が見つけ、支援に役立てられることが期待される。

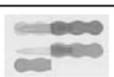
なお、本研究では、できるだけ広範囲のツールを対象とするため、調査、および作成者の経験、専門的知識等に基づいてマップを作成した。今後、マップを活用した適用実践を通じ、マップの妥当性、信頼性をより高めていくことが望まれる。

表1　ICF支援ツール一覧

	ツール名	参考イメージ	説明	活動　参加				心身機能			
1	小型ひらがなキーボード	©テクノツール/「小型ひらがなキーボードUSB」	「小型ひらがなキーボード」は、「ローマ字入力が苦手な人がPCに入力を簡単にできる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「50音配列で入力できる」機能があります。これにより、「ローマ字入力をする」ことが難しい人が「入力を楽にできる」ことを支援します。	d170 書くこと				b117 知的機能	b167 言語に関する精神機能		
2	カラーフィルター	©フリーソフト研究所/「如意スクリーン」	「カラーフィルター」は、「眩しさや視覚刺激に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「画面の照度やコントラストを調整する、カーラーセロファンをかぶせる、ことで視覚刺激を軽減させる」機能があります。これにより、「（視覚刺激を多く受けてしまうため）文字やグラフを読む」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業をおこなう」ことを支援します。	d160 注意を集中すること	d166 読むこと			b140 注意機能	b210 視覚機能	（b21020 光感受性）	
3	音声認識・音声入力ソフト	©アイネット/「おこし名人」	「音声認識・音声入力ソフト」は、「音声で文章を作成する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「キーボードの代わりにパソコンに接続したマイクに向かって話すと文字を入力できる」機能があります。これにより、「キーボードで入力する」ことが難しい人が「PCの入力を行う」ことを支援します。	d170 書くこと	d210 単一課題の遂行	d440 細かな手の使用		b117 知的機能	b760随意運動の制御機能（b7601 複雑な随意運動の制御）		
4	ルーラー	©claro software /「Screen Ruler スイート」	「ルーラー」は、「視覚刺激を軽減させる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「読みたい場所の文章を分かりやすくする」機能があります。これにより、「多くの視覚情報を1度に読んで理解する」ことが難しい人が「分かりやすくよんだり、情報の理解を深める」ことを支援します。	d110 注意して視ること	d160 注意を集中すること	d166 読むこと		b140 注意機能	b156 知覚機能	b167 言語に関する精神機能	
5	テキストリーダー	©クリエートシステム/「ドキュメントトーカ 日本語音声合成エンジン」	「テキストリーダー」は、「PCで文章を音声で聞いて読みやすくする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PC上で読みたい文章を示すと、文章を読み上げると同時に網かけがかかり、どこを読んでいるのか分かる」機能があります。これにより、「文章を読んだだけで理解する」ことが難しい人が「文章の内容を音声で理解して内容理解を深める」ことを支援します。	d110 注意して視ること	d166 読むこと			b140 注意機能	b167 言語に関する精神機能	b156 知覚機能	
6	マインドマップ	 ©ビーイング/「Mind Manager」	「マインドマップ」は、「複数の情報を整理して理解したり、考えをまとめる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PC上で、マッピング（人間の脳の思考パターンをそのまま図に表した様な記述法）ソフト画面に情報を断層的に整理する」機能があります。これにより、「目や耳から多数の情報が入ったことを意味理解する」「複数の情報をもとにして考えを組み立てる」ことが難しい人が「複数の情報を整理して、視覚的に理解したり、考える」ことを支援します。	d163 思考	d175 問題解決	d220 複数課題の遂行		b160 思考（b1603 思考の統制）	b164 高次認知機能		
7	手順支援ソフト	©明電ソフトウエア/「メモリアシスト」	「手順支援ソフト」は、「作業を正確な手順で、見通しを持って取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「作業の手順を文字、画像、音声で確認できる」機能があります。これにより、「マニュアルを読むこと」「作業を一度で覚える」ことが難しい人が「分かりやすく手順を確認しながら作業に取り組む」ことを支援します。	d155 技能の習得	d210 単一課題の遂行	d230 日課の遂行		b144 記憶機能	b164 高次認知機能		
8	忘れ物チェックアプリ	©ECSコンンサルティング/「毎朝チェッカー」	「忘れ物チェックアプリ」は、「予定していた活動を忘れずに実行したり、外出時に持ち物を忘れないようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「指定した時間にアラートが鳴り、画面でチェックリストを確認できるリマインダー」機能があります。これにより、「予定や持ち物を覚えておく」「予定の時間にやるべきことを思い出す」ことが難しい人が「予定した活動を行う」ことを支援します。	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能	b164 高次認知機能		
9	スケジュール管理ボード（LEDランプつき）	©コムフレンド/「メモ・デイプランナー」	「スケジュール管理ボード（LEDランプつき）」は、「予定や時間経過を把握する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「予定の内容と時間を確認できる」「次の予定までの残り時間を点灯しているランプで確認できる」機能があります。これにより、「次の活動までの残り時間を見積もる」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能	b164 高次認知機能		
10	スケジュール管理システム　web上	©Google/「Google カレンダー」	「スケジュール管理システム（web上）」は、「パソコン上のスケジューラーを活用して1日の予定を忘れずに取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「Web上で予定を管理する」「予定の日時を携帯電話にメールで知らせることができる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能	b164 高次認知機能		
11	スケジュール管理システム　PCソフト	©コムフレンド/「日常管理プログラム」	「スケジュール管理システム（PCソフト）」は、「これからの予定を忘れずに取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PCで絵や音声を使って、予定の確認ができる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能	b164 高次認知機能	b167 言語に関する精神機能	
12	スケジューラー iPhone アプリ	©たすく/「たすくスケジュール」	「スケジューラー・iPhoneアプリ」は、「予定を把握する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhone などで、コミュニケーションカードを使って簡単にスケジュールを作成できる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能	b164 高次認知機能	b167 言語に関する精神機能	

	ツール名		参考イメージ	説明	活動　参加				心身機能			
13	探し物発見器	受信機複数型	 ©クマザキエイム/「探し物探知機　どこいっ太郎 RF-315N」	「探し物発見器（受信機複数型）」は、「失くしたものをみつける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「親機の数字ボタンを押すと、その数字が割り当てられた子機の音が鳴ることにより、音で物の場所を伝える」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておく」ことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。	d650 家庭用品の管理				b140 注意機能	b144 記憶機能		
14		音・光案内型	 ©サンコー/「紛失物発見器　Mini Tracker」	「探し物発見器（音・光案内型）」は、「失くしたものを見つける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「マスター部がらスレーブ部まで、光と音で対象物まで案内してくれる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておく」ことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。	d650 家庭用品の管理				b140 注意機能	b144 記憶機能		
15	置き忘れ防止アラーム	アラーム・バイブレーション型	 ©リーベックス/「離れるとアラーム3：1　WSA」	「探し物発見器（アラーム・バイブレーション型）」は、「物を置き忘れないようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「物から離れると、アラーム音とバイブレーションで知らせる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておく」ことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。	d650 家庭用品の管理				b140 注意機能			
16		警告音型	 ©コスモテクニカ/「うっかりセンサー」	「探し物発見器（警告音型）」は、「物を置き忘れないようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「物をから離れると、警報で忘れ物をしていることを知らせる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておく」ことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。	d650 家庭用品の管理				b140 注意機能			
17	施錠管理キーケース		 ©三共理研/「楽キーケース」	「施錠管理キーケース」は、「外出時に、鍵をかけたか否かを確認する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「施錠をした時刻を確かめられる」機能があります。これにより、「鍵をかけたか否かを覚えておく」ことが難しい人が「不安になることを防ぐ」ことを支援します。	d230 日課の遂行				b140 注意機能	b152 情動機能	b160 思考機能	
18	VOCA	iPhone アプリ	 ©Spectrum Visions Global/「Voice4U」	「VOCA（iPhone アプリ）」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneで、絵や画像を使ってコミュニケーションを助ける」機能があります。これにより、「的確に言語表現する」ことが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。	d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b167 言語に関する精神機能		
19			 ©Droplet Project/「ドロップトーク」		d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b167 言語に関する精神機能		
20			 ©アルカデア/「ボイスエイド」	「VOCA（iPhone アプリ）」は、「iPhoneなどで、コミュニケーションをとる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「キーボードから入力し、文章を読みあげる」機能があります。これにより、「言葉で伝える」ことが難しい人が「自分の意思を伝える」ことを支援します。	d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b330 音声言語（発話）の流暢性とリズムの機能	b310 音声機能	b320 構音機能
21		持ち運び用	 ©こころ工房/「Gotalk ポケット」	「VOCA（持ち運び用）」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」「「小さく持ち運びが便利である」機能があります。これにより、「的確に言語表現する」ことが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。	d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b167 言語に関する精神機能		
22		腕時計型	 ©パシフィックサプライ/「トークトラック」	「VOCA（腕時計型）」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」「腕時計型で持ち運びが容易である」機能があります。これにより、「的確に言語表現する」ことが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。	d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b167 言語に関する精神機能		
23		卓上型	 ©パシフィックサプライ/「VOCAフレックス2」	「VOCA（卓上型）」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」機能があります。これにより、「言葉で伝える」ことが難しい人が「自分の意思を伝える」ことを支援します。	d330 話すこと	d345 書き言葉によるメッセージの表出	d350 会話		b122 全般的な心理社会的機能	b167 言語に関する精神機能		
24	タイムエイド	置き時計型	 ©Timetimer/「タイムタイマー（オーテイブル）」	「タイムエイド（置き時計型）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過とともに赤い円盤が減っていき、残り時間を確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642 時間管理）		
25		iPhone アプリ（60分表示）	 ©McMor Software/「Lotus」	「タイムエイド（iPhoneアプリ・60分表示）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhone などで、残り時間を視覚で確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b141 注意機能	b164 高次認知機能（b1642 時間管理）		

	ツール名		参考イメージ	説明	活動　参加				心身機能			
26	タイムエイド	iPhoneアプリ（10時間表示）	©McMor Software/「Uz」	「タイムエイド（iPhoneアプリ・10時間表示）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneなどで、残り時間を10時間まで確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b142 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
27		卓上型（ライト表示）	©MSテクノ/「EG-Assist」	「タイムエイド（卓上型・ライト表示）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ライトが消えて、残り時間を示す」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b143 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
28		卓上型（数字表示）	©コムフレンド/「タイムログ20-1」	「タイムエイド（卓上型・数字表示）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
29		卓上型（シンボルカード）	©コムフレンド/「QHW」	「タイムエイド（卓上型・シンボルカード付き）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「シンボルカードによって設定された時間までの残り時間を視覚的に知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
30		卓上型（1日表示）	©コムフレンド/「Cozyx ウオッチU型」	「タイムエイド（卓上型・1日表示）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
31		卓上型（1日・カード）	©コムフレンド/「Cozyx ウオッチ1型」	「タイムエイド（卓上型・1日表示、絵カード付き）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
32		パソコンソフト	©Time Timer/「タイムタイマーCD2」	「タイムエイド（パソコンソフト）」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PC上で、時間の経過とともに赤い円盤が減っていき、残り時間を確認できる、アラームで予定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d230 日課の遂行		b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
33	ハミガキ手洗いタイマー		©fly bird/「ハミガキ手洗いタイマー」	「ハミガキ手洗いタイマー」は、「手洗いと歯磨きを習慣づける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ボタンを押すと、ライトが点滅し始め、終了時間を知らせる」機能があります。これにより、「時間の進行や残り時間を認識する」ことが難しい人が、「終わりまで集中して取り組む」ことを支援します。	d230 日課の遂行	d520 身体各部の手入れ			b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
34	歯みがきタイマー iPhone アプリ		©apple store/「5分歯磨き」	「歯みがきタイマー・iPhoneアプリ」は、「歯みがきをきちんとする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の表示と共に、歯みがきの手順が表示される」機能があります。これにより、「時間の進行の認識や正確な手順で行う」ことが難しい人が、「最後まできちんと歯みがきをする」ことを支援します。	d230 日課の遂行	d520 身体各部の手入れ			b140 注意機能	b164 高次認知機能（b1642時間管理）		
35	パーテーション	事務用	 ©つうるぼっくす/「遮蔽板　事務用 片面白」	「パーテーション（事務用）」は、「周囲の環境に気をとられることなく集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「落ち着いて自分のペースで作業を行うことができる。」機能があります。これにより、「（視覚情報が多いと混乱してしまったり、他人の視線が気になって）作業を行う」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業を行う」ことを支援します。	d160 注意を集中すること	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d845 仕事の獲得・維持・終了	b140 注意機能	b156 知覚機能		
36		A4版	©生活工房/「どこでもパーテーション（A4版）」	「パーテーション（A4版）」は、「周囲の環境に気をとられることなく集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「落ち着いて自分のペースで作業を行うことができる。」「持ち運びが便利である」機能があります。これにより、「（視覚情報が多いと混乱してしまったり、他人の視線が気になって）作業を行う」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業を行う」ことを支援します。	d160 注意を集中すること	d210 単一課題の遂行	d220 複数課題の遂行	d845 仕事の獲得・維持・終了	b140 注意機能	b156 知覚機能		

	ツール名		参考イメージ	説明	活動　参加				心身機能			
37	メモ	タイマー併用型	 ©ナカバヤシ/「ムービーメモ」	「デジタル伝言ボード(タイムエイド併用型)」は、「伝言を理解する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「簡単に動画の録画ができる」「タイマー」機能があります。これにより、「文章で伝言を理解する」ことが難しい人が「動画で内容理解を深める」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d230 日課の遂行	d310 話し言葉の理解		b167 言語に関する精神機能			
38		卓上型	 ©キングジム/「卓上メモマメモTM1」	「メモ(卓上型)」は、「メモをとり、無くさない」ことをねらいとしたものです。具体的には、「画面上に、メモをとる」「設定した日時にアラームを鳴らす」機能があります。これにより、「メモを保存しておく」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「メモをなくさない」「予定した活動を行う」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能			
39		スケジュール型	 ©アドプラス/「スティッキースケジュールメモウィークリー」	「メモ(スケジュール型)」は、「予定をすぐにメモし、失くさない」ことをねらいとしたものです。具体的には、「週間のスケジュールが書き込め、好きなところに貼ることができる」機能があります。これにより、「メモを保存しておく」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「メモをなくさない」「予定した活動を行う」ことを支援します。	d210 単一課題の遂行	d230 日課の遂行			b144 記憶機能			
40		キーボード型	 ©キングジム/「デジタルメモ帳　ポメラ」	「メモ(キーボード型)」は、「簡単にメモをとる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「小型キーボード(テキスト入力)で、少しの時間でもどこでもメモをとることができる」機能があります。これにより、「鉛筆でメモをとる」ことが難しい人が「テキスト入力で、素早くメモをとる」ことを支援します。	d170 書くこと	d210 単一課題の遂行			b144 記憶機能	b760 随意運動制御		
41	ポケット付きカレンダー		 ©アクセスインターナショナル/「ポケットつきカレンダー」	「ポケット付きカレンダー」は、「その日の予定を把握する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「1日ごとに区切られたビニール―シートのポケットにシンボルや写真を入れて1カ月のスケジュール表を作る」機能があります。これにより、「予定を覚えておく」ことが難しい人が「予定した活動を行う」ことを支援します。	d230 日課の遂行				b164 高次認知機能			
42	持ち方補助具(缶・ペットボトル開け)		 ©ダイイチ/「らくらく実感オープナー」	「持ち方補助具」は、「手先の力の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ペットボトルや缶を容易に開けることができる」機能があります。これにより、「指先の力が弱くペットボトルや缶を開ける」ことが難しい人が「簡単に開く」ことを支援します。	d440 細かな手の作業				b730 筋力の機能			
43	ユニバーサル定規	メモリ強調型	 ©レイメイ藤井「見やすい定規」	「ユニバーサル定規(メモリ強調型)」は、「正確な定規の読み取りをする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「メモリに矢印が入っている、端からメモリが入っている」機能があります。これにより、「メモリを正確に読む」ことが難しい人が「容易にメモリを読む」ことを支援します。	d155 技能の習得				b140 注意機能	b156 知覚機能		
44		シリコン製	 ©ゴムQ/「Qスケール」	「ユニバーサル定規(シリコン製)」は、「手先の巧緻性に困難のある方の作図の補助をする」こととをねらいとしたものです。具体的には、「ゴム製なので、固定しやすい」機能があります。これにより、「まっすぐに線を引く」ことが難しい人が「作図を容易に行う」ことを支援します。	d155 技能の習得	d440 細かな手の作業			b760 随意運動の制御機能			
45	筆記補助具	リング型	 ©ゴムQ/「Qリング」	「筆記補助具」は、「手指の力の調節等がうまくできない方の筆記の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「指が適切な位置に誘導される」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚がうまくコントロールする」ことが難しい人が「鉛筆を適切な持ち方、筆圧で使用することができる」ことを支援します。	d145 書くことの学習	d155 技能の習得	d170 書くこと	d440 細かな手の作業	b760 随意運動の制御機能			
46		グリップ型	 ©Angel grip/「Angel grip」		d145 書くことの学習	d155 技能の習得	d170 書くこと	d440 細かな手の作業	b760 随意運動の制御機能			
47		三角鉛筆	 ©三菱鉛筆/「三角かきかた鉛筆」		d145 書くことの学習	d155 技能の習得	d170 書くこと	d440 細かな手の作業	b760 随意運動の制御機能			
48	柔らか消しゴム		 ©プラス/「プラスチック消しゴムWエアイン」	「柔らか消しゴム」は、「手先の力の調節がうまくできない方が容易に消しゴムを使う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「軽い消し心地でよく消える」機能があります。これにより、「指先の力のコントロールをする」ことが難しい人が「軽い力で鉛筆等を消す」ことを支援します。	d155 技能の習得	d440 細かな手の作業			b760 随意運動の制御機能			
49	シリコン製デスクシート		 ©ゴムQ/「 Qデスクシート」	「シリコン製デスクシート」は、「手先の巧緻性に困難のある方の作業時の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「紙のズレを防止し、消しゴムで消すことやコンパスの作業を容易にする」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚をコントロールする」ことが難しい人が「効率のよい作業をする」ことを支援します。	d155 技能の習得	d440 細かな手の作業			b760 随意運動の制御機能			
50	おもしろナイフ		 ©三幸製図機械製作/おもしろザクザクナイフ	「おもしろナイフ」は、「手先の巧緻性に困難のある方が切断の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「持ちやすいグリップ・刃の位置が分かりやすい」機能があります。これにより、「手先の力の調節をうまくコントロールする」ことが難しい人が「切断を容易に行う」ことを支援します。	d155 技能の習得	d440 細かな手の作業			b760 随意運動の制御機能			
51	小型ゴム製ボール		 ©池田工業社/「イガイガエクサボール」	「小型ゴム製ボール」は、「指先の不適切行動の軽減をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「握ることによってリラックスできる」機能があります。これにより、「指先を動かしていないと不安」という困難のある人が「安心して作業をする」ことを支援します。	d240 ストレスとその他心理的要求への心理的対処				b130 活動と欲動の機能	b152 情動機能		

	ツール名		参考イメージ	説明	活動　参加				心身機能			
52	ポータブルオーディオプレイヤー		Ⓒsony/「walk man」	「ポータブルオーディオ　プレイヤー」は、「休憩時間などの空白の時間の適切に過ごす」ことをねらいとしたものです。具体的には、「一人で静かに音楽を聴く」機能があります。これにより、「休憩時間を過ごす」ことが難しい人が「適切な余暇活動をする」ことを支援します。	d920 レクリエーションとレジャー				b126 気質と人格の機能	b152 情動機能	b156 知覚機能	
53	ICレコーダー		Ⓒsony/「ステレオICレコーダーICD-UX523」	「ICレコーダー」」は、「耳からの情報の内容理解を深める」ことをねらいとしたものです。具体的には、「録音した音声をいつでも聞き直せる」機能があります。これにより、「多くの音声情報を1度に聞いて理解すること」ことが難しい人が「後から聞き返すことで、情報の理解を深める」ことを支援します。	d115 注意して聞くこと	d310 話し言葉の理解			b140 注意機能	b144 記憶機能		
54	電子辞書		Ⓒカシオ/「Ex-word XD-D6500」	「電子辞書」は、「素早く語彙の理解する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「手書き入力でも、意味を調べることができる」「その意味を、音声で読み上げをしてくれる」「がさばらない」機能があります。これにより、「辞書を引く」ことが難しい人が「短時間で視覚、聴覚から情報を得る」ことを支援します。	d110 注意して視ること	d140 読むことの学習	d166 読むこと		b140 注意機能	b156 知覚機能		
55	ワイヤレス補聴器		Ⓒアイアシステム/「infraPORT Set830S」	「ワイヤレス補聴器」は、「他の聴覚情報に気をとられることなく目的の音声を集中して聞き取る」ことをねらいとしたものです。具体的には、「赤外線を利用して音を伝える」機能があります。これにより、「複数の人が会話している場面で、話を聞き取る」ことが難しい人が「他の人の声に気をとられることなく話を聞きとる」ことを支援します。	d115 注意して聞くこと	d160 注意を集中すること			b140 注意機能	b156 知覚機能		
56	音量表示装置	iPhoneアプリ	ⒸiPad iPhoneWire/「Noise Level」	「音量表示装置（iPhone アプリ）」は、「声の大きさのコントロールをできるようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneで、音量をグラフで知らせる」機能があります。これにより、「自分の声の音量のコントロールする」ことが難しい人が「適切な声の大きさで会話をする」ことを支援します。	d330 話すこと	d350 会話			b330 音声機能			
57		持ち運び用	Ⓒコムフレンド/「光る声のものさし「Voice Ruler」（ボイスルーラー）」	「音量表示装置（持ち運び用）」は、「声の大きさのコントロールをできるようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「自分の声の音量をライトで知らせる」機能があります。これにより、「自分の声のコントロールをする」ことが難しい人が「適切な声の大きさで会話をする」ことを支援します。	d330 話すこと	d350 会話			b330 音声機能			
58	ノイズキャンセリングツール	ヘッドホン型	ⒸPELTOR/「イヤーマフ イエロー　H510A」	「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。	d160 注意を集中すること				b156 知覚機能	b140 注意機能		
59		軽量型	ⒸEAR/「イヤーフレックス」	「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」「軽量で頭に違和感がない」機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。	d161 注意を集中すること				b140 注意機能	b156 知覚機能	b265 触覚	b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能
60		イヤホン型	ⒸEAR/「エクスプレス（コード付き耳栓）」	「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」「イヤホン型で締め付け感がない」機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。	d162 注意を集中すること				b140 注意機能	b156 知覚機能	b265 触覚	b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能
61	座位補助クッション		Ⓒパシフィックサプライ/「ハートリーフクッション」	「座位補助クッション」は、「椅子に座った状態での作業を集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「骨盤を固定し、左右のバランスがとれるように調整する」機能があります。これにより、「長時間座っている」「姿勢が正しくする」ことが難しい人が「周囲から注意されることなく、姿勢を保持して、集中して作業を行う」ことを支援します。	d415 姿勢の維持				b730 筋力の機能	b740 筋の持久性機能		
62	粘着タイプの耳かき		Ⓒ山洋/「くっつけて取る綿棒50本」	「粘着タイプの耳かき」は、「不快感なく、耳の手入れを行う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「粘着剤付きで耳垢をくっつけて取る」機能があります。これにより、「耳かきをする」ことが難しい人が「不快感を軽減して耳の手入れを行う」ことを支援します。	d440 細かな手の使用	d520 身体各部の手入れ			b265 触覚	b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能	b760 随意運動の制御機能	
63	電動歯ブラシ		ⒸPanasonic/「音波振動ハブラシ ドルツ イオン EW-DE41」	「電動歯ブラシ」は、「歯の手入れを十分に行う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「歯茎にやさしく、しっかりと歯磨きができる」機能があります。これにより、「きれいに歯磨きをする」ことが難しい人が「不快感を軽減して歯の手入れを行う」ことを支援します。	d440 細かな手の使用	d520 身体各部の手入れ			b265 触覚	b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能	b760 随意運動の制御機能	
64	電気ポット		Ⓒタイガー/「電気ケトル PFY-A080」	「電気ポット」は、「安全にお湯を沸かす」ことをねらいとしたものです。具体的には、「沸騰すると自動的に電源が切れる」「倒れてもお湯漏れを抑える」機能があります。これにより、「スイッチを確実に切る」ことが難しい人が「安全にお湯を沸かす」ことを支援します。	d630 調理				b140 注意機能			

図1 ICFに基づく支援ツールマップ

( )内数字は 表1 ICF支援ツール一覧参照

心身機能 ＼ 活動・参加				第1レベル							
				第2レベル	目的をもった感覚的経験			基礎的学習			
					d110	d115	d120	d130	d140	d145	d155
					注意して視ること	注意して聞くこと	その他の目的のある感覚	模倣	読むことの学習	書くことの学習	技能の習得
第1レベル		第2レベル									
1 精神機能	全般的精神機能	b110	意識機能								
		b117	知的機能								
		b122	全般的な心理社会的機能								
		b126	気質と人格の機能								
		b130	活力と欲動の機能								
	個別的精神機能	b140	注意機能		ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54)	ICレコーダー(53) ワイヤレス補聴器(55)			電子辞書(54)		ユニバーサル定規(43)
		b144	記憶機能			ICレコーダー(53)					手順支援ソフト(7)
		b152	情動機能								
		b156	知覚機能		ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54)	ワイヤレス補聴器(55)			電子辞書(54)		ユニバーサル定規(43)
		b160	思考機能								
		b164	高次認知機能								手順支援ソフト(7)
		b167	言語に関する精神機能		ルーラー(4) テキストリーダー(5)						
2 感覚機能と痛み		b210	視覚機能								
		b265	触覚								
		b270	温度やその他の刺激に関連した感覚機能								
3 音声と発話の機能		b310	音声の機能								
		b320	構音機能								
		b330	音声機能								
7 神経筋骨格と運動に関連する機能		b730	筋力の機能								
		b740	筋の持久性機能								
		b760	随意運動制御							筆記補助具(45～47)	ユニバーサル定規(44) 筆記補助具(45～47) 柔らか消しゴム(48) シリコン製デスクシート(49) おもしろナイフ(50)

1

学習と知識の応用

知識の応用					
d160	d163	d166	d170	d175	d177
注意を集中すること	思考	読むこと	書くこと	問題解決	意思決定
			小型ひらがなキーボード(1) 音声認識・音声入力ソフト(3)		
ルーラー(4) カラーフィルター(2) パーテーション(35～36) ワイヤレス補聴器(55) ノイズキャンセリングツール(58～60)		カラーフィルター(2) ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54)			
			メモ(40)		
ルーラー(4) パーテーション(35～36) ワイヤレス補聴器(55) ノイズキャンセリングツール(58～60)		ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54)			
	マインドマップ(6)			マインドマップ(6)	
	マインドマップ(6)			マインドマップ(6)	
ルーラー(4)		ルーラー(4) テキストリーダー(5)	小型ひらがなキーボード(1)		
カラーフィルター(2)		カラーフィルター(2)			
ノイズキャンセリングツール(59～60)					
ノイズキャンセリングツール(59～60)					
			音声認識・音声入力ソフト(3) ユニバーサル定規(44) 筆記補助具(45～47) メモ(40)		

心身機能 ＼ 活動・参加				第1レベル	2			
					一般的な課題と要求			
				第2レベル	d210	d220	d230	d240
					単一課題の遂行	複数課題の遂行	日課の遂行	ストレスとその他の心理学的要求への対処
第1レベル		第2レベル						
1 精神機能	全般的精神機能	b110	意識機能					
		b117	知的機能		音声認識・音声入力ソフト(3)			
		b122	全般的な心理社会的機能					
		b126	気質と人格の機能					
		b130	活力と欲動の機能					小型ゴム製ボール(51)
	個別的精神機能	b140	注意機能		タイムエイド(24～32) パーテーション(35～36)	タイムエイド(24～32) パーテーション(35～36)	施錠管理キーケース(17) タイムエイド(24～32) ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34)	
		b144	記憶機能		手順支援ソフト(7) メモ(38～40)	忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10～11) スケジューラーiPhone アプリ(12)	手順支援ソフト(7) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10～11) スケジューラーiPhone アプリ(12) メモ(38～39)	
		b152	情動機能				施錠管理キーケース(17)	小型ゴム製ボール(51)
		b156	知覚機能		パーテーション(35～36)	パーテーション(35～36)		
		b160	思考機能			マインドマップ(6)	施錠管理キーケース(17)	
		b164	高次認知機能		手順支援ソフト(7) タイムエイド(24～32)	マインドマップ(6) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10～11) スケジューラーiPhone アプリ(12) タイムエイド(24～32)	手順支援ソフト(7) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10～11) スケジューラーiPhone アプリ(12) タイムエイド(24～32) ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34) ポケット付きカレンダー(41)	
		b167	言語に関する精神機能		メモ(37)	スケジュール管理システム(11) スケジューラーiPhone アプリ(12)	スケジュール管理システム(11) スケジューラーiPhone アプリ(12) メモ(37)	
2 感覚機能と痛み		b210	視覚機能					
		b265	触覚					
		b270	温度やその他の刺激に関連した感覚機能					
3 音声と発話の機能		b310	音声の機能					
		b320	構音機能					
		b330	音声機能					
7 神経筋骨格と運動に関連する機能		b730	筋力の機能					
		b740	筋の持久性機能					
		b760	随意運動制御		音声認識・音声入力ソフト(3) メモ(40)			

3								4			
コミュニケーション								運動・移動			
コミュニケーションの理解			コミュニケーションの表出			会話並びにコミュニケーション用具および技法の利		姿勢の変換と保持	物の運搬・移動・操作	歩行と移動	交通機関や手段を利用しての移動
d310	d315	d325	d330	d335	d345	d350	d355	d415	d440	d450	d470
話し言葉の理解	非言語的メッセージの理解	書き言葉によるメッセージの理解	話すこと	非言語的メッセージの表出	書き言葉によるメッセージの表出	会話	ディスカッション	姿勢の保持	細かな手の使用	歩行	交通機関や手段の利用
									音声認識・音声入力ソフト(3)		
			VOCA(18～23)		VOCA(18～23)	VOCA(18～23)					
ICレコーダー(53)											
ICレコーダー(53)											
メモ(37)			VOCA(18～19、1～23)		VOCA(18～19、21～23)	VOCA(18～19、21～23)					
									粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)		
									粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)		
			VOCA(20)		VOCA(20)	VOCA(20)					
			VOCA(20)		VOCA(20)	VOCA(20)					
			VOCA(20) 音量表示装置(56～57)		VOCA(20)	VOCA(20) 音量表示装置(56～57)					
								座位補助クッション(61)	持ち方補助具(缶・ペットボトル開け)(42)		
								座位補助クッション(61)			
									音声認識・音声入力ソフト(3) ユニバーサル定規(43) 筆記補助具(45～47) 柔らか消しゴム(48) シリコン製デスクシート(49) おもしろナイフ(50) 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)		

心身機能 ＼ 活動・参加				第1レベル	5					6					
					セルフケア					家庭生活					
				第2レベル						必需品の入手		家事		家庭用品の管理および他者への援助	
					d520	d530	d540	d550	d570	d610	d620	d630	d640	d650	d660
					身体各部の手入れ	排泄	更衣	食べること	健康に注意すること	住居の入手	物品とサービスの入手	調理	調理以外の家事	家庭用品の管理	他者への援助
第1レベル		第2レベル													
1	精神機能	全般的精神機能	b110	意識機能											
			b117	知的機能											
			b122	全般的な心理社会的機能											
			b126	気質と人格の機能											
			b130	活力と欲動の機能											
		個別的精神機能	b140	注意機能	ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34)							電気ポット(64)		探し物発見器(13～14) 置き忘れ防止アラーム(15～16)	
			b144	記憶機能										探し物発見器(13～14)	
			b152	情動機能											
			b156	知覚機能											
			b160	思考機能											
			b164	高次認知機能	ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34)										
			b167	言語に関する精神機能											
2	感覚機能と痛み		b210	視覚機能											
			b265	触覚	粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)										
			b270	温度やその他の刺激に関連した感覚機能	粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)										
3	音声と発話の機能		b310	音声の機能											
			b320	構音機能											
			b330	音声機能											
7	神経筋骨格と運動に関連する機能		b730	筋力の機能											
			b740	筋の持久性機能											
			b760	随意運動制御	粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63)										

7							8				9			
対人関係							主要な生活領域				コミュニティーライフ・社会生活・市民生活			
一般的な対人関係		特別な対人関係					教育	仕事と雇用		経済生活				
d710	d720	d730	d740	d750	d760	d770	d830	d845	d850	d865	d910	d920	d940	d998
基本的な対人関係	複雑な対人関係	よく知らない人との関係	公的な関係	非公式な社会的関係	家族関係	親密な関係	高等教育	仕事の獲得・維持・終了	報酬を伴う仕事	複雑な経済的取引き	コミュニティーライフ	レクリエーションとレジャー	人権	その他の特定のコミュニティライフ・社会生活・市民生活
												ポータブルオーディオプレイヤー(52)		
								パーテーション(35～36)						
												ポータブルオーディオプレイヤー(52)		
								パーテーション(35～36)				ポータブルオーディオプレイヤー(52)		

【引用文献】

障害者福祉研究会編（2002）『ICF国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－』中央法規

ICFについては，WHO（世界保健機関）が著作権を有します。

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

重度知的障害者のきょうだいへの「障害者の将来」に関する情報提供パンフレットの作成と評価

研究分担者　北村弥生　国立障害者リハビリテーションセンター

研究要旨

高校生以上のきょうだいを対象と想定し、重度知的障害者の将来に関するパンフレットを作成し、重度知的障害の施設入所者の保護者ときょうだいに配布し評価を求めた。平成23年度に重度知的障害児入所施設利用者の保護者ときょうだいを対象に調査を行った結果、「入所生の将来を心配している」と回答したきょうだいが多かったが、社会資源に関する情報には青年期から不足感を回答したためである。調査の結果、パンフレットの内容は妥当と評価されたが、保護者ときょうだいの不安を解決するには及ばず、特に、きょうだいがいない保護者からの強い不安が回答された。これらの結果は、保護者およびきょうだいに対する入所者の将来に関する課題を整理して対処の方向性を示すだけでなく、課題解決に向けた支援を検討する必要があることを示唆する。

A. 研究目的

障害児（者）・慢性疾患患児（者）のきょうだいには多様な課題があることが知られている。きょうだいの多様な課題とは、親の関心が障害児に集中するための寂しさ、障害に関する情報不足による必要以上の不安、学校や地域で出会う偏見、親亡き後の障害者の後見の負担などである[1]。学童期のきょうだいへの支援方法としては、グループワークにより経験･感情･対処方法を共有することの有効性がわが国でも実証されている[2]。また、学童期にきょうだいを対象としたグループワークに参加したきょうだいは、高校生まではその効果が持続していることも実証されている[3]。

一方、学童期以降のきょうだいの課題への対処は、個々の事例で必要に応じて実施されているがプログラムとしては米国ボストンの成人きょうだいグループが作成した10回からなるグループワーク以外には知られていない[4]。筆者は、平成 23 年度に、重度知的障害者施設入所者の保護者ときょうだいを対象に課題とニーズを調査し、４つの結果を得た。第一に、対照群に比べ自己概念は母親群で有意に低く、きょうだい群と父親群では有意差はなかった。第二に、「入所生の存在が職業選択及び結婚に影響した」というきょうだいは少数であった。第三に、「入所生の将来を心配している」と回答したきょうだいが多かったが、社会資源に関する情報には青年期から不足感を回答した。第四に、きょうだいに対する直接

支援を求める回答は、きょうだいからも保護者からも少なかった[5]。

そこで、きょうだいから心配が回答された「入所生の将来」について一般的な課題を小さなパンフレットとして編集し、きょうだいおよび保護者に評価を得るとともに、パンフレットを契機として、親子で入所生の将来についての会話が行われたか否かを調査した。

B. 対象と方法

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局秩父学園の入所者 50 名中きょうだいに関する連絡が好まれないことが分かっている２名を除いた 48 名の保護者に対し、製作したパンフレットと調査用紙を 2 部ずつ送付した。きょうだいがいない入所者の保護者にもパンフレットと調査用紙は送付した。打診に先立ち、パンフレットと調査用紙について秩父学園職員と入所者の親の会の会長の了解を得た。

パンフレットはA4用紙１枚に両面印刷し、３つ折であった（図１）。パンフレットの内容は、米国ボストンの成人きょうだい自助組織が作成したグループワークのテーマ８項目（「住居」「家族内コミュニケーション」「後見人制度と財産管理」「仕事と余暇」「友人・パートナー」「遺伝相談」「健康管理と保険」）に、障害に関する総論として 2 項目（「障害者施策の変化」「生涯発達」）、国内の血友病患者ときょうだいに対する研究結果から得られた 1 項目「遺産相続」を追加した。

質問内容は、保護者に対しては、１)パンフレットの 11 項目に対する５段階評価とコメント、２）不足する内容があるか、３）きょうだいに見せたくない項目や記載があるか、４）きょうだいに渡したか、５）きょうだいとパンフレットについて話をしたかであった。きょうだいに対しては、１）パンフレットの11項目に対する4段階評価とコメント、２）不足する内容があるか、３）親とパンフレットについて話をしたかであった。また、１）入所者の年齢、性別、障害、２）入所者の将来に関して不安なことも調査した。

C. 結果

１．対象者の属性

保護者15名（うち、1名はきょうだい）から回答を得た（回収率30%）。15名中5名は、きょうだいがいない家庭で、10名はきょうだいに渡したと回答された。全員が、入所者は30歳代後半以上で、母親の年齢は50歳代後半以上であった。

２．パンフレットの評価

パンフレット11項目の評価の平均は3.6点（5点満点）で、「障害者施策の変化」と「後見人制度と財産管理」が最も高得点であった。「不足する内容」「きょうだいに見せたくない項目や記載」の指摘はなかった。

３．パンフレットをきっかけにした家族での会話

「きょうだいとパンフレットについて話

をした」の回答はなく、「すでに話している」5 名、「話す必要はない」5 名であった。

４．将来への不安

すべての保護者は入所生の将来の生活が心配であると回答し、きょうだいがいる 9 名の親のうち 8 名はきょうだいの負担が心配であると回答した。すでに親が死亡し、きょうだいが後見している回答者では「次の施設が心配」「きょうだいについての心配はない」と回答した。

D． 考察

回答者のすべてが入所生の将来への不安を自由回答欄に記述し、ほとんどがきょうだいへの負担を記述した。パンフレットは課題の所在を整理し対処方法の方向性を示すように設計したが、不安を解消することはできなかったと考えられる。また、親ときょうだいの話し合いや、きょうだい同士のグループワークに発展することも、直接にはなかった。したがって、課題を整理した後の対処の支援方法を検討することは今後の課題である。

E．健康危険情報

特になし

F．研究発表

1． 論文発表

北村弥生．重度知的障害者のきょうだいへの「障害者の将来」に関する情報提供．特殊教育(投稿予定)．

2． 学会等発表

北村弥生．重度知的障害者のきょうだいへの「障害者の将来」に関する情報提供パンフレットの作成と評価．日本特殊教育学会.2013．

G．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

なし

1. 障害のある人のための施策の変化

障害のある人のための国、都道府県、市町村によるサービスは時代と共に変化しています。今は、家族がするしかないことも、制度が変わってサービスを利用できるようになる場合もあります。第二次大戦までは、障害のある人への公的なサービスは、ほとんどありませんでした。逆に、義務教育を受けなくてもよいという制度（就学猶予）がありました。障害があっても、特殊学校で義務教育を受けることが保障されたのは 1979 年からです。2006 年に、国連では障害者権利条約が採択され、日本でも、この条約の批准のために、法律の改正が検討されています。これらの変革では、障害のある人、家族、支援者の意見も取り入れられています。

自閉症と発達障害に関する情報提供機関としては国に発達障害情報・支援センターが、相談・支援機関としては都道府県に発達障害者支援センターがあります[1]。

2. 住居の選択

一般的には、障害のある人の生活の場を「施設から地域へ」移すことが勧められています。施設では運営上の制約が多く、食事、入浴、活動の時間や方法が決められていて不自由だという不満があるからです。一方で、地域で生活をするためのサービスが整備されていないために、家族に負担がかかりすぎる場合もあります。

住居の選択肢には、障害者施設、中間的ケア施設、グループホーム、半独立の生活、家族との同居、独立した生活があります。グループホームは、地域で数人の障害のある人が支援スタッフと一緒に住む形式です。他にも色々な形式が提案されています。費用、職員、待機リスト、食事、衣服、性、習慣など個人的な問題も、住居の選択には関係します。

3. 家族内のコミュニケーション

障害のこと・障害により心配されること･家族間の関係に関して、家族の中で話し合うのは難しいことが知られています。きょうだい、障害のある人、父親、母親、重要な支援者の間で、問題となる課題を話し合うことは重要です。家族の問題には、色々な要素があるので、家族外の専門家や同じ立場のきょうだいから経験を聞くのも役に立ちます。

4. 仕事と活動・余暇

障害のある人の能力を生かすための地域での活動や就労の機会は大事です。福祉作業所、援助つき雇用、一般就労などがあります。収入は少なくても、仕事や活動は、生きがいや交流の機会となったり、余暇活動のための動機になります。

5. 後見人制度と財産管理

障害の程度により、障害者年金を受け取ることができます。障害があって働けなくても無収入とは限りません。年金を管理したり、サービス費用を支払ったり、生活に必要な出納管理を障害のある人に代わって行う役割を「後見」といい、家族以外の人に依頼することもできます[2]。高齢者の後見人は他人に依頼する場合が 4 割を超えています。障害は「他人には分かり難い」と考えがちですが、後見をするチームの一員として、きょうだいは精神的な配慮を分担する方法が勧められています。

6. 友人・パートナー

友人や配偶者に、自分の家族のことを分かってもらうのは、一般にも難しいものです。家族に障害があるとなおさらです。いつ、どんな風に説明をしたらいいのか、相手はどんな風に受け止めるのかで迷うことや嫌な経験をする場合もありますし、思ったよりもあっけなかったという場合もあります。

7. 遺伝相談

遺伝に関する疑問をもち悩んでいるきょうだいは多くいます。「自分の子どもが同じような障害をもつ可能性は普通より高いのか？」「私にも何か異常があるのではないか？」という疑問です。

主治医の多くは、きょうだいに障害について説明をすることには好意的です。しかし、診療科目として「きょうだいのための相談」はありませんので、親御さんに相談していただくのが一般的な入り口です。しかし、「心配していることで、さらに親を心配させるのではないか」と考えるきょうだいが多く、専門機関から説明を受けにくくなっています。また、医学的な説明を聞くのではなく、心理的な相談がしたい場合もあります。遺伝相談（遺伝カウンセリング）は疾患別の場合が多いですが、インターネットで検索することができます[3]。

8. 遺産相続

日本に特有の課題として、親の介護負担が、きょうだいだけにかかることがあります。また、親の遺産の遺し方や使い方が偏ることで葛藤が残ることがあります。

9. 健康管理と保険

障害がある人は、健康保持に知識を得にくかったり、症状を説明し難いことから、病気の発見が遅れるのではないかと心配されることがあります。また、保険に入れないこともあります。これらに対応して、日本自閉症協会は互助会を作り、「知的障がい・発達障がいのある人のための総合保険」も作られています[4]。

10. 生涯発達

人間は、一生、発達し続けます。障害のある人は、ゆっくりと発達する場合が多いですが、成人してからも少しずつ変化します。進学、就職、結婚、子育てといった新しいライフイベントを経験する機会が少ないので、同世代の人との差は、年齢があがるにつれて開いて見えることが多いですが、変化をしないわけではありません。

【参考資料】
1. 発達障害者情報・支援センター
http://www.rehab.go.jp/ddis/
2. 成年後見制度について（埼玉県）
http://www.pref.saitama.lg.jp/site/3-seinen-kouken/
3. 信州大学遺伝ネットワーク
http://www.shinshu-u.ac.jp/hp/bumon/gene/genetopia/index.htm
4. 知的障がい・発達障がいのある人のための総合保険
http://www.z-kyosai.com/

【連絡先】
国立障害者リハビリテーションセンター研究所
障害福祉研究部　北村弥生
Kitamura-yayoi@rehab.go.jp
Tel: 04-2995-3100 内線 2530　FAX: 04-2995-3132

～ごきょうだいへ～

障害のある人の将来

このパンフレットには、多くの家族が心配している「障害のある人の将来」に関する話題を紹介します。これらの話題は話す機会が少ないので、ここに明確にすることで、家族、支援者、友人、同じきょうだいの立場の人と話すきっかけにしていただきたいと思います。アメリカでは、成人したきょうだい同士で、これらの課題を、ひとつずつ話し合うプログラムが開発されています。同じ立場のきょうだい同士で話す機会は、あまりないので、連絡先にお問い合わせいただければ、日本版のプログラム開発をさせていただきたいと考えています。

本パンフレットは、厚生労働科学研究「知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究」助成金（研究代表者：深津玲子）により作成しました。

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年
深津玲子	医療と福祉、労働、教育との連携のために医療者が知っておくべき基礎知識　ASD成人の社会参加に向けて	神尾陽子	成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル	医学書院	東京	79-83	2012

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
深津玲子	精神科外来での発達障害併存症例へのアプローチ，医療－福祉連携による、発達障害成人に対する福祉サービス提供の試み	外来精神医療	11(1)	28-29	2011
高橋秀俊，深津玲子，神尾陽子	成人ADSの社会参加に向けて	精神科	21(6)	687-691	2012
四ノ宮美惠子，小林菜摘，深津玲子	障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅰ）－青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から－	日本発達障害学会第47回研究大会，発表論文集		131	2012
小林菜摘，四ノ宮美惠子，深津玲子	障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（Ⅱ）－青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から－	日本発達障害学会第47回研究大会，発表論文集		132	2012
鈴木さとみ，深津玲子，四ノ宮美惠子	自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査－ICF-Basedアセスメントの開発と試行による一考察－	日本発達障害学会第47回研究大会，発表論文集		130	2012
車谷洋，深津玲子，四ノ宮美惠子，小林菜摘	就労移行支援を要する発達障害成人の上肢機能の調査－年代平均値および標準値との比較より－	日本発達障害学会第47回研究大会，発表論文集		95	2012
小林菜摘，四ノ宮美惠子，深津玲子	障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援モデルの検証の試み	第20回職業リハビリテーション研究発表大会，発表論文集		335-336	2012

鈴木さとみ,深津玲子	自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究ICF-Basedアセスメントを用いた調査による一考察	第53回日本児童青年精神医学会総会,抄録集		337	2012